

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書 I

中原遺跡

岩野A遺跡

岩野E遺跡

1986

新潟県教育委員会

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書 I

中原 遺跡

岩野 A 遺跡

岩野 E 遺跡

1986

新潟県教育委員会

## 序

北陸自動車道は昭和58年に上越インターチェンジまでが開通し、昭和63年度には全線開通の見通しとなり、新潟県を含む北陸圏は高速交通時代の恩恵に浴するのも間近となった。本書は北陸自動車道の建設に伴い、新潟県が日本道路公団から委託を受けて実施した発掘調査の報告である。

西頸城地方は、国指定史跡長者ヶ原遺跡をはじめ古い時代の文化財が数多く存在するところであり、先人達によって調査研究が進められ、その成果が蓄積してきた。

今回の調査によって、西頸城地方における縄文文化の一端が明らかになり、縄文時代早期・前期には当地方は北陸南西部の文化によく類似することが確認された。本県の縄文時代早期・前期の様相は、著名な遺跡が多数知られているにもかかわらず、いまだ不明瞭なところが多く、今後追求される問題は殊に多様であると思われる。本調査の成果が考古学的研究にひとつの新知見を加え得るすれば意義深く、本書が広く研究に活用されることを願うものである。

なお、本調査に際し、多大なる御協力・御援助を賜った糸魚川市教育委員会並びに市民の方々、また計画から発掘調査に至るまで格別の配慮を賜った日本道路公団に対し、衷心より謝意を表する次第である。

昭和61年5月

新潟県教育委員会

教育長 有磯邦男

## 例　　言

1. 本書は北陸自動車道の建設に伴う新潟県糸魚川地区の発掘調査報告書の第一冊目である。糸魚川地区は昭和60年度から調査を開始し、60年度には小出越遺跡・中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡・岩野下遺跡・原山遺跡・三厘原B遺跡・塚の腰遺跡の調査を終了した。
2. 本書は糸魚川地区のうち、糸魚川市大字大和川字中原及び岩野に所在する中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積はそれぞれ、14,600m<sup>2</sup>、750m<sup>2</sup>、1,150m<sup>2</sup>である。
3. 岩野A遺跡は、工事用道路部分であったため、当初の計画図では明確でなかった地点であったが、昭和60年度に入り、工事用道路にかかることが判明し、発掘調査を実施することとなったものである。また岩野E遺跡は、岩野下遺跡調査中に発見された新遺跡である。
4. 発掘調査は新潟県が日本道路公团より受託し、新潟県教育委員会が主体となって実施した。調査体制は以下のとおりである。

総括	新潟県教育庁文化行政課長	高橋 安
管理	同	課長補佐 田中 浩一
庶務	同	主事 高橋 幸治
調査指導	同	埋蔵文化財係長 中島 栄一
調査担当	同	文化財専門員 高橋 保
調査職員	同	文化財専門員 竹田 和夫
調査職員	同	文化財専門員 小池 義人

5. 出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保管している。遺物の註記はそれぞれの略号として、中原遺跡は「中」、岩野A遺跡は「IWA」、岩野E遺跡は「IWE」を付し、出土地点・一連番号を記した。岩野E遺跡では原則として各グリッド内で遺物1点ごとに一連番号を記した。
6. 石質の鑑定については、新潟県教育センター地学研究室（現県立江南高校）坂井陽一氏の御教授を賜った。
7. 石器の実測図については磨り面・敲打面をスクリーントーンで示し、必要に応じてその範囲を矢印で表した。磨製石斧は整形擦痕の方向を器面に矢印で示した。
8. 本書で示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図面のうち既成の地図を使用したものは、それぞれの図に出典を記した。その他は日本道路公团が測量した地形図を用いた。
9. 図版の空中写真是アジア航測株式会社撮影のものを使用させていただいた。

10. 遺物整理は高橋保・小池義人を中心に行い、これに池田敏郎・柳恒雄・竹田和夫が加わった。

11. 報告書の執筆分担は、第II章1 柳恒雄、第II章2、第III章A 4、B 2、C 2 竹田和夫、  
第III章A 6 b、B 5 c、C 5 b、C 6 b 小池義人、第III章A 5、C 4 高橋保・小池義人の  
ほかは高橋保である。

発掘調査から本書の作成にいたるまで下記の方々から貴重な御教示を賜った。厚く御礼  
申しあげる。 (敬称略 五十音順)

金子拓男、小林重義、小林達雄、駒形敏朗、齊藤基生、渋谷昌彦、島田靖久、  
土田孝雄、新潟大学考古学研究室(石原正敏、小熊博史)、芳賀英一、服山玲子、  
前山精明、矢島道彦、山本正敏

# 目 次

第 I 章 序 説.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
第 II 章 遺跡周辺の環境	
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	6
第 III 章 遺跡各説	
A. 中原遺跡 .....	8
1. 遺跡の位置及びグリッドの設定.....	8
2. 確認調査.....	8
3. 層序.....	10
4. 調査の経過.....	10
5. 道構.....	12
6. 遺物.....	17
a. 土器・その他.....	17
b. 石器.....	21
7. まとめ.....	30
B. 岩野 A 遺跡.....	31
1. グリッドの設定.....	31
2. 調査の経過.....	33
3. 層序.....	33
4. 道構.....	33
5. 遺物.....	36
a. SX14出土遺物.....	36
b. その他の遺物.....	38
c. 石器.....	38
6. まとめ.....	40
C. 岩野 E 遺跡.....	41
1. グリッドの設定.....	41
2. 調査の経過.....	41
3. 層序.....	42

4. 遺構	42
5. 遺物	50
a. 土器(縄文土器・その他の土器・須恵器・土師器・他)	51
b. 石器	60
6. まとめ	73
a. 遺構について	73
b. 石器について	74
c. 土器について	75
d. 結語	77
引用参考文献	78

## 挿 図 目 次

1. 遺跡の位置及び周辺の地形	3
2. 周辺の遺跡	5
中原遺跡	
3. 小グリッドの名称	8
4. 第一次確認調査出土遺物写真	8
5. " "	8
6. グリッド設定図	9
7. 遺構配置図	11
8. S K 2 実測図	12
9. S D 4 " "	12
10. S D 5 " "	13
11. S D 6 " "	13
12. S K 7 " "	13
13. S X 9 " "	14
14. S X 11 " "	14
15. S K 12・13実測図	14
16. S D 10実測図	15
17. S D 10土層断面図	15
18. S K 15実測図	16
19. S K 16 " "	16
20. S X 17・18・19実測図	17

21.	S X20実測図	17
22.	土器拓影図	18
23.	土器実測図	19
24.	陶磁器実測図	20
25.	絆石実測図	20
26.	ナイフ形石器実測図	21
27.	石器実測図（1）	22
28.	〃（2）	23
29.	〃（3）	25
30.	〃（4）	27
31.	〃（5）	28
32.	剥片法量分布図	29
岩野A遺跡		
33.	岩野A遺跡・E遺跡グリッド設定図	31
34.	造構配置図	32
35.	土層柱状図	33
36.	S K11実測図	33
37.	S K1～S K10実測図	34
38.	S K12実測図	35
39.	S K13実測図	35
40.	S X14 〃	35
41.	S K15 〃	36
42.	S K16 〃	36
43.	S K17 〃	36
44.	S K18 〃	36
45.	S K19 〃	36
46.	土器・土製品実測図	37
47.	石器実測図	39
岩野E遺跡		
48.	S K1実測図	42
49.	S K2 〃	42
50.	Eライン北壁土層断面図	42
51.	造構配置図	43
52.	S K3実測図	44
53.	S K4 〃	44

54. S K 5 実測図	44
55. S K 6 " .....	44
56. S K 7 " .....	45
57. S K 8 " .....	45
58. S K 9 " .....	45
59. S K10 " .....	45
60. S K11 " .....	45
61. S K12 " .....	46
62. S K13 " .....	46
63. S K13出土土器拓影図	46
64. S K14実測図	46
65. S K15 " .....	47
66. S K16 " .....	47
67. S K17 " .....	47
68. S K18 " .....	47
69. S K19 " .....	48
70. S K20 " .....	48
71. S K21 " .....	48
72. S K22 " .....	48
73. S K23 " .....	49
74. S K24 " .....	49
75. S K25 " .....	49
76. 出土遺物平面分布図	50
77. 繩文土器類別平面分布図	51
78. 壺型文土器拓影図	51
79. 土器 (1) .....	52
80. " (2) .....	53
81. " (3) .....	54
82. " (4) .....	55
83. " (5) .....	57
84. " 砥石(6) .....	59
85. 石器実測図 (1)	62
86. " (2) .....	64
87. " (3) .....	65
88. " (4) .....	66

89. 石器実測図 (5) .....	67
90. " (6) .....	68
91. " (7) .....	70
92. " (8) .....	71
93. 剥片法量分布図.....	72

## 図 版 目 次

1. 遺跡空中写真  
中原遺跡
2. SK1、SK2、SD3、SD4
3. SD5、SD6、SK7、SX9
4. SK12、SK13、SX14
5. SK15、SK16
6. SK17、SK18、SK19、SK20
7. SD10
8. 繩文土器
9. 繩文土器、近世陶器、近世陶磁器、石器(石鏃、玦状耳飾、ナイフ他)
10. 石器(打製石斧、磨製石斧)
11. 石器(石錘、磨石、石皿、礫器他)
12. 石器(搔器他)、絆石、繩文土器
13. 剥片  
岩野A遺跡
14. SK1~10・12、SK11、SK13、SX14
15. SK15、SK16、SK17、SK18
16. SK19、発掘状況(西区、東区)
17. SX14出土土器、他
18. 土師器底部、石器  
岩野E遺跡
19. 遺跡遠景、土層断面
20. SK1、SK2、SK3
21. SK4、SK5、SK6、SK7
22. SK8、SK9、SK10
23. SK11、SK12、SK13

24. S K14、S K15、S K17
25. S K16
26. S K18
27. S K19
28. S K20
29. S K21
30. S K22、S K23
31. S K24
32. S K25、完掘状況
33. 土器（第II類a、第II類a裏）
34. 土器（第II類a、第III類、第III類裏）
35. 土器（第II類b、第II類b裏、第IV類）
36. 土器（第IV類裏、第II類b、第IV・V類、第IV・V類裏）
37. 土器（第II類c、第VII類）
38. 土器（第VII類a）
39. 土器（第VII類a・b他）
40. 土器（第VI類）、土師器、押型文土器他
41. 須恵器、他
42. 磨製石斧、打製石斧
43. 磨石
44. 石錐、凹石、石皿
45. 石器（礫器・剥片他）
46. 石器（石皿・二次加工を有する剥片・块状耳飾）、剥片
47. 円碟、磨製石斧素材礫他、剥片
48. 剥片

# 第Ⅰ章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

日本海側を新潟市から滋賀県米原町まで結ぶ北陸高速自動車道は、昭和42年11月に黒崎～長岡間の基本計画が発表された後、昭和44年1月には、糸魚川～朝日間（第7次区間）の基本計画が発表された。昭和49年3月に日本道路公團（以下公團）上越工事事務所長から上越～糸魚川間の文化財の調査依頼があり、これに対して分布調査結果の回答を行ったが、この時点ではまだ路線の発表はなされておらず、幅をもった区間の調査で、糸魚川市内では25ヶ所、青海町では5ヶ所の遺跡が示された。昭和52年7月12日、日本道路公團新潟建設局において、上越～朝日間路線選定打合せ会議が行われ、非公開ではあるが5万分の1の路線図が初めて示され、糸魚川市内では3遺跡（三屋原、原山I、道者ハバ）がかかるものと予想された。そしてこのような部内会議を経て、昭和53年7月1日に路線発表がなされたのである。

昭和54年4月には第6・7次区間の現地踏査を行い、またその後昭和58年4月にも分布調査を実施し、数多くの新遺跡が発見された。この調査結果は、昭和58年5月11日付け教文第345号で公團に通知され、このうち糸魚川地区の遺跡数は13（うち新遺跡は7）となった。この通知に基づいて、昭和58年11月17日、公團との会議が行われ、糸魚川地区については、昭和59年度に確認調査を実施し、昭和60～61年度に発掘調査を実施してもらいたい旨工程表をもって要望がなされた。

昭和59年2月に再び対公團会議が開催され、糸魚川市内では計12ヶ所の遺跡がかかることを提示すると共に、今後も分布・確認調査の必要がある旨を伝えた。一方公團側も早急に確認調査を実施してほしい旨要望が出された。

昭和59年6月13日、日本道路公團新潟建設局長高藤傳は、県知事君健男に対して、北陸道全線開通を当初予定の昭和65年度から昭和63年度に早めたい旨協力要請がなされ、君知事も同意したため、発掘調査予定も再検討をせまられることになった。今後の見通しを立てるためにも早急に確認調査が必要となり、公團の協力を得て、9月初旬までに確認調査を完了させたかったのであるが、ほとんどのところで、用地買収がなされておらず、不十分ではあるが確認調査を完了することができたのは11月になってからであった。そしてその取扱いについて昭和59年11月29日付け教文第917号で公團に通知を行った。この通知を受けて翌昭和60年2月21日に公團と協議が行われ、各遺跡についての問題点の検討が行われ、用地買収は発掘調査開始までに完了する前提で4月より発掘調査に着手することとなり、とりえず、立ノ内遺跡、小出越遺跡から入ることとした。その他、中原遺跡、岩野下遺跡、三屋原遺跡、三屋原B遺跡、塚の腰遺跡、四割遺跡、杉沢遺跡、大塚遺跡、原山遺跡については、工事工程を見ながら、順次調査に入っていくことで合意した。

## 第II章 遺跡周辺の環境

### 1. 地理的環境

中原・岩野A・岩野Eの3遺跡は、新潟県南西部の糸魚川市に発達する海岸段丘上にある。早川・海川両河川にはさまれた位置にあり、南は西頸城山地に接し、北は日本海に面する。

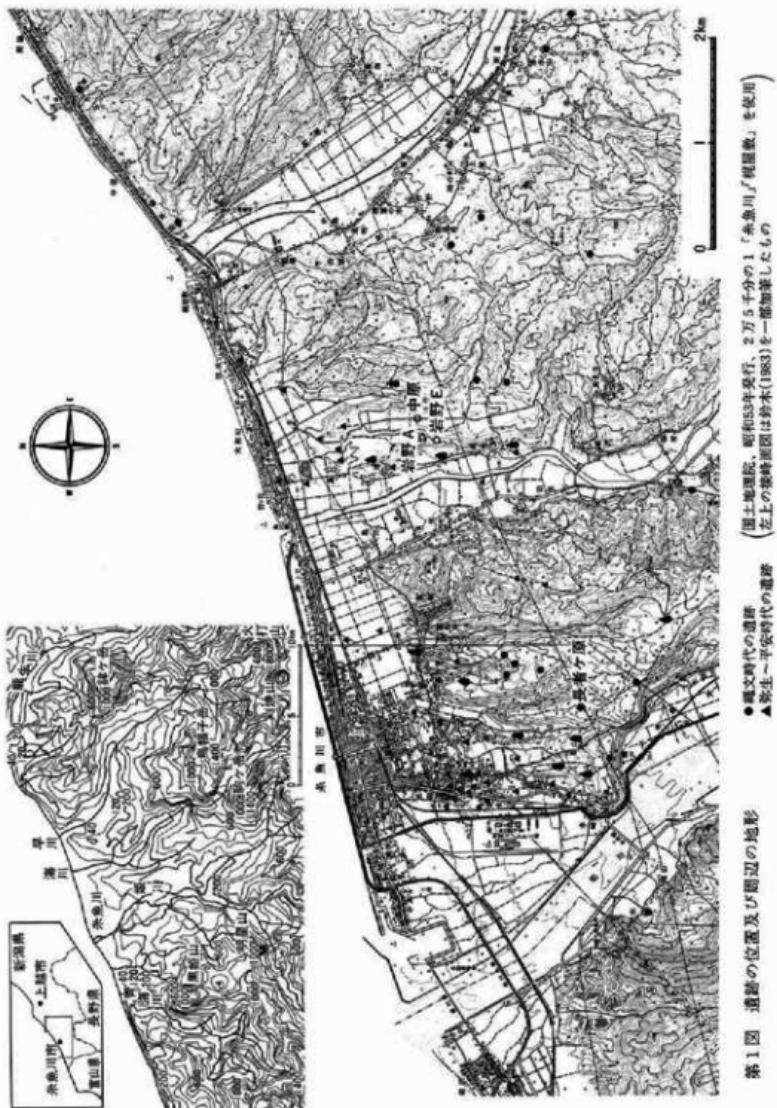
ここより西約3kmの位置に糸魚川市の中心地があり、南方の長野県大町市へ通する国鉄大糸線が発する。この大糸線および国道148号線は、古くから「塩の道」として往来のあった姫川の谷に他ならない。姫川に沿って、いわゆる糸魚川一静岡構造線がほぼ南北方向に走り、地質的に東北日本と西南日本とに分しているが、糸魚川西頸城地方では、これを境に、東を西頸城山地、西を白馬山地として地形区分する（新潟第四紀研究グループ1971）。

西頸城山地は、海岸線から南へ高度を増し、火打山（2462.0m）を最高点として長野県境に達する。東は高田平野に接する。焼山火山（2400.3m）をのぞけば、本山地は新第三紀の堆積岩および石英閃緑玢岩や安山岩などの火山岩類から形成されている。この新第三系は、北北東一南南西、北一南方向の褶曲構造が卓越しているが、地形にはこれが反映しておらず、北西一南東方向の河川（東から能生川、早川、海川など）および山地列が発達する。接峰面図からわかるように、本山地には、標高400m前後、1,000m前後で起伏に変化がみられる。これは地層の硬軟によるところが大きい。鉢ヶ岳（1316.3m）と権現岳、駒ヶ岳（1487.4m）、島帽子岳（1450.5m）、雨飾山（1963.2m）などは、火山岩類からなる尖峰であるし、海岸地域の標高約400m以下の小起伏山地は、泥岩層が堆積する地すべり地帯である。

白馬山地は、富山・長野との3県境に白馬岳（2933.0m）をもつ大起伏山地で、北アルプスの最北端にあたる。急崖をもつて日本海に没するところに、険阻な親不知の海岸があり、古くから交易の障害となってきた。海岸からそり立つ黒姫山（1221.5m）や明星山（1188.5m）が石灰岩の山であるように、本山地は、いくつかの断層で接する古生代～中生代の石灰岩層や頁岩・砂岩層などからなり、その断層部に近いところでは、結晶片岩類の分布と蛇紋岩の貫入がみられる。さらに、それらの中から滑石やヒスイ輝石岩塊が産することがある。青海川・小滝川流域は、主なヒスイの産地である。

長者ヶ原遺跡をはじめ、この地方の遺跡群のはほとんどは、西頸城山地の前面にある海岸段丘上に分布する。海岸段丘は、西頸城山地に源をもつ比較的大きな早川、海川、姫川の河口部に数段となって分布し、とくに姫川右岸、海川右岸で発達がよい。中原・岩野A・岩野Eの3遺跡は、この海川河口右岸の段丘面上にある。洪積段丘を5段に区分した鈴木（1983）によると、中原遺跡の地形面は上位より數えて3段目、岩野A・岩野E両遺跡の地形面は同じく4段目の段丘面にあたるが、大きくみれば中位段丘群に属する。いずれも、海川に平行した舌状の地形

面で、海岸に向かってゆるく傾斜している。中原遺跡は、東側を前川で限られ馬の背状に独立した傾斜約40%の台地上に位置する。標高は約68mである。また、岩野A・岩野E両遺跡は、



中原遺跡の台地の西直下の台地上に位置し、これとは高さ約20mの段丘崖で限られている。西方の海川とその沖積平野に向かってやや傾斜するとともに、海岸に向かって約30%で傾斜する。海川現河床との比高は約35mで、岩野A・岩野E両遺跡の標高はそれぞれ約46m・49mになる。

これらの周辺の遺跡を概観する。まず、中原遺跡の南東方向で、最高位段丘崖の緩斜面上に小畠遺跡、前川対岸の丘陵緩斜面上に小出越遺跡がある。標高100m前後の小畠遺跡では縄文時代前・中期の土器や石斧、块状耳飾、標高50m前後の小出越遺跡では縄文土器や土師器・須恵器などが出土している。中原遺跡と同一の台地上には、その先端部に中原A遺跡がある。ここは、標高40m前後で、前面を段丘崖で限られており、海岸からは1km程しか離れていない。土師器、須恵器が出土する奈良・平安時代の遺跡である。岩野A・岩野E両遺跡と同一の台地上には、その先端部に山崎A遺跡、山崎B遺跡がある。前者は、前面に崖をもって沖積面下に埋没する形態の台地上にあり、背後の中原A遺跡とは段丘崖をはさんで接する。標高は25m前後である。山崎B遺跡の西の直下には一段低い台地があり、ここに山崎C遺跡がある。山崎の3遺跡は、いずれも土師器、須恵器が出土する奈良・平安時代の遺跡である。また、同一の台地上であるが、海岸から約2.5km入った標高50m前後のところには坂井A遺跡がある。ここからは、縄文土器や石器、さらに奈良・平安時代の土師器、須恵器が出土している。そして、この西の直下の一段低い台地上には、坂井B遺跡があり、奈良・平安時代の土師器、須恵器が出土する。前述の山崎C遺跡や坂井B遺跡の台地は、鈴木（1983）が分類した洪積段丘最下位の5段目であり、一般的には低位段丘にあたるが、この台地上に縄文時代の遺跡も発見されている。山崎C遺跡の南の岩野B遺跡がそれで奈良・平安時代の土師器、須恵器の他に、縄文土器や石器が出土している。一方、海岸部の低地にも遺跡がみられる。しかし、古屋敷A・古屋敷B、岩野C、岩野下の各遺跡は、段丘化した沖積面上にあり、岩野下遺跡は、海川現河床から10m近い比高の位置にある。また、海岸沿いに発達する砂丘上にも、六反田遺跡、前波遺跡がある。砂丘の内陸側斜面で、標高7m前後の位置にある。これらの低地の遺跡からは、土師器や須恵器が出土している。

本3遺跡をはじめ、以上の遺跡は、時代を異にするが、台地上や微高地上を選んで立地している。背面は山地と接し、前面は細長い砂浜と沖積平野で開けている。海岸までは1~2kmしか離れていない。この条件がそれぞれの時代に適したものであつたらしく、階段状の台地のはば全面は遺跡で埋められていると言つてもよい。しかし、西の親不知海岸、東の高田平野との境の断崖海岸、そして、信越国境の山地は、古くから周辺の地域との交易に障害をもたらしてきたにちがいない。また、海岸に近いので、浜風とくに冬の強い季節風を直接受ける。融雪は比較的早く、3月末には農耕が始まるものの、積雪は1mを越え、高い台地や背後の山地に入るとその量はかなり多くなる。昭和49年7月28日、信越国境に近い焼山が水蒸気爆発をおこし、火山を広く降らせたのは記憶に新しい。本地域は風向きの関係で直接の被害は少なかつたが、過去にも数回にわたって爆発をくり返してきた。地すべりも含め、自然災害を無視できない地域であると言えよう。

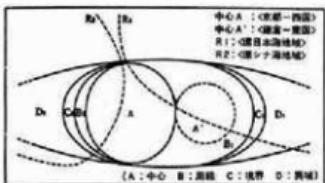


第2図 周辺の遺跡 (原図:糸魚川市役所発行 1:10,000地形図 昭和55年)

## 2. 歴史的環境—糸魚川市域をめぐる地域概念

新潟県域の前近代史において糸魚川市域の歴史的特質を探る事の重要性について述べてみたい。既に『糸魚川市史』通史編により市域の歴史は詳述されており、また、頸城郡一円にふれた最新の成果として県教育委員会発行の『上新バイパス発掘調査報告Ⅰ・今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』(1984) 所収「文献からみた古代・中世の頸城地方」があげられる。このような先行研究をふまえ、制約されている文献史料のみならず、考古学・民俗学の成果を導入し歴史の空白部分をうめていく過程で、当該地域を巨視的に展望し、どのように位置づけられるかを明確にした上で、はじめて「地域」や「文化」を語る事が可能である。最近これらについての従来の概念に修正をせまる注目すべき新提言がなされている。

例えば、①環日本海文化論(森 1983a、1983b、1984、1985)、②東国・西国論(網野 1982、1984、1986)、③北陸地域史論(浅香 1978、1981)、等の各側面からの位置づけなどである。②を例にとれば、網野善彦氏の論文「東国と西国・地域史研究の一視点」では北陸道の場合越後までは東国的であり、西の越中・能登・加賀などの諸国については尾張などに似た中間的特質を持っていたのではなかろうかと述べている。また伊藤喜良氏も駿河・信濃・越後などを国境一東国国家と西国国家の国境とする意識もはっきり生きていた事を「室町期の国家と東国」と題した研究報告で説いている。(伊藤 1979)そもそも新潟県自体が北陸型・関東型・東北型(赤城 1984、樺山他 1985)等、諸タイプの文化が混在しており、「地域」や「文化」を論ずるのは容易ではない。



中世後期の地域モデル(村井章介「中世日本判島の地域空間と国家」思想1985年6月号より)

このような状況下、前近代史において特に研究が盛んな中世史の場合、最近村井章介により空間領域について次のようなモデル図が設定されている。この図は13世紀以降の列島上の変貌する地域空間を対象としている。Aは京都一西国を中心とし、A'は鎌倉一東国の二次的中心であり、この二つの中心を周縁(B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>)・異域(C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>)・異域(D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>)の三つの長円が包みこんでいる。双曲線モデルのR<sub>1</sub>は環日本海地域、R<sub>2</sub>は環シナ海地域という内海をとりまく地域である。このように二つのタイプのモデルが重なり合い干渉しあう構造を呈している。この中で糸魚川市域は現在のところA・A'・Rの接する部分に位置づけられよう。

ただ注意すべきは同じ円の中でも複雑な動きが見られる事である。例えば青石板碑に注目してみると県内では魚沼郡に集中しているが、伝來の系路としては上野→越後ルートが想定され、関東文化圏の末端に位置づけられる。また、糸魚川市域にも板碑があるが、これは信濃文化圏

の北方周縁として位置づけられ、信濃→越後ルートを想定している。(赤沢 1984)

以上一連の諸研究はあくまでも試論であり、それらを補足・修正する意味で今後刊行される糸魚川地区の埋蔵文化財発掘調査報告書の成果は重要である。

これらの多様な地域概念は歴史時代のみならず、本報告書の記述の中心となる縄文時代でも検証できる。上越地方における縄文時代を概観すると縄文早期は、あまり確認されておらず、今回報告する岩野E遺跡ほか数遺跡にすぎないが縄文時代前期に入るとかなり多くの存在が知られる。系統的には北陸のものが多くみられ、また一方で庭平遺跡のように信州の有尾式類似のものも見られる。縄文時代中期に入つても長者ヶ原遺跡をはじめとして北陸の影響が強いが、一方では東北地方の大木式土器の影響も見逃せない。また新井市大貝遺跡では信州方向からの影響も見られるところである。このような縄文中期の傾向は上越地方一帯に見られるが、中越方面の在り方（中期後半に入ると北陸系のものは少なくなる）とは違いが見られる。また後・晩期についても信州系のものと東北系のものとがあり細池遺跡はその好例である。

ちなみに弥生時代の遺跡は発見例が非常に少なく、特に中期についてはまだ確認されていないが、平野部の低湿地に存在することは確実と考えられ、北陸系の櫛描文土器が主体を占めるものと思われる。以上のように縄文時代から弥生時代にかけては北陸地方の影響を半分以上受けながらも、信州方面や県内中越以北の影響も少なからず受けていたのがわかるのである。

次に古代の土地制度について若干ふれてみたい。糸魚川市域は池辺彌氏『和名類聚抄郡郷里駅名考證』等を参照すると古代の郷里制下においては頭城郡沼川郷に含まれていたと一般的に理解されているが問題も残されている。それは清水正健編『莊園志料』では沼河保と記しており根知谷・早川谷等50余村の總称として理解している。また中世では永正八年七月日の安國寺文書(『越佐史料』3)に「沼河保内木浦今者不知行」とある。

『莊園志料』では沼河保としての典拠史料を明示しておらず、この場合は超時代的な地域概念を表示する意味の保であると考えられる。莊園公領制下においては保を郷とも称する場合が多い数確認されており、「沼川」の地の地域単位を「郷」とするか、「保」とするかを二者択一の問題としては把握すべきではない。この場合、律令制以来全国一律に国内が郡一郷という縦の系列で構成してきたものが崩壊し、同じ国でも郡によって11世紀以降行政組織の構成が異なつてくると変質過程を考慮しなければならない。また、倭名抄郷が史料にみえるからといってそこに倭名抄郷の行政単位を想定するのは早計であり史料上にはただの地域表示として記されているとの指摘(坂本 1985)も無視できない。東国の大郷は古代以来のものはほとんど消滅し中世には継承されていないとされ、逆に西国では基本的には『倭名類聚抄』に記載された郷が単位となっている。ただし郡の分裂もみられ、条などの単位も全く機能していないわけではない。そして東西の界にあたる尾張では双方の特徴が混在しているが、越後の沼川郷(保)も同様に両属性を有していたと推察される。

### 第III章 遺跡各説

#### A. 中原遺跡

##### 1. 遺跡の位置及びグリッドの設定

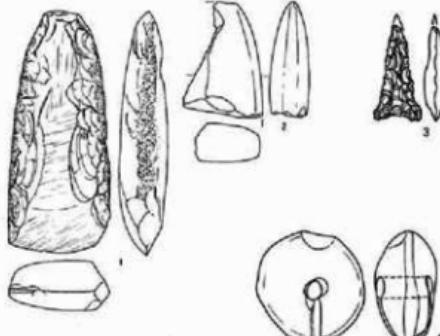
中原遺跡は先述のように、標高約68mの中位段丘上に立地し、海からの北・西風を直接受けるところである。現在は、南北に整然と区画された階段状の水田となっている。グリッドは上り車線のST A No.351の基本杭を基点とし、東西にX軸、南北にY軸を設定し、10m毎に西から東へ1～、南から北へA～のグリッドを設定した。また10m毎のグリッド内は右図のように2m毎25等分に分割した。したがって小グリッドまではD14-3区というように呼称した。また遺物の取上げも原則として小グリッドとした。

##### 2. 確認調査

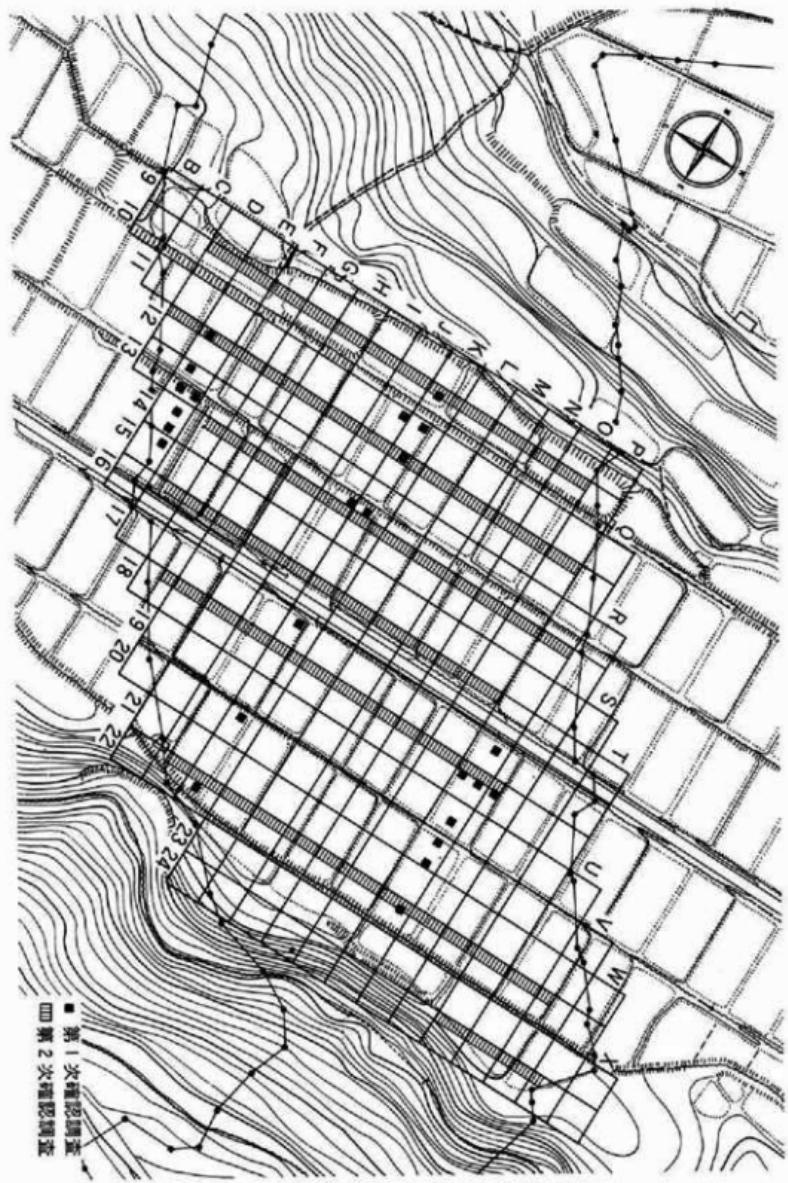
第1次確認調査は、昭和59年に土地所有者の承諾の得られた地点について認意に実施した。24地点について $2 \times 2$ mのトレンチを設定したが、特に包含層と認められる層はない。階段状の水田であるため、浅い所、深い所とまちまちで、そのほとんどが整地層であった。遺物は3地点において確認された(第4・5図)。縄文時代前期の纖維を多く含んだ土器片、石鏃、磨製石斧、フレイク、円孔のある算盤玉様土製品、近世の染付・唐津焼等である。また3ヶ所の試掘溝において溝状遺構が確認された。遺物・遺構確認地点が少ないと及ぼす層もないことから全面調査が必要かどうか検討を行ったが、一応全面調査とした。翌年6月に入って本調査

1	6	11	16	21
2				22
3				23
4				24
5	10	15	20	25

第3図 小グリッドの名称



第4図 第一次確認調査出土遺物写真 第5図 第一次確認調査出土遺物(1・2号、3・4号)



第6図 グリッド設定図 (1/1500)

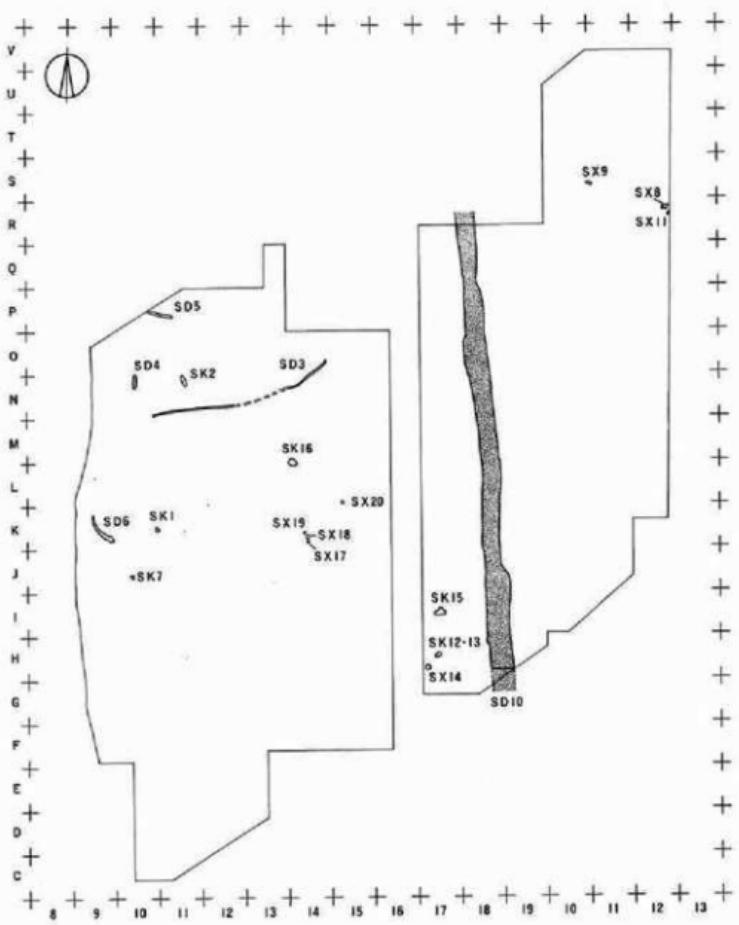
前に2次確認調査を行った。幅2mのトレンチをグリッドにそって6本設定して実施した(第6図)。その結果、やはり、各トレンチにおいて縄文時代前期の土器片が検出された。中央の農道を境にして東側は比較的遺物が濃密であったが、西側は少ない。また土層も全面において整地層のみで部分的にしか包含層は残っていないことが判明した。遺構としては、溝状遺構、土坑等が検出された。以上の結果から、包含層はないものの、遺物の出土は認められることから、遺構の存在が予想され、全面を重機排土とし、遺構確認に務めるものとの判断に達し、全面調査となった。

### 3. 層序

当遺跡の現況は水田で大正年間頃に圃場整備が行われ、東西南北に整然と区画されている。かなり大規模な圃場整備であり、包含層はすぐではなくすべてが整地層で、各水田の山側(南側)は削りによりローム層まで削平され、海側(北側)は、盛土により深さ1m近くの堆積を示している部分もある。したがって、各地点によって層の堆積はまちまちで、階級の層位として捉えることはできない。表土は、耕作土、客土であるが、それ以下の整地層は、暗褐色土の所、ロームブロックの所とまちまちである。遺構確認は、それら整地層の下である。

### 4. 調査の経過

- 6・25 立ノ内遺跡より発掘機材を搬入する。  
6・26 遺跡全体の草刈りを行う。  
6・27 確認調査のため10ラインにそって幅2mのトレンチを設定し、発掘に入る。  
6・29~7・3 10・12・14ラインのトレンチ発掘を行う。  
7・9~7・10 ひき続ぎ14・16・18ラインのトレンチ発掘を行う。  
7・11 午前中雨のため作業中止。午後よりトレンチ発掘。(18ラインの下)  
7・12~7・16 トレンチ発掘(14・16・18・22・24ライン)。F・G・H-9・10区重機表土剥ぎ。  
7・7 I・J-9・10区発掘、重機による表土剥ぎ。  
7・18~7・25 L・M・N・O-9・10区表土剥ぎ。I・J・K・M・O・P-9・10区の遺構掘りに入る。  
7・26 J-M-11区、L-M-12区遺構掘り。  
8・21~8・22 F・G・H-11~13区遺構確認を行う。  
8・26~27 L・M・N・O-20・21区、R・S・T・U-20・21区表土剥ぎ。F・G-15・16区、I・J・K・L・M・N-20・21区遺構確認。  
8・28~29 P-20・21、P'・Q-22区遺構確認。  
9・2~9・4 H・I・J-17・18・19区遺構確認。S X 8・9・11平面・断面図作成。  
SK 12・13セクション写真撮影及びSX 14遺物写真。  
9・5 J・K・L・M-17区遺構確認。  
9・6 L・M-17・18・19区の遺構確認。東側全体の写真撮影。SK 12・13セクション図



第7図 道構配図 (1/1250)

作成。

- 9・9 S D 10清掃・実測開始する。  
9・10 遺跡東区全体写真撮影。11ラインセクション写真撮影。S D 10実測。  
9・18~19 11ラインセクション図面作成開始。  
9・21 11ラインセクション実測継続。  
9・25~10・2 11ラインセクション図作成。  
10・7 S D 10実測を継続。  
10・11 N・O-14・15区遺構確認。N・O-17・18・19区重機による表土剥ぎ。  
10・15 S D 10の発掘。プレハブ引越し。(岩野へ)  
10・16 S D 10発掘継続。清掃。写真撮影完了。S X14・S K15平面図・セクション図作成。  
10・19 S D 10実測完了し、調査を終了する。

## 5. 造 構

### S K 1 (図版2)

K10・K11区境界に位置する。平面形は整った橢円形を呈し、長径90cm、短径62cmを測る。底面はほぼ水平であり、深さは20cmと浅いものである。覆土は二層に分かれるものの明瞭な違いはない。石築(第30図55)が出土しているが、本跡に伴うものではない。

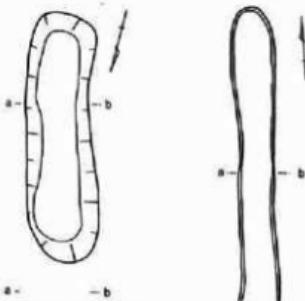
### S K 2 (第8図・図版2)

N11区北端に位置する。端部を丸くした不整長方形を呈する。長径180cm、短径は最大部で55cmを測る。本跡は掘り込みが不明瞭で、

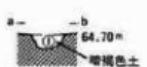
覆土も乱れており、風倒木痕に類するものと思われる。底面は凹凸が著しく、深さは55cm~40cmと一定しない。覆土は含まれるローム質土粒子の多寡により土層を分かつことができるが、通常の堆積状態を示していない。遺物の出土はない。

### S D 3 (図版2)

N10区からO14区にかけて検出された溝状造構である。造構は地山面の傾斜と直交する東西方向にのびており、延長は19mを測るが東に向ってさらにのびていたと思われる。整地土に掘り込まれ底面は地山面にまで達している。覆土はしまりのない暗褐色土一層であり、同様な土壌が南方にも水平に堆積している。検出面においては幅約30cm、深さ10cm弱を測るが土層の観察では50cm程の深さを有する。遺物の出土はない。



第8図 SK 2 実測図(%)



第9図 SD 4 実測図(%)

**S D 4 (第9図・図版**

2)

N 10区北端に位置する。端部は丸くおさめ、壁面はほぼ垂直に立ちあがる。延長6.7mを測り、南北にのびる。深さ約30cm、覆土は暗褐色土一層である。

**S D 5 (第10図・図版**

3)

P 10・P 11区に位置する。延長5.2mを測るが、西側はなお調査区域外にのびている。壁面は S D 4と同様にはほぼ垂直に立ちあがる。

**S D 6 (第11図・図版**

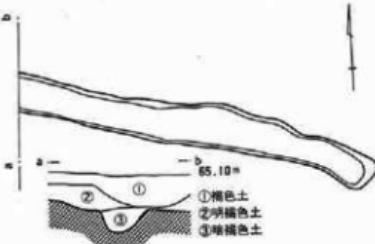
3)

K 9区に位置する。整地土に掘り込まれ、底面は地山のローム質土に達する。検出面では幅70cm延長9mを測るが、土層の観察では幅1.2mを測り、西側は斜面に向けてさらにのびていたと思われる。

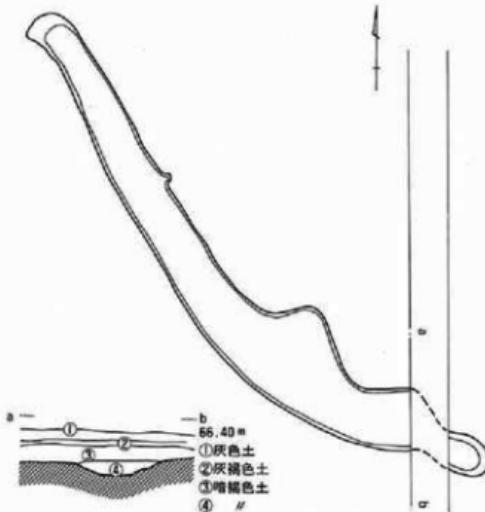
**S K 7 (第12図・図版**

3)

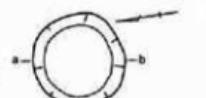
J 10区のはば中央に位置する。径1.4mの正円形を呈し、周囲・底面をコンクリート様のもので5cmの厚さをもって固めている。これは風化が進んでおり、移植ゴテで砕ける程の硬さになっていた。本跡の底面では樹木の枝数本が樹皮の付着した状態で出土している。覆土上面は鉄分の沈着した褐色土層が水平に堆積している。前述の遺構は S K



第10図 SD 5 実測図 (1/50)



第11図 SD 6 実測図 (1/50)



第12図 SK 7 実測図 (1/50)

2を除いてはほぼ同時期に構築された遺構である。本遺跡が存在する段丘面は明治末一大正初年にかけて畠地が全面的に水田に改められており、整地土はその時点のものであり、整地土を掘り込んでいる遺構は大正初年以降のものと判断される。

#### S X 8 (第7図)

調査区東端、R22区に検出された焼土遺構である。焼土炭化物が1m以上にわたって散布するものの明瞭な凹みは見られない。本跡は整地土下から検出されているが、遺物はなく、時期は不明である。

#### S X 9 (第13図・図版3)

S21区-22グリッドに位置する焼土遺構である。平面形は梢円形を呈し、長軸1m、短軸55cmを測る。断面V字形の掘り込みを有し、壁ははっきりしている。深度は最大35cm。覆土は整然とレンズ状に堆積しており、焼土は最上位に浮いて存在する。土層の観察からみると、本跡は土坑ほり上げの後に埋め戻すか、あるいは一定期間放置の後に炉として使用されたものと考えられるが、構造上特異な遺構である。焼土と見ているものが、焼土に似た橙褐色土である可能性も多分に考えられるところである。

#### S XII (第14図)

R22区に位置し、S X 8に近接している。短い溝状の平面形を呈し、一部は調査区域外に広がる。底面は凹凸が著しく、覆土は焼土のみが堆積し、深さは最大20cmを測る。

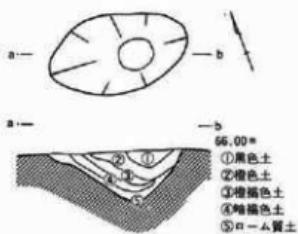
S X 8と同様な機能を持つ遺構と見られる。

#### S K 12 (第15図・図版4)

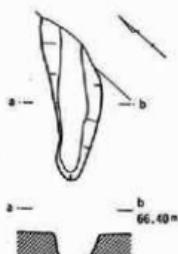
Q14区に位置し、連続して東側にS K13がある。不整形の土坑で、長軸70cm、短軸58cmを測り、深さは36cmである。覆土は第一層が暗褐色土で、しまりはよく炭片を多く含み焼土粒も下部に存在する。2層は暗褐色にロームブロックを含むもので、やはりしまりはよい。出土遺物はない。

#### S K 13 (第15図・図版4)

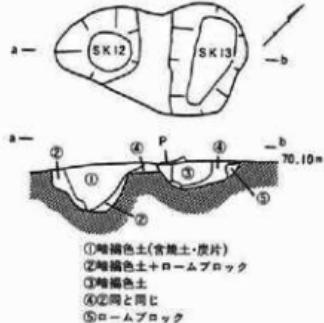
S K12と同じくQ14区に位置し、西隣にS K12が存在する。やはり不整形の土坑で、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ20cmを測る。覆土は③層がS K12の①層と同様であるが、



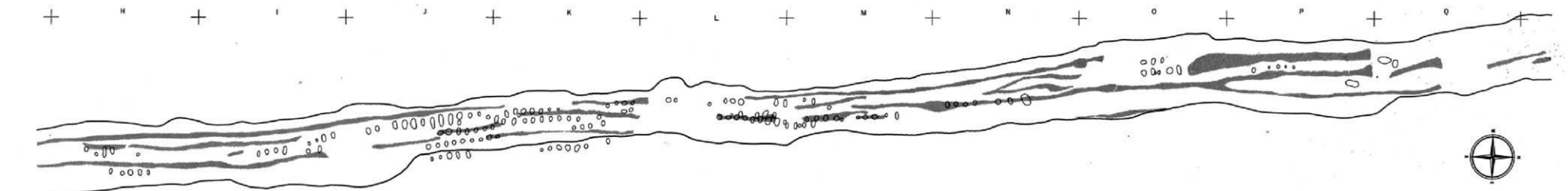
第13図 S X 9実測図(%)



第14図 S XII実測図(%)



第15図 S K12・13実測図(%)



第16図 SD10実測図(1/200)

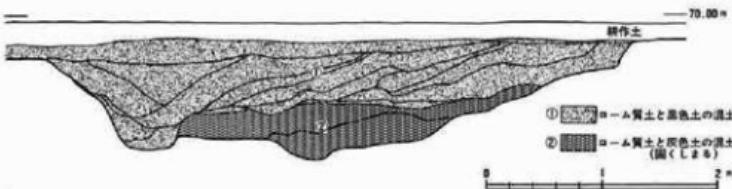
ややしまりがある。⑤層はロームブロックである。下面には自然礫が1個存在する。また土坑確認面上面には、縄文中期前半の土器底部（第23図20）が直立の状態で確認されたが、土坑埋没後であるため、この土坑と関連するかどうかは明確でない。

#### S X14（図版4）

Q14区に所在する。遺構は存在しないが、完形に近い浅跡が1個検出された。（第23図19）上層には比較的の包含層に近い暗褐色土が残っていた地点である。まわりにはこの土器に関連すると思われる遺構はないが、S K13の土器とはほぼ同時期のものである。また、近接するS K15出土の土器も同時期の所産と考えられる。このようにQ・R-14区にかけては、中期前半の土器が比較的まとまって出土しており、遺存状況の良さを示している。

#### S D10（第16図・第17図・図版7）

R12・13区から北に向って南北に走る溝である。幅約5m、深さ0.8mの皿状の溝で、法線に対してほぼ直角に走っている。覆土は、耕作土下の①層がローム質土と黒色土の混土で、縄状に堆積しており、しまりもないやわらかい土である。②層は、ローム質土と灰色土の混土で固くしまっている。第1層は、圃場整備時に埋められた土であり、また②層は、水流により堆積した土と考えられる。すなわち、この溝は用水路として使用されたもので、少くとも、圃場整備の行われた時期までは存続していた溝である。また、この溝は幅5mがすべて用水として機能していたのではなく、第16図のスクリントーンの入った溝の部分が各々流路と考えられ、それらの川がこの5mの溝の範囲内で変化していったと考えられる。また、整然と並んだピット列も川の流路であり、運ばれてくる小石の回転によってえぐられ、ピット状になったものである。遺物は、①層からはほとんど出土せず、②層や各々の流路、ピット等から出土している。当遺跡出土遺物の約半数近くがこの溝から出土しており、内容は、縄文時代の磨製石斧、打製石斧、縄文土器、中世の珠洲焼、近世、近代の陶磁器片等である。これらの遺物は川の周辺及び上流から流れ込んだものであるが、この溝がいつの時代までさかのぼり得るかは不明である。なお、この段丘が水田化される以前は畠地であり、桑の木等が植えられていたということである。



第17図 S D10土層断面図

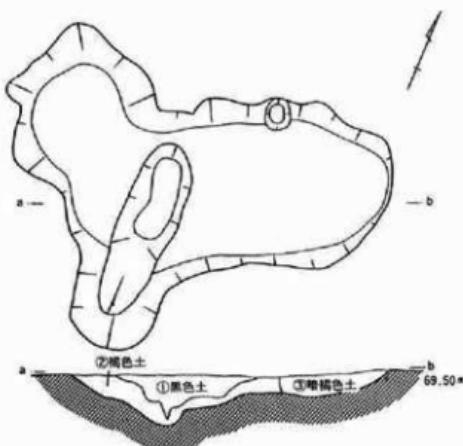
### S K15 (第18図・図版5)

R14区に位置する不整形の土坑で、遺構としてとらえられるかどうかの判断はつかない。東西2.8m、南北1.8m、深さ20cmで中央がやや深く35cmで、溝状となる。覆土は①層が黒色土で炭化粒を多く含み、しまりはよい。②層は褐色土でロームブロックを含み、固くしまっている。③層は、②層と同様であるが黒色土の比率が高い。①層上面には縄文時代中期前半の土器（第23図18）が存在したが、この土坑と関連するかどうかの判断はつかない。土層のしまり具合や覆土の状況を見ると、遺構というより、搅乱をうけた落ちこみの可能性が高い。

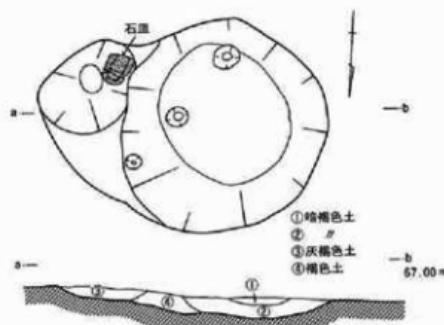
### S K16 (第19図・図版5)

M14・L14区境界に位置する。大小2つの凹みからなり、不整円形を呈する。西側くぼみ部では径12cm・16cm・20cmのピットが45cm・55cmの間隔をおいて一直線上に並んでいる。覆土はしまりがよく粘性に富み、炭化粒を多く含み左右の凹みで色調を異にしている。

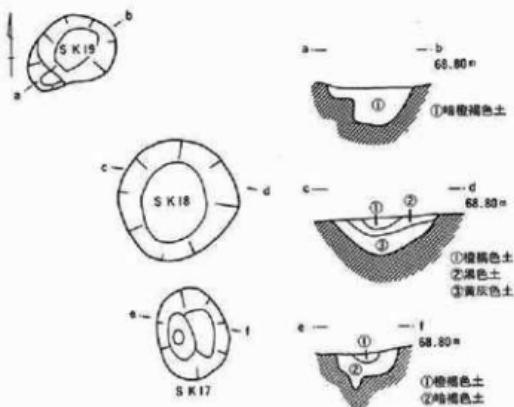
西側凹み部では、土器片が多数検出されているが、風化が激しく文様を識別できない。これらは同一個体の土器片であり、橙褐色を呈する。焼成、繊維を含む胎土から見て、縄文時代前期前葉に比定されるものである。また東側凹み部では、石皿（第29図46）が2つに割れ、底面に密着した状態で検出された。



第18図 SK15実測図 (1/4)



第19図 SK16実測図 (1/4)



第20図 S X17・18・19実測図(1/4)

#### S X17・S X18・S X19・S X20 (第20図・第21図・図版6)

K14・L15区で検出された焼土遺構である。S X17・S X18・S X19とともに遺構上部に焼土層、下部に炭化粒を含む暗褐色土の堆積がある。S X19のみが焼土を多く含む暗褐色土の單一土層である。S X18においては底面に貼り床状の黄灰色粘土がしかれていた。遺構は整地土下から検出されており、所属時期・機能は不明である。S X9と同様に焼土それ自体にも疑義が持たれる。

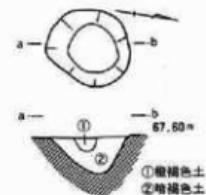
#### 6. 遺物

##### a. 土器・その他

中原遺跡から出土した土器は、縄文土器、珠洲焼、近世、近代の陶磁器片等である。確実に遺構に伴うものは少ない。

##### 縄文時代前期 (第22図・図版8)

1は口縁部破片で、ほぼ直立し口縁が細く尖る。多条の斜縄文を施文の後、口唇部に細い棒状工具による押し潰しがみられる。暗褐色を呈し焼成良好、外面にススの付着あり。2は、灰褐色を呈し、焼成良好。口縁部破片で外面は多条の斜縄文である。口唇部棒状工具による斜方向の押し潰しがみられる。3も直立する口縁部破片で、先端部が尖る。黒褐色を呈するが、焼成は良くない。外面RL (?)の斜縄文。4はやや外反する口縁部破片である。先端部が尖り、小さな刻みが付される。暗褐色を呈し、焼成良好、外面RL (?)の斜縄文。5の口縁部破片は黒褐色を呈し、外面は縱走する多条LRで、口唇部には、細い棒状工具による刺突がめぐる。外面スス付着。6も3とはほぼ同様である。7は胴部破片で赤褐色を呈し、焼成良好。外面斜縫



第21図 S X20実測図(1/4)

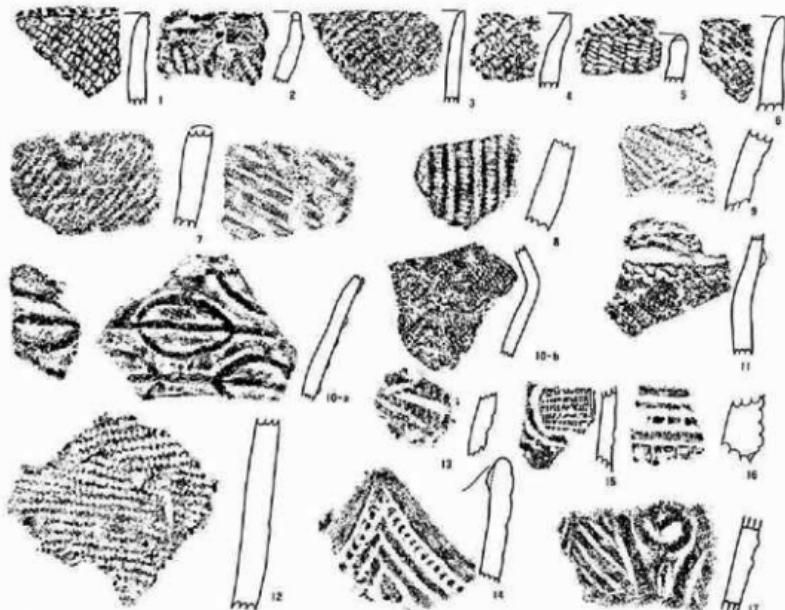
文 L R ( ? )、内面には条痕文が見られる。8は多条 L R の繩文が縦位に走る。

9は黒褐色を呈する胸部破片で、縦位の羽状繩文 L R を施文の後、絡条体圧痕文が2条走る。

7～9は厚手で、厚さ1cmを測り、胎土内に植物纖維が目立つ。10-aは口頭部で、茶褐色を呈し、やや薄手である。原体の細かい斜繩文 L R を施文の後、細い粘土紐を平行に貼付し、またその細隆帯を中心として交互に眼鏡状の隆帯をはり付け、まわりをなぞり、部分的に繩文をすり消している。10-bは同一個体の胸部破片と思われ、やや胸部のふくらむものである。11は、色調、胎土共に10に近い胸部破片であり、纖維の混入が著しい。上半に隆帯が走り、胸部は異条斜繩文である。12は胸部下半の土器で茶褐色を呈し、胎土内に纖維を多く含む。繩文は L R で方向はまちまちである。13は繩文地上に横八の字状の沈線が走る。

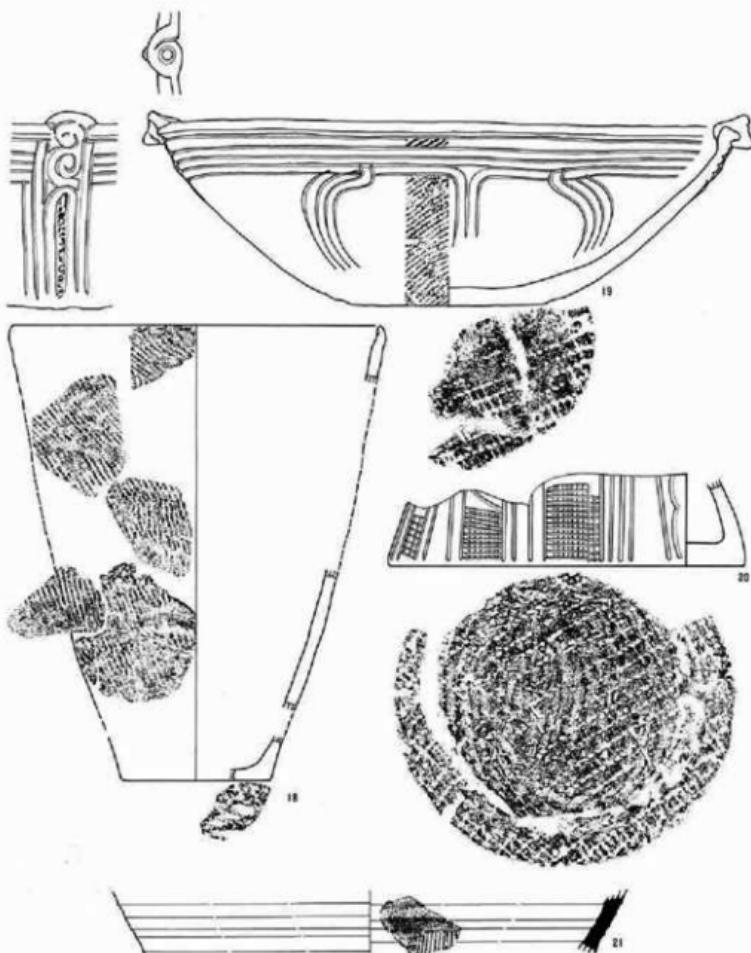
#### 繩文時代中期（第22図・23図、図版8・9・12）

第22図14は、深鉢の波状口縁である。黄褐色を呈し、内面に炭化物の付着を見る。口縁にそって半截竹管文がめぐり、上端の竹管文には爪形が付される。15は、格子目文が見られる。16は、半截竹管文が4条走り、その下にも縦位の半截竹管文が走っている。17は、渦巻及び隆帯が縦走し、その間を綾杉状の沈線が充填される。赤褐色を呈し、焼成良好。第23図18は推定口径26cm、高さ32cmの底部からほぼ直線的に開く深鉢形土器である。灰茶褐色を呈し、胎土内に



第22図 土器拓影図(1/2.5)

白色小粒子を含み、外面にスス、内面底部には炭化物の付着が見られる。口唇部は、やや内湾する。外面には斜縞文Rしが施される。また底部は比較的薄く、網代底となっている。第23図19は、浅鉢でS X14からの出土である。口径39cm、高さ13cmを測る。黄褐色を呈し、胎土内に砂粒を多く含む。内面下部に炭化物の付着が見られる。口縁部は内面1cmほど肥厚している。



第23図 土器実測図 (1/4)

口縁部には渦巻状の小突起が2個付され、それを中心に文様は2単位に区分される。突起下には、半截竹管による渦巻及び平行竹管文が縦に走る。また口縁にそって胴上半には3本の平行竹管文が一周している。単位の中は、中央に縦の平行竹管文が走り、その左右に弧状に3本の半截竹管文がある。底部はスグレ状圧痕である。20は、深鉢底部で、底部が外に張り出るものである。底径25.5cmを測る。縦走する半截竹管文の間を格子目文、B字文が施され、また各々の区画内には、格子目文が充填されている。二次焼成を受けている。底部はスグレ状圧痕である。

#### 中世陶器（第23図）

21は、珠洲焼折り鉢破片である。他に珠洲焼片数点が出土している。

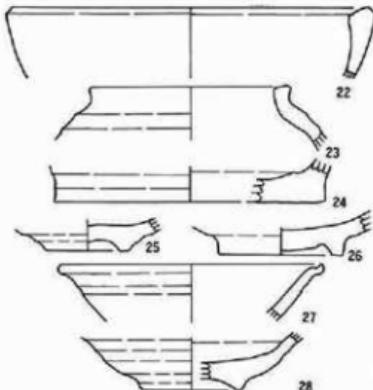
#### 近世陶磁器（第24図・図版9）

22は、瓦器である。鉢形の口縁部破片で、内外面共に黒色である。23・24・26は越中瀬戸である。23は、小形壺の口縁部破片で、推定口径8.8cmを測る。赤褐色を呈し、内面に白色の砂粒が目立つ。外面には鉛釉がかかる。24は、底部破片で23と同様の色調、胎土である。26は、碗の底部破片である。23・24に比べて胎土が緻密である。内面には鉛釉がかかる。25は、唐津焼の碗底部破片である。内面淡灰色の釉がかかり、一条の絵がらが見える（唐津Ⅰ期）。27は、唐津焼の溝縁皿である。内外面に淡灰色の釉がかかる（唐津Ⅱ期）。28も唐津焼碗底部破片である。内面に砂目止痕あり（唐津Ⅱ期）。この他に近世～近代と思われる唐津焼、伊万里焼がSD10を中心として出土している。

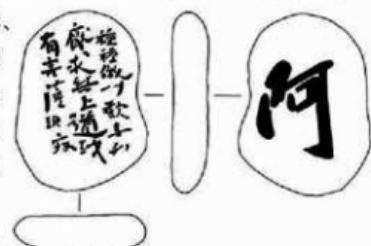
#### 経石（第25図・図版12）

L9区からの単独出土で、もともとの位置にあったとは判断できない。縦9.5cm、横8cm、厚さ1.8cmの扁平川原石に墨書きされている。片面には、「妙法蓮華經序品第一」の一節が書かれている。（註）「種種微妙、歡喜無厭、求無上道、或有菩薩設寂」。また片面には、大きく一字「阿」が書かれている。これは、近世に多い一字一石経の一部と考えられ、この段丘上に経塚の存在した可能性が高い。

註：なお本経文の判読については、東京国立博物館・学芸部考古課研究官 間秀夫、同資料部研究指導室室長 山口正彦氏によるものであり、厚く御礼申し上げる。



第24図 陶磁器実測図(1/2.5)



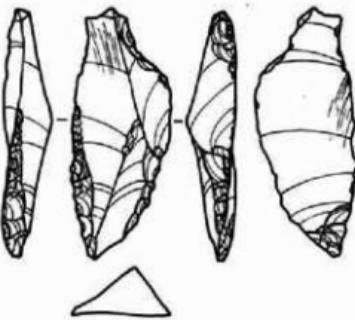
第25図 経石実測図(1/6)

## b. 石器

遺跡は段丘上の全面的な水田化によって整地されているため、遺物包含層は存在せず、石器類は整地土、あるいは水田の用水であるSD10覆土からその殆んどが出土している。遺構に伴うのはSK16出土の石皿のみであり、これは縄文時代前期前葉に比定できる。それ以外は所属時期が不明であるが、ナイフ形石器を除いては、おおよそ縄文時代前期～中期の範囲におさまるものと考えられよう。石器類は総数426点を数え、三分の一にあたる143点はSD10覆土から出土したものである。整地土中の石器類はL-0-18-20グリッド附近に集中する傾向がみられ、この一帯は縄文時代の遺構SK16の存在と相俟って、本遺跡の中では比較的遺存状態のよい地点と言うことができる。

### ナイフ形石器(第26図・図版9)

本遺跡においては唯一の先土器時代の遺物である。I10区整地土中で出土した。細身の縦長剝片を素材としており、先端部は折損している。左右の側縁下半と裏面基部に細部調整を施し、基部を作出している。裏面の調整は打瘤の除去が目的とみられる。鋭利な素材の左縁刃を刃部とする。右側縁上半は裏面から調整を加えられノックチ状を呈する。右側縁中央部には僅かな刃こぼれ状の穂のつぶれが見られる。石質は黒曜石。ナイフ形石器の出土は伴い、F11区～K11区・F12区～K12区・H15区・I15区に幅2m、総延長140mのトレンチを設定し、ローム質土を調査したが、遺物の出土は全くなかった。

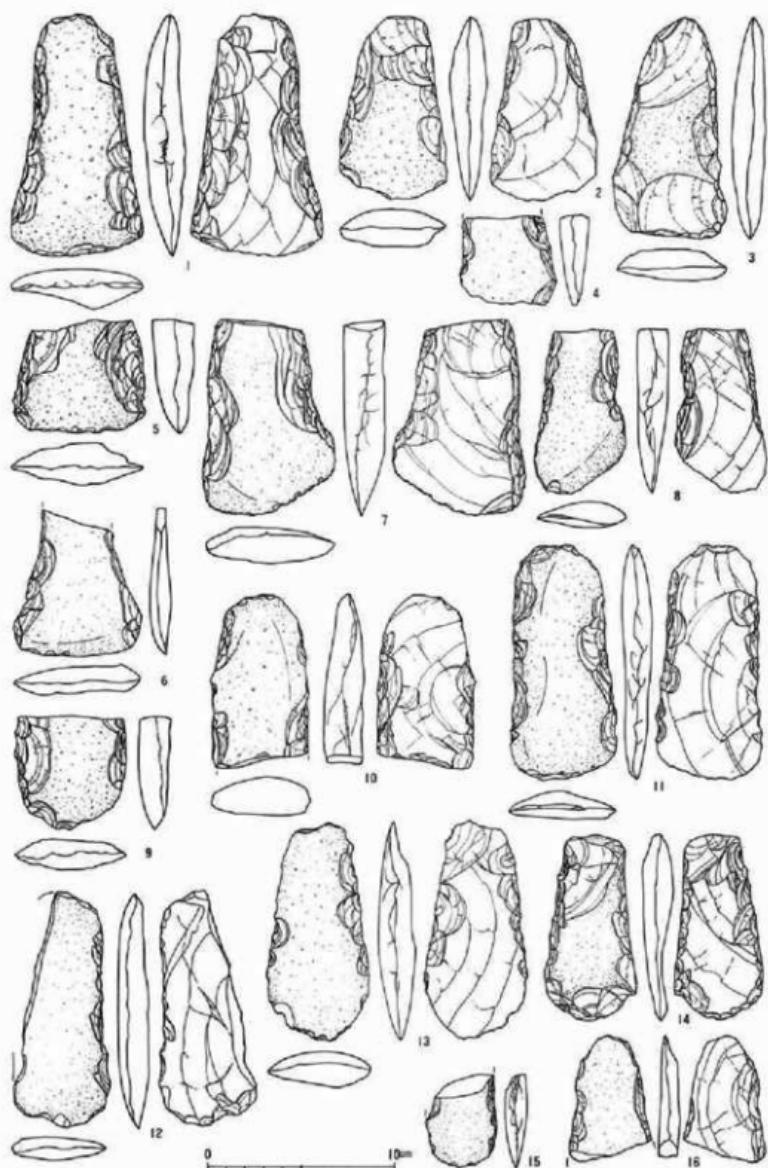


第26図 ナイフ形石器実測図(3)

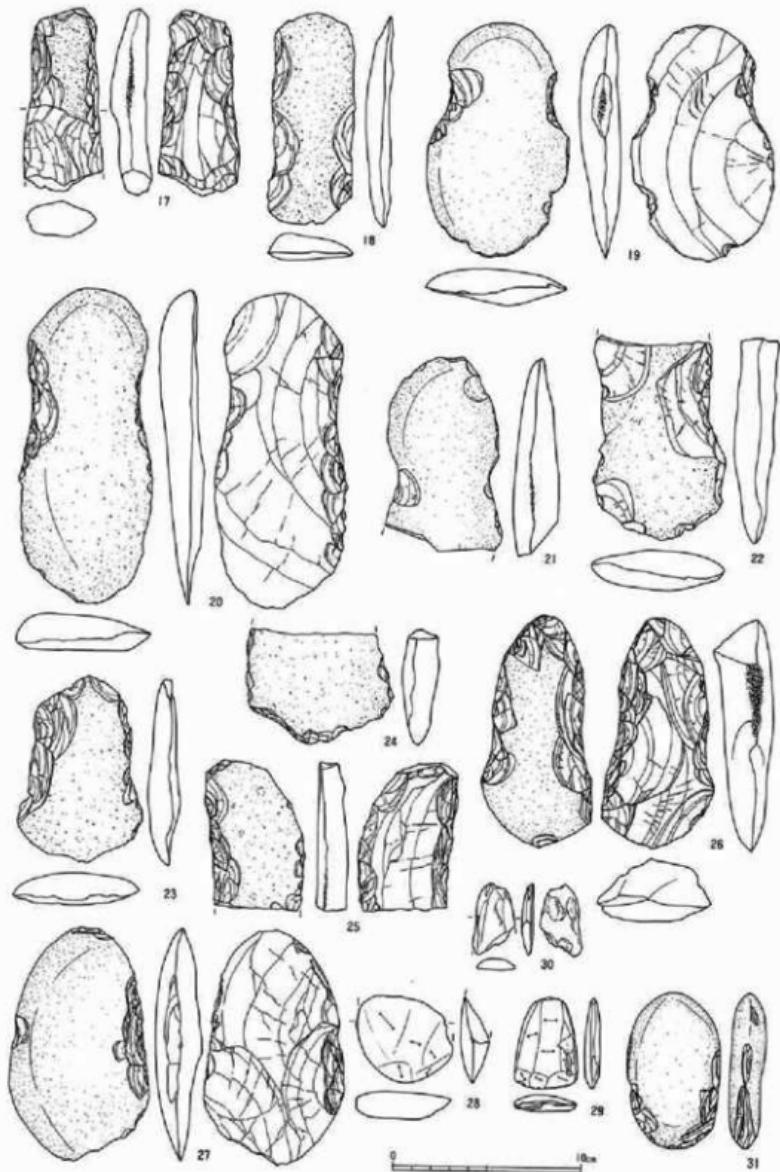
### 打製石斧(第27図・第28図1～27・図版10)

打製石斧は27点出土しており、図示したものがすべてである。そのうち10点がSD10より出土している。打製石斧は片面に原石の標面を、片面には主要剥離面を広く残し、横長剝片を素材として用いることに強い共通性がみられる。平面形態により、A類～E類までおおまかに分類した。

A類・側縁は刃部に向けてゆるく開き、直線的な刃部をもつ、いわゆる撥形を呈するもの(1～6)。1はA類の典型をとる。両側縁に丁寧な剥離を施すものの、基部・刃部には簡素な調整を施すのみである。側面形はゆるく反っているため片刃の刃形をとる。2・3は基部・刃部に大きな剥離を加えている点、側縁の調整が簡素な点が1とはやや異なる。5は刃部の破片であ



第27図 石器実測図（1）



第28圖 石器實測圖（2）

り、1とはば同様な形態を呈すると思われる。6は側縁のカーブが大きく、胴部幅が著しく小さく、厚みもない。

B類・刀部は偏刃とし、一侧縁は直線的に一侧縁は胴部下半に抉りを有するもの(7・8)。側縁・刀部の調整はA類と同様で、側縁の調整は丁寧なもの、刀部にはほとんど手を加えていない。8は節理面に沿って原石から素材を得ている。

C類・両側縁がほぼ平行となり、いわゆる短冊形をとるもの(10・11・12)。側縁・刀部・基部の調整はA類・B類とよく類似する。17・18も短冊形をとるものであるが、17はやや厚みがあり、刀部・基部に側縁から調整を加えている点、18は裏面が主要剝離面のみである点がC類と異なる。

D類・側縁は直線的で刀部にむけてゆるく開き、刀部をU字形にまるくおさめるもの(13・14)。素材自体のまるみを利用した13に対して14は刀部に調整を集め、まるく作出している。

E類・素材の形状をほとんど変えず、胴部上半に抉りを有するもの(19・20・21)。器厚は刀部に薄く、基部に厚い特徴をもつ。精円形の自然礫から素材を得る時点で打撃点の選択が行なっていたものと思われる。前出の形態に比してやや大形である。つぶし様の加工は抉り部に著しく観察される。22~26は前述の分類にあてはまらないものであるが、製作技術において変わることはない。26のみが異質で分厚い素材を得ているため裏面側が厚く、基部に最大厚をとる。27は打製石斧未製品と思われる。側縁下部に左右から剝離を加え、刀部をつくりだしている。側縁はなお調整が加わるのであろう。

#### 磨製石斧 (第28図28~31・図版10)

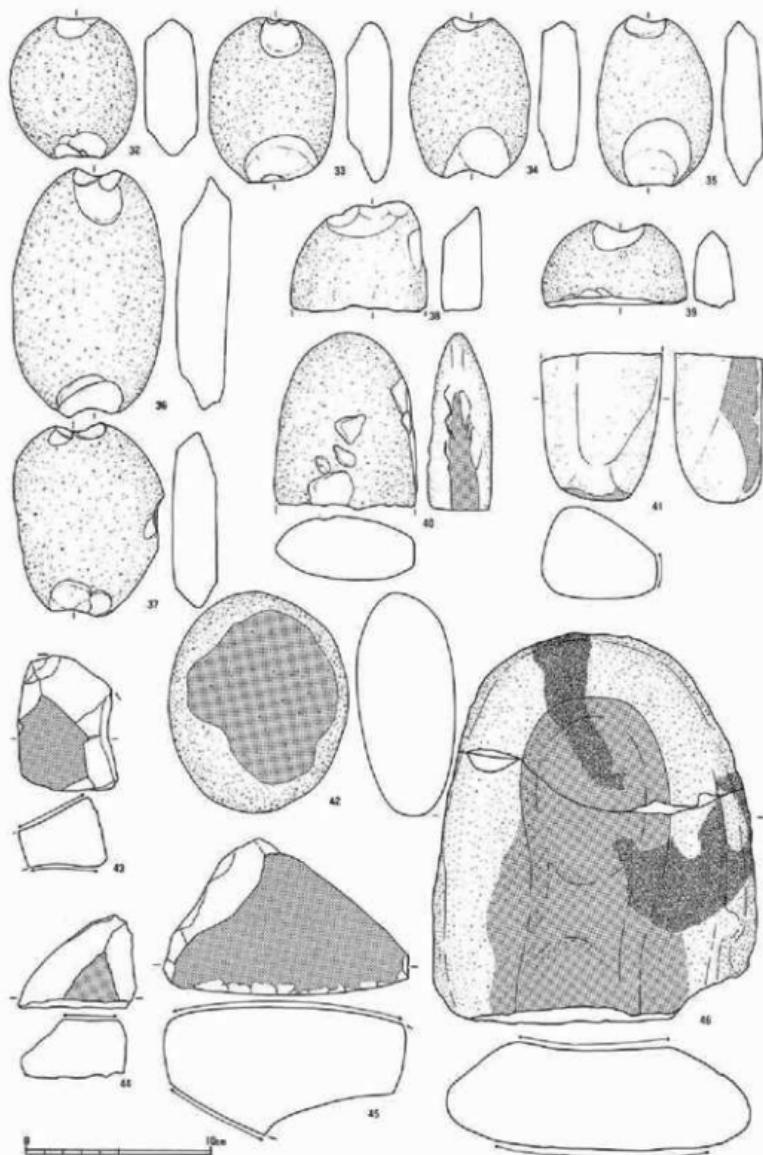
4点の出土がある。図示していない1点は刀部破片である。28は両側面に僅かな面取りが残っており、側面は胴部に向けて若干開いている。29はいまだ刀部を鋭く研ぎだしておらず、表裏とも擦りによる稜が明瞭である。30は横断面がカマボコ状を呈するもので、平坦な裏面は原石から素材を得た時の主要剝離面側にあたる。整形時の剝離痕をよく残している。31は素材に調整剝離を加える段階の磨製石斧未整品と考えられる。表裏面とも擦りあとは観察されない。

#### 礫石錐 (第29図32~39・図版11)

8点の出土がある。いずれも扁平な精円礫の両端を打ち欠いている。37は礫の両端の他、右側面にも打痕がみられる。

#### 磨石類 (第29図40~42・図版11)

40は右側面を機能面とし、それに伴って剝離が加えられているが、風化が進んでいるため磨りと剝離の前後関係は不明である。また礫中央に不整形の凹みがみとめられ、凹石としての用途も考えられる。41は横断面三角形を呈する特殊磨石である。磨られているのは右側面1面である。また端部には径3cmにわたる円形の敲打痕がみられ、ふたつの機能面を持つ。42は自然礫を利用した通有の磨石である。裏面は磨られていない。



第29図 石器実測図（3）

### 石皿・砾石（第29図43～46・図版11）

図示した他に43と同一個体の破片が1点みられる。

44は打削によって整形されたものである。45の表面は特に平滑に磨られる。下端に加えられた連続的な小剥離は鋭い棱を潰したものと思われる。46は本遺跡で唯一所属時期の明確な縄文時代前期前業の石器である。凹面はよく磨られ、一部は凹みをはみだして使用されている。裏面も滑らかに磨られている。またタール状炭化物の付着がみられ、図示した他、割れ面にもその付着が著しい。

### 穀器・両面石器（第30図47～54・図版11）

器種を特定できない不定形の砾石器が8点出土している。47～49は平面形が三角形、横断面形が台形を呈する石器で形態はよく似かよっている。底辺となる縁辺に調整が集中しており、ここに、主要な機能を有すると思われる。いずれも底辺は片刃を呈する。48は背面ではなく、右側面に砾面を残している。50・51は分厚い礫を用いて周囲から剥離を施し、方形に整形したものである。50は周囲が両刃状を呈するのに対し、51は剥離の角度が鈍く、右側面はつぶし様の調整がみられる。52もこれらに類するが、裏面は主要剥離面として調整を加えていない。53は鉄分の沈着が著しい。54は扁平梢円礫を用い、礫の厚みが小さい右側面と交互剥離を施したものである。

### 石錐（第30図55・56・図版9）

2点のみの出土である。56は黒曜石製で若干白濁しており、被熱しているものと思われる。本遺跡では黒曜石の出土が少なく56の他に1点の碎片がみられるだけである。

### 石錐（第30図57・図版9）

剥片の端部に5mm程の錐部をつくりだしているものである。

### ビエス・エスキュー（第30図58・図版9）

砾面を残した剥片を用い、背面には両極打法による剥離が施され、下縁辺には小剥離が連続して施される。

### 抉状耳飾・垂飾（第30図59～63・図版9）

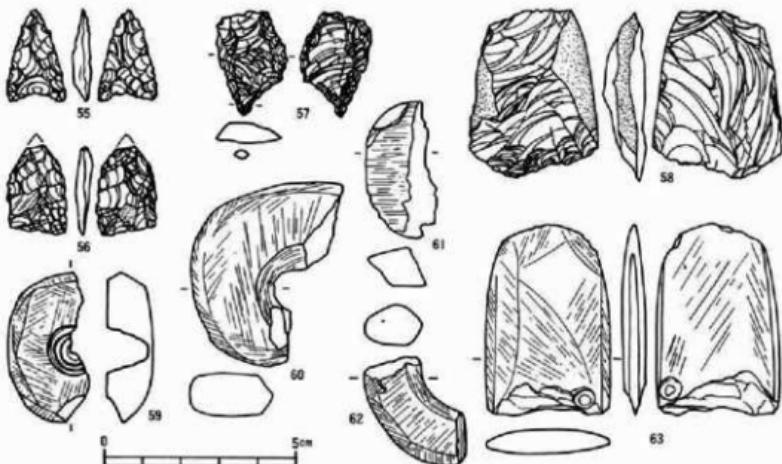
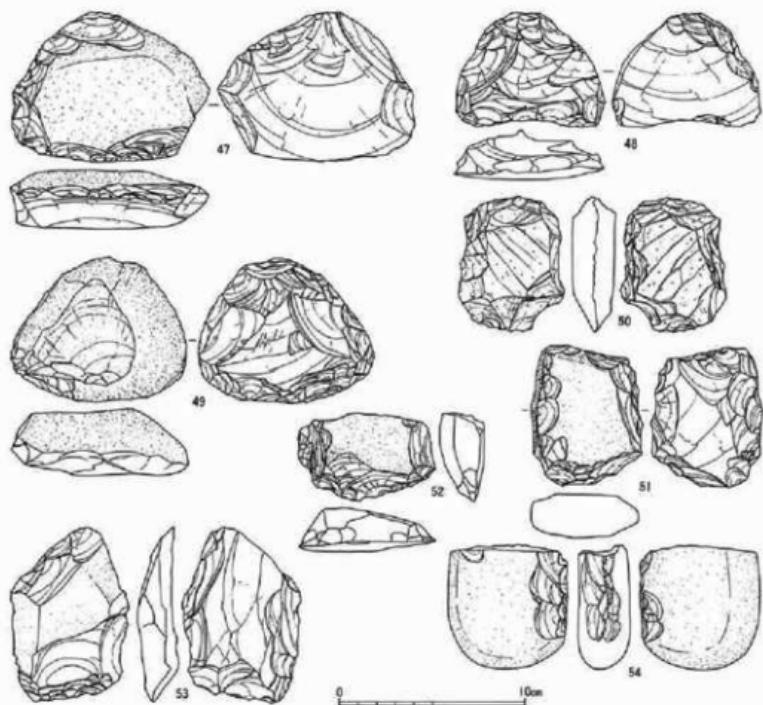
抉状耳飾は4点の出土がある。いずれも未製品と思われる。擦り痕、棱線を明瞭に残している。59は正円に近い穿孔が階段状に施され、1mmを残して貫通していない。貫通寸前で折損したものであろう。62は端部が擦られている。63は穿孔途中の垂飾である。擦り・下縁辺の剥離・穿孔の三者の順序が判然としないため、磨製石斧の転用であるか当初から垂飾として製作されたものか不明である。

### 穀器（第31図64・図版12）

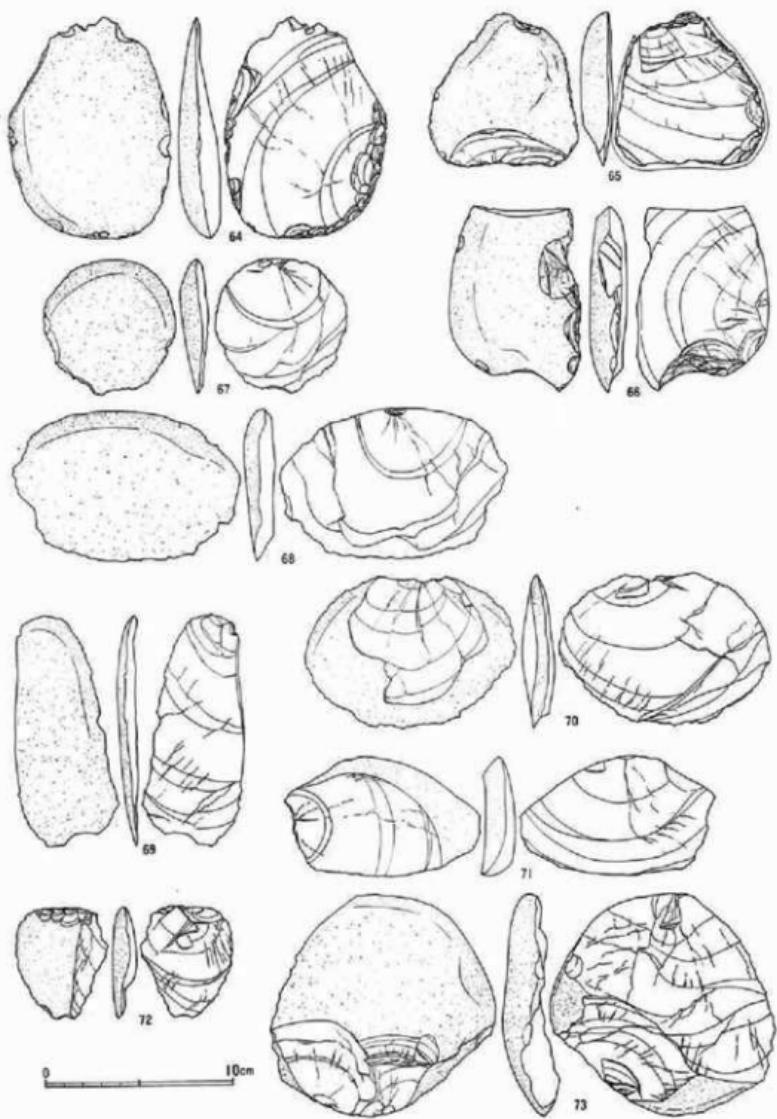
円礫から得た横長剥片を用い、素材の厚みが大きい打点側の縁辺に丁寧な調整を加えている。

### 二次加工を有する剥片（第31図65・66・図版12）

65は剥片のはば全周にわたって微細な剥離がみられる。この剥離は使用痕跡であると考えら



第30図 石器実測図(4)



第31図 石器実測図(5)

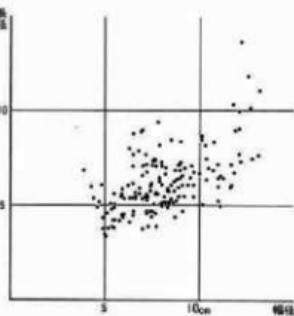
れる。なお表面の剥離は素材を得る前に行われている。66は端部に抉りを作りだしている。側縁の調整は打製石斧のそれに類似し、未製品の可能性もあり得る。しかし本遺跡では刃部に積極的な調整を加える例は稀である。

#### 剥片（第31図67～72・図版12・13）

剥片は総数324点を数える。本遺跡出土の石器類は総数426点であり、剥片は76%をも占めている。324点のうち116点はS D10からの出土である。剥片は礫面を残す剥片がその殆んどであり、礫面を欠するものは2点をみるのみである。長径3cm以下の小剥片は8点あり、石質はチャートが6、黒曜石が1、砂岩が1である。本遺跡で特徴的にみられる剥片は円礫にただ一度の打撃を加えて得られた貝殻状の剥片で68に代表される。これらの法量の分布を第32図に示した。長幅比は打点のとり方と用いた礫の形状に左右されるところであるが、69のような縦長剥片は極めて異例である。これら剥片の残骸にあたるもののが73以外みられず、遺跡外で剥片化され、遺跡内に持ちこまれたことはほぼ確実である。67のように縁辺を鋸歯状に欠いている例も多く見られるが、薄い縁辺は破損しやすく、意図的な調整とみるべきか判断し難い。縁辺を使用している可能性も十分考えられる。貝殻状剥片は64・66等に素材として用いられており素材剥片としての性格を認め得る。また打製石斧の素材もこれに類するものであり、剥片A類が多目的な素材剥片であると考えられる。ただ分布の中心と打製石斧の素材の大きさとは一致しない。また、小形の剥片石器の素材として用いにしても剥片A類の石質は砂岩が主であり、不適当な石質と思われる。70は表裏に剥離がみられるが、打点の観察から表裏同時に剥がされたと判断される。71は打点を転位させた輪切りの剥片であり、礫面は側面にあらわれる。貝殻状剥片について多い。72は同一打面上に位置をかえて打点を設けたものである。上端に連続してみられる小剥離に伴うものと思われる。

#### 石核（第31図73・図版12）

図示した1点のみである。原石の形状を想定できる。4枚の剥片がとられており、最大の剥離は礫の節理に沿って行われている。前出の剥片は整った形状を示しており、原石も整った橢円形の円礫を用いていると考えられるのに対し、73は原石・剥離とも不整形であり、その性格を異にしている。



第32図 剥片法量分布図

(折損しているものも長径・厚径)  
(そのまま示した)

## 石器一覧表

器物名	石質	重数	出土区(遺構)	器物名	石質	重数	出土区(遺構)	器物名	石質	重数	出土区(遺構)
1 石英粗面岩	183	N-Q-18-19	26 砂 岩	220	V21	51 麻 岩	163	J K17			
2 安山岩	111	S D10	27 "	240	N-Q-18-19	52 砂 岩	96	N-Q-18-19			
3 砂 岩	118	S D10	28 流紋岩	40	D12-1~5	53 頁 岩	132	L M9			
4 石英粗面岩	46	L-M-18-19	29 "	23	L14-1~5	54 安山岩	194	E10-1~5			
5 流紋岩	106	M10-1~5	30 "	7	ハイド	55 チャート	2	S K1			
6 砂 岩	65	N-Q-18-19	31 "	107	ハイド	56 黒耀石	2	L14-1~5			
7 石英粗面岩	215	K13	32 角閃石安山岩	188	H-I-14-15	57 チャート	3	I J12			
8 砂 岩	81	D12-1~5	33 安山岩	230	S D10	58 "	15	M12			
9 流紋岩	76	S D10	34 "	166	S D10	59 蚊 石	12	I 10			
10 石英粗面岩	140	L-M-18-19	35 砂 岩	200	S D10	60 滑 石	25	N14-1~6			
11 "	137	S D10	36 安山岩	430	M10-1~5	61 蚊 石	8	L14-1~6			
12 砂 岩	117	S D10	37 砂 岩	230	J12-1~5	62 "	5	I 17			
13 安山岩	127	S D10	38 安山岩	161	S D10	63 細紋岩	18	L13			
14 砂 岩	73	H-I-14-15	39 "	96	S D10	64 砂 岩	220	ハイド			
15 "	27	L-M-18-19	40 砂 岩	310	L-M-18-19	65 "	120	M11			
16 "	39	J K17	41	355	K11	66 "	184	H-I 10			
17 砂 岩	96	O 11	42 安山岩	855	I 10	67 "	76	S D10			
18 安山岩	100	N-Q-18-19	43 砂 岩	177	H-I-14-15	68 石英粗面岩	164	P-Q-20-21			
19 砂 岩	235	E10-1~5	44 ?	122	S D10	69 安山岩	77	P-Q-20-21			
20 "	275	S D10	45 砂 岩	565	I 17	70 石英粗面岩	128	ハイド			
21 "	171	S D10	46 "	2555	S K16	71 砂 岩	141	S D10			
22 "	191	S D10	47 硬質砂岩	340	I 10	72 "	38	I 10			
23 砂 岩	104	L-M-17	48 砂 岩	131	ハイド	73 "	375	S D10			
24 "	119	S D10	49 硬質砂岩	340	H I 10						
25 石英粗面岩	95	L-M-17	50 塞岩質安山岩	124	L14-1~5						

## 7.まとめ

中原遺跡のうち今回調査した地区は、段丘のほぼ中央部にあたり、湧水や沢水をとるのにあまり好条件とは言えないところである。圃場整備等でかなり遺構が破壊されてしまっていることは事実であるが、遺跡として中心的な位置であったとは言えず、遺物はかなりの出土を見たものの、遺構を明確に捉えることができなかった。段丘の先端又は、もう少し南の山側がむしろ好条件であったと言える。遺物は、各時代出土をみているが、特に注目されるのは先土器時代のナイフ形石器の発見である。糸魚川市内では、川倉遺跡(註)に旧石器らしいものもあるが上越地方で確実な例はこれが初例であろう。このような海岸部に近い位置で出土したことは、今後の研究上意義のあることであり、中位段丘以上の所では今後の調査が期待されるところである。縄文時代前期から中期にかけての遺物は、上越地方から北陸にかけて多く見られるものであり、前期前半の極楽寺式や中期前葉の新崎式、および中期後半のものである。資料が断片的であるため、資料紹介にとどめたい。S D10から出土の石器類は、縄文時代前期から中期にあたるものと考えられる。近世と考えられる経石については、塚の存在が予想されるが、糸魚川市内においては、中浜の塚出土の経石に次いで二例目である。

註・昭和48年に採集されたものである。昭和49年に市教委により発掘調査が実施されているが、発掘調査では出土していない。

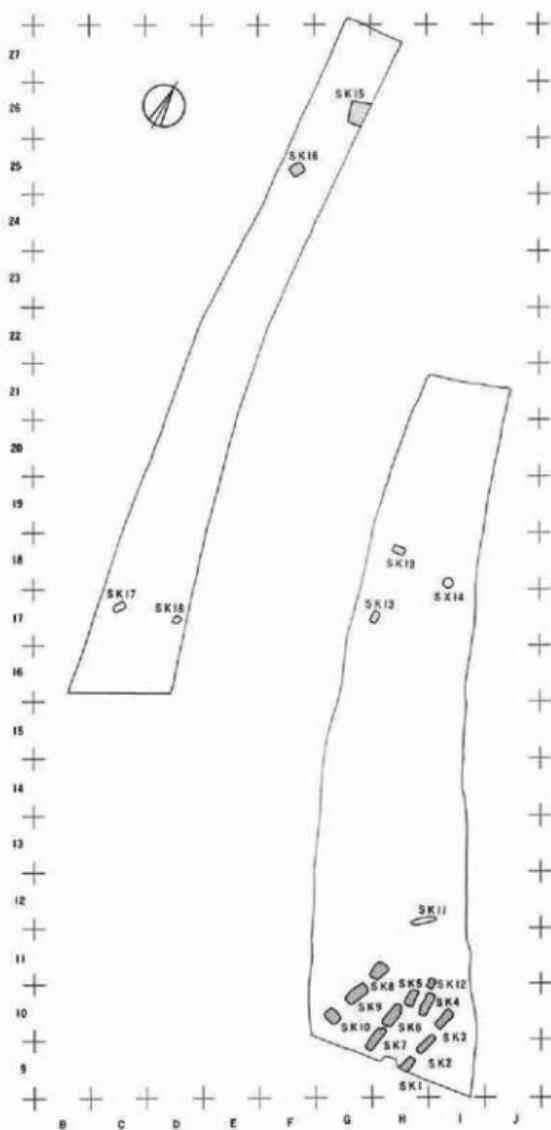
## B. 岩野 A 遺跡

### 1. グリッドの設定

グリッドは、工事用道路の幅杭を用いて設定した。幅杭 a・b を結ぶ線を基線 Y 軸とし、そ



第33図 岩野 A 遺跡・E 遺跡グリッド設定図 (1/1500)



第34図 造構配図(1/400)

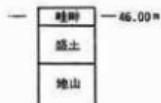
れに直交するようにX軸を設定した。X軸はA～のアルファベット、Y軸は1～の数字を用いた。遺物はグリッドで取り上げた。また、中央に農道が走っているため、道路を挟んで西側を西区、東側を東区と便宜上呼称した。

## 2. 調査の経過

10. 16 発掘予定地の刈払いを行う。
11. 13～17 重機により表土剥ぎを行う。
11. 17 西区精査を開始する。
11. 18 西区の清掃・写真撮影を行う。東区の遺構確認を開始する。
11. 19 東区精査、遺構発掘を行う。
11. 20 個々の遺構の写真撮影及び全体の写真撮影を行う。
11. 21 午前中で発掘を終了し、午後あとかたずけに入る。
11. 25 東区遺構実測。屋外作業すべて終了する。

## 3. 層序（第33図）

岩野A遺跡についても、すでに圃場整備や農道建設等により包含層はなく、水田耕作土の下は、整地層で、しまりのない暗褐色土やロームブロックの混入が見られ、遺物は、その中から検出されている。



第35図 土層柱状図

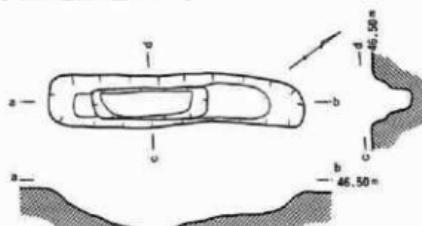
## 4. 遺構

岩野A遺跡で確認された遺構は、縄文時代に属するものが2基（SK17・18）、平安時代に属するものが3基（SX14、SK15・16）あるが、他は明確な年代をつかむことができない。

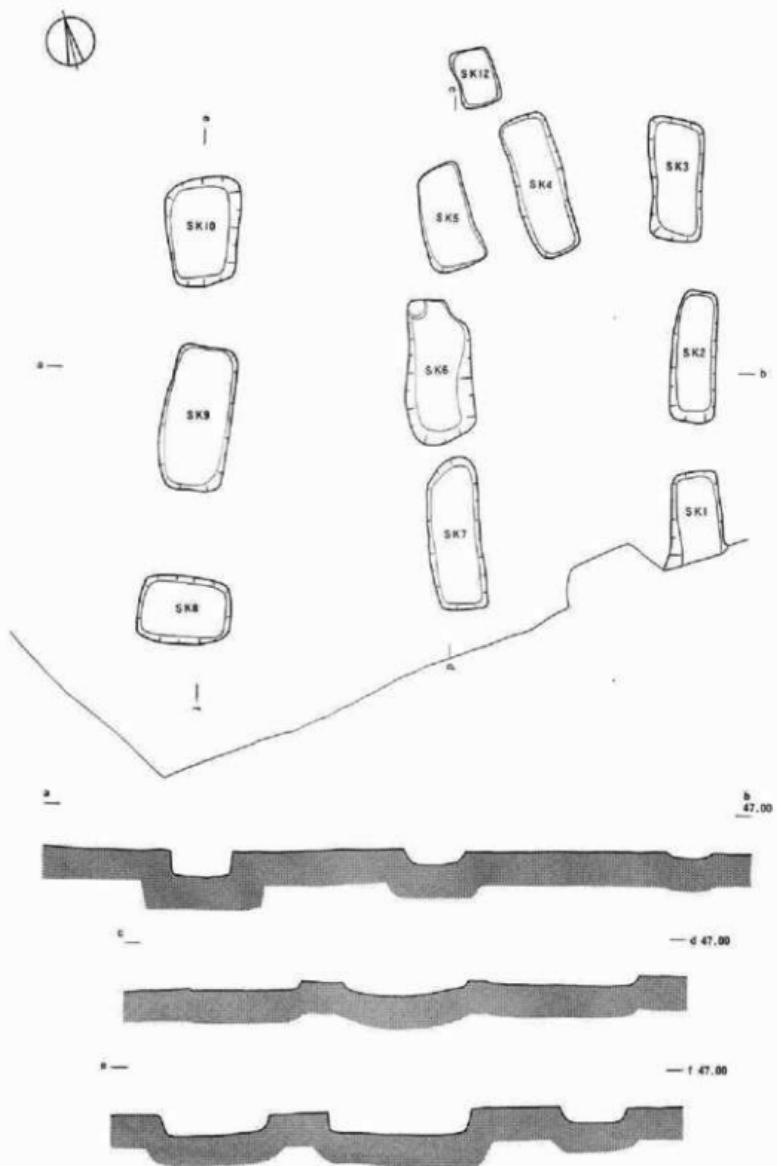
### SK1～SK10（第37図・図版14）

G・H・I-9・10・11区に位置する。SK4を除く9基は、3基3列の整然とした配列をしている。いずれも南北方向に長軸があり、縦に並んでいるが、SK8のみが東西を向いている。各々の土坑は、上面が削平され、底部近くが残っているにすぎない。長軸は120～180cm、短軸は60～80cm、深さ5～30cmを測る。覆土は、暗褐色土とローム粒子の混土で、整地層と類似しており、しまりはない。南北方向に縦に並ぶ東西間の幅は、両方共約3mと等間隔である。南北は各々が約20～100cmと一定しない。出土遺物は全くない。

計測表 (cm)			
No.	長軸	短軸	深さ
SK1	—	64	14
SK2	160	56	6
SK3	150	64	17
SK4	178	60	12
SK5	130	64	8
SK6	178	68	17
SK7	190	64	9
SK8	134	90	21
SK9	176	85	34
SK10	114	84	20
SK12	73	50	15



第36図 SK11 実測図(%)



第37図 SK1～SK10 実測図(%)

### S K11 (第36図・図版14)

H12区に位置する。長さ180cm、幅40cmの細長い土坑で、深さ30cmを測る。覆土は、やわらかい暗褐色土である。出土遺物はなく人為的な造構かどうかは判断がつかない。

### S K12 (第38図・図版14)

I10区に位置し、近接して南側にはS K4がある。長さ80cm、幅55cmの長方形を呈し、小形で、深さは15cmを測る。覆土は他と同じである。出土遺物はない。

### S K13 (第39図・図版14)

H17区に位置する。長径75cm、短径50cmの長方形で深さは14cmで断面U字状を呈する。覆土は他と同じであるが、出土遺物は全くない。

### S X14 (第40図・図版14)

I18区に位置する。遺物（土師器杯）の集中及び焼土のみられた地点である。焼土及び遺物は、所謂整地層の中にまとまって検出されている。第46図1～17が出土しているが、打製石斧、中世珠洲焼等も混入しており、平安時代の造構として捉えるには問題が残る。

### S K15 (第41図・図版15)

G26区に位置する。一边約160cmの方形になると考えられる。深さは、10cm程である。覆土は、しまりのない暗褐色土である。土坑内からは、土師器の細片が出土している。

### S K16 (第42図・図版16)

F25区に位置する。1辺90cmの隅丸方形で、深さは20cmを測る。覆土は、しまりのない暗褐色土である。出土遺物はない。

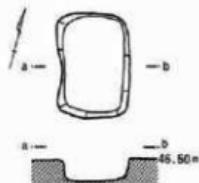
### S K17 (第43図・図版15)

C17区に位置する。瓢箪形に近く、長さ80cm、幅45cmを測る。深さは約40cm、覆土は①層が、しまりのある黒色土、②層は地山に近い黄褐色粘土である。縄文土器の細片が出土している。

### S K18 (第44図・図版15)

D17区に位置する。長さ75cm、幅50cmの隅丸方形を呈し、深さは30cmを測る。底面でやや袋状に広がる。覆土は①層がしまりのある黒色土、②層が暗褐色土、③層は地山ローム層である。縄文土器細片が出土している。

### S K19 (第45図・図版16)



第38図 S K12実測図(1/4)

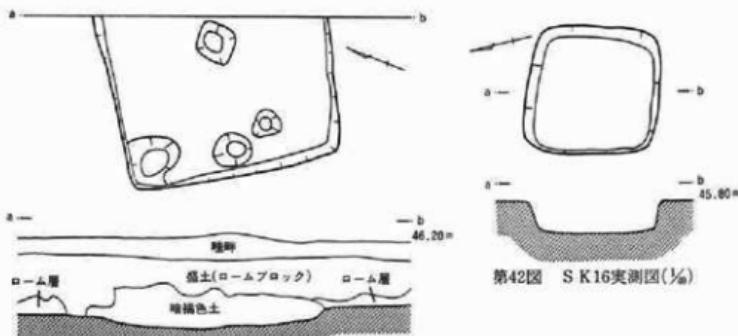


第39図 S K13実測図(1/4)

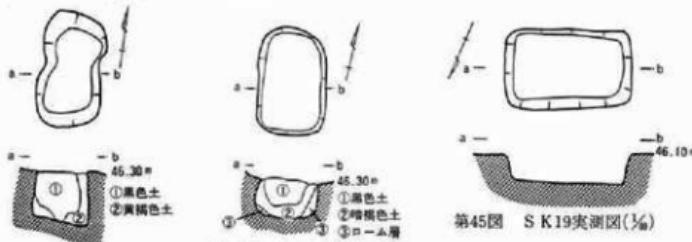


第40図 S X14実測図(1/4)

H18区に位置する。長さ90cm、幅55cmを測る方形の土坑である。深さは20cmで断面U字状を呈する。覆土はしまりのない暗褐色土で、出土遺物はない。



第41図 SK15実測図(1/50)



第42図 SK16実測図(1/50)

第43図 SK17実測図(1/50)

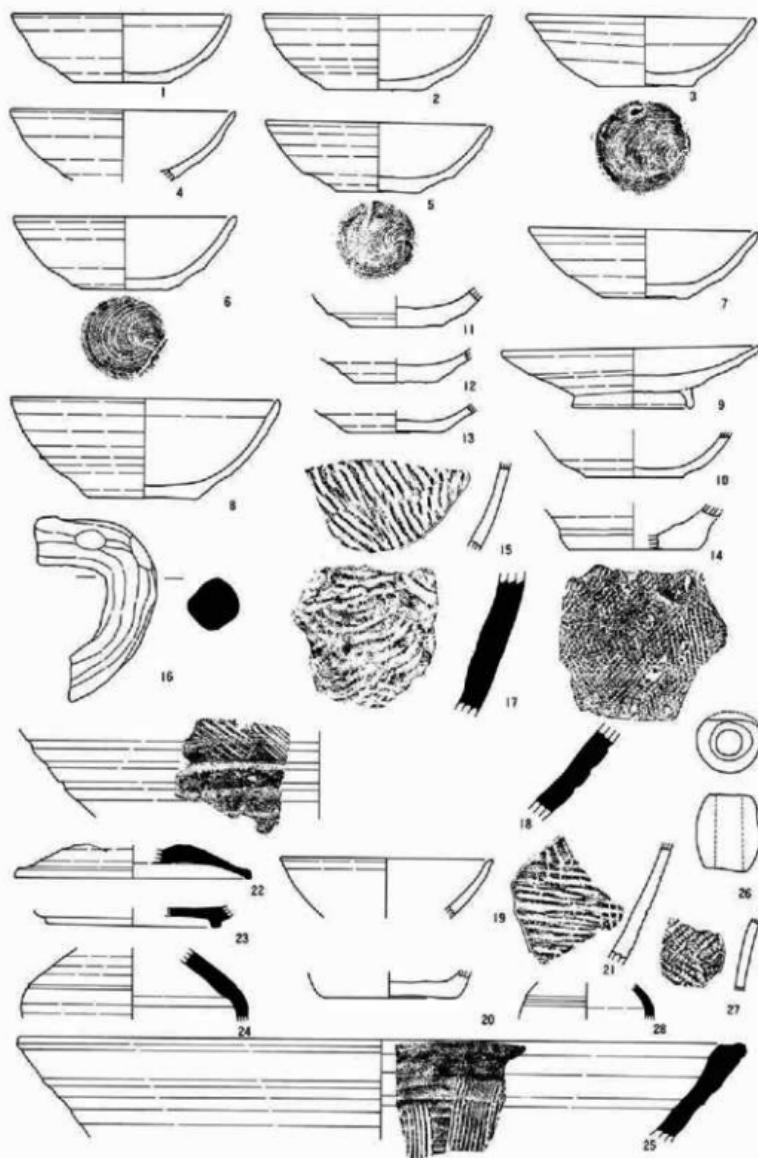
第44図 SK18実測図(1/50)

第45図 SK19実測図(1/50)

## 5. 遺物

### a. S X14出土遺物 (第46図1~18・図版17)

1は土師器杯、口径11.4cm、高さ3.7cmを測る。赤褐色を呈するが、残存状態はあまり良くない。内外面共にロクロナデであるが、内面はなめらかである。体部下半に少しふくらみを持つ。底部回転糸切り。2は、口径12.2cm、高さ4.1cmを測る。赤褐色を呈し、焼成良好。胎土は緻密である。内外面共にロクロナデであるが、内面はなめらかである。底部糸切り。3は、口径12.2cm、高さ5.2cmを測る。赤褐色を呈し、焼成は良好であるが、内面にはあれが目立つ。内外面共にロクロナデ。底部回転糸切り。下半にややふくらみを持ち、端部丸くおさまる。4は口径12.1cm、推定口径4.7cmを測る。赤褐色を呈し、焼成良好である。内外面共になめらかで、ロクロ整形である。端部丸くおさまり、口縁端部にススの付着あり。底部回転糸切り。5は、口径12.1cm、高さ3.7cmを測る。赤褐色を呈し、内外面共になめらかで、焼成良好である。内外面共にロクロ整形、底部回転糸切り。6は、口径11cm、高さ3.9cmを測る。赤褐色を呈し焼成良好。内外面共



第46図 土器・土製品実測図(3)

なめらかであるが、内面少しあれが目立つ。下半に少しふくらみを持ち、端部は丸くおさまる。7は、口径12.3cm、高さ3.7cmを測る。赤褐色を呈するが、内外面共に磨耗著しい。内外面共にロクロナデ。体部下半にややふくらみを持つ。8は、口径14.4cm、高さ5.3cmを測り、やや大形である。赤褐色を呈し、焼成良好。内外面ロクロナデの後、内面はなめらかにナデが加えられている。やはり体部下半にややふくらみを持つ。底部回転糸切り。9は、高台付皿である。口径13.8cm、高さ3.2cmを測る。ロクロ整形の後、内面に丁寧なナデが加えられる。赤褐色を呈し、焼成良好。10~13は、同じく土師器杯底部破片である。14は、甕の下半部と思われる。底部回転糸切り。15は長胴甕の下半部の破片で赤褐色を呈し、焼成良、外面平行叩き、内面ハケ調整である。16は須恵器甕の把手である。17は須恵器甕下半部の破片で、外面格子目、内面青海波文の叩きがある。18は、甕下半部の破片と思われるが、はっきりしない。外面ヨコナデの上面に平行叩きが見える。内面はヨコナデである。焼成は珠洲焼に近い。

#### b. その他の遺物（第46図19~28・図版17）

19は、推定口径11.2cmを測る土師器杯である。内外面共にロクロナデ。20は甕の底部破片と考えられる。内面ロクロナデ、底部回転糸切り。21は、長胴甕下半部の破片である。22は須恵器甕で推定口径12.6cmを測る。23は杯底部、24は小形壺の肩部の破片である。胴部径は約12cmを測る。25は珠洲焼攢鉢破片である。推定口径38.8cmである。26は土鍤である。長さ4.1cm、幅3.4cmを測る。茶褐色を呈し、焼成良好。中央に径1.5cmの孔が通っている。27は繩文土器である。茶褐色を呈し、焼成良好。厚さ0.4cmと非常に薄い。外面R Lの羽状撻文。28は近世陶器の壺の肩部である。外面赤茶褐色を呈する。

#### c. 石器（第47図・図版18）

本遺跡で出土した石器類は総数28点を数える。内訳は石器11点、剥片17点である。石器は図示したものが全てである。これらは遺構に伴っているものではないが、縄文時代の石器であり、出土する縄文土器の年代から前期前葉の所産と考えられよう。

##### 打製石斧（1~3）

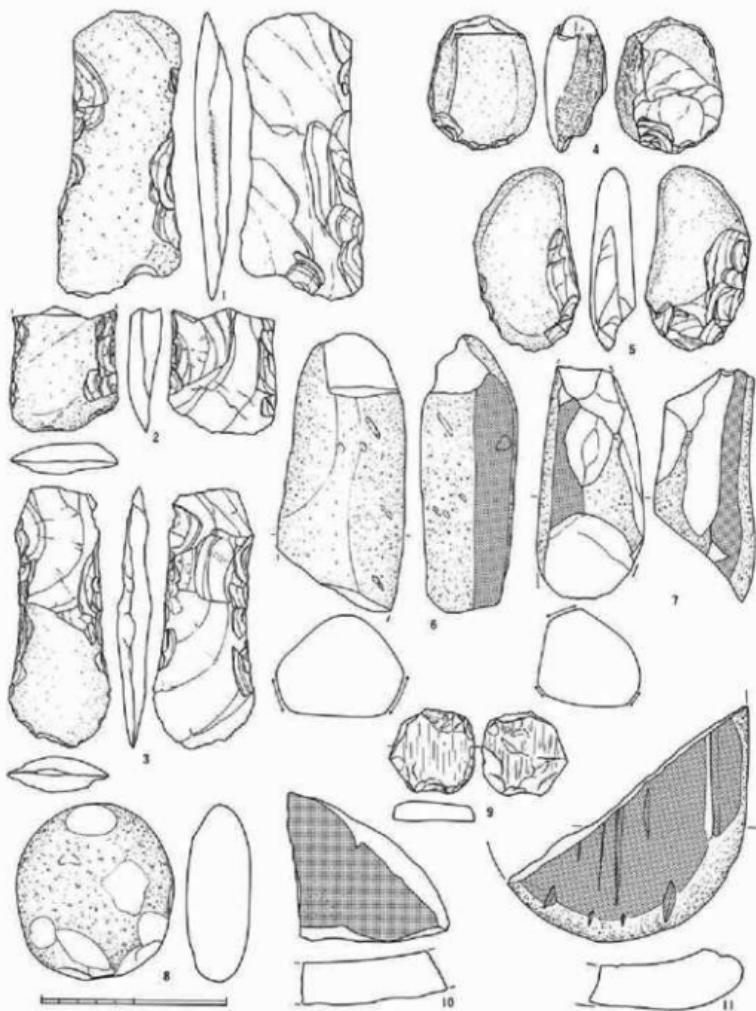
共に横長剥片を素材とし、刃部に丁寧な調整を加えていないものである。3は背面基部に大きな調整剝離を施し、厚みを減少させている。刃部は1・2と異り、丸みを帯びる。石質は、1が安山岩、2は砂岩、3は頁岩である。

##### 敲打石（4~8）

4はすんぐりした流紋岩礫を用いており、頭部・両側面に荒れた敲打痕が観察される。下縁辺に連続して小剝離が加えられ、裏面の剝離は上半にまで及ぶ。石器製作に関わるハンマーであろう。8は両端に礫の裏面側から剝離が加えられている。この剝離面を機能させたと思われる。石質は安山岩である。

##### 磨製石斧未整品（5）

調整剝離の過程にあるものである。研磨した痕跡は観察されない。石質は流紋岩である。



磨石（6・7）

第47図 石器実測図

いわゆる特殊磨石である。共に横断面三角形の礫を用い、その棱部を磨耗させている。6の頭部における割れは頂部を敲打して生じたものであろう。7は礫面の剥落が著しい。6は安山岩、7は砂岩である。

#### 玉類未整品（9）

白色不透明を呈し、石質はアルビタイト質であり玉類未整品と判断した。剥片の周辺に剥離を加えて整形し、背面・裏面・右側面が磨られている。

### 石皿・磁石（10・11）

11は明瞭な溝痕・線状痕を有し、凹石はよく磨かれ、ゆるやかな弧を描く。縁面・裏面は櫛面とする。10・11ともに石質は砂岩である。

### 剝片

円環の外殻面に一回の打撃を加えて得られた剝片12点と不整形の剝片5点である。

### 6.まとめ

今回出土した遺物のうち縄文時代の遺物としては、羽状織文の土器片の他、打製石斧、磨製石斧、石皿等が出土しているが断片的な資料のため、ここでは紹介するに止めた。平安時代に属する資料としては、S X14の一括資料がある。このうち第46図1～7の土師器杯は、法量製作技法が、ほとんど一致しており、同一生産地の一時期の所産であることは間違いない。県内の平安時代における土器の編年は、近年になってようやく、今池遺跡群の報告（坂井 1984）、上越市春日、木田地区の報告（坂井 1986）等で試みられるようになり、かなりの成果を納めている。この二つの報告の分類に準拠するならば、法量（口径11～12.3cm、高さ3.7～3cm）、及び内外面ヨコナデ、底部糸切り未調整で、体部下半に強いヨコナデ調整によるくびれが見られる等は、一之口西地区 S E 153及び183の杯IIIに共通するものである。また8は、法量的にやや大きく、どちらかと言えば杯IIに近いものである。9の有台皿は、県内では、ほとんど類例がなく、一般的な器種とは言えない。他には土師器長胴甕の破片、須恵器甕の破片等が出土している。これらの年代は、前述の法量、技法の共通性、及び有台皿の存在等から、S E 153、183に近い時期と思われ、およそ10世紀前半くらいに位置付けられるものと考えられる。

遺構については、時期不明であるが、SK 1～10が問題となる。出土遺物は全くなく、また覆土は整地土に近いもので、やわらかく、掘り方等も明瞭に区別できるものである。3基3列に整然と並んでおり、獨立柱の掘方とも考えられるが、柱根痕が全く確認されておらず、建物跡の可能性は少ない。次にこのような土坑形態から、墳墓の可能性が考えられるが、副葬品や骨蔵器等全くなく確証をつかむまでは致らない。その他、畑の野菜や穀類の栽培に関係した穴等も考えられる。以上のように性格をつかむことはできないが、いずれにせよ、人為的に掘られたものであり、ここでは可能性を列挙するに止めた。

以上のように、この段丘上には縄文時代から平安時代にわたる遺跡が存在するが、このような所謂中位段丘にも平安時代の遺跡が見られ、川沿いの低位段丘の他にも、広く土地利用がなされていたことがうかがえるのである。

## C. 岩野 E 遺跡

### 1. グリッドの設定（第33図）

グリッドは、上り車線のセンター杭STANo 353+20を基点とし、南北をY軸、東西をX軸として設定した。グリッドは4mメッシュとし、X軸が西から東へ1～、Y軸が南から北へA～とした。なお、確認調査の際には、任意に幅2mのトレンチをキ印に設定して行った。

### 2. 調査の経過

- 9・12 下草の刈払い及びクイ打ちを行う。
- 9・13～19 ペンチマークよりレベルを移す。
- 9・21～26 表土剥ぎを開始する。
- 9・27 M～P～9～12区、B～H～9～12区、C～D～13～16区発掘。
- 10・1～2 E～P～13～16区、17～24～E～H区、I～P～17～20区、I～L～21～26区、M～P～21～24区発掘。
- 10・4 H～I～9～10区遺物とりあげ。F～I～11～15区表土剥ぎ。
- 10・5～17 G～H～I～15～16区、J～K～11～12区、J～9～10区発掘。H～I～J～11～12区、H～K～14～16区遺構確認。
- 10・18 D～G～7～10区、F～G～11～12区遺物とりあげ。H～I～5～8区、D～G～5～8区遺構確認。
- 10・19 C～D～E及びH～I～5～6区及びF～G～11～12区遺構確認。
- 10・21 H～K～13～14区、J～K～9～10区遺物とりあげ。L～M～11～15区、F～G～11～14区、D～G～7～10区遺構確認。
- 10・22 I～M～11～15、9～10区、D～E～11～12区、F～G～9～10、11～15区遺構確認。
- 10・30 Gライン・Iライン北壁セクション図作成。  
I～M～7～10区遺構確認。
- 10・31 J～K～5～10区、B～E～5～12区、F～G～7～8区各遺構確認及び遺物とりあげ。
- 11・1 C～E～5～8区、F～G～7～8区を掘り下げる。
- 11・5 東西列ベルト3本はずし。遺物とりあげ。
- 11・8～11 I～K～L～M区遺構検出作業を行う。
- 11・12～14 雨のため作業中止。遺物の水洗、注記を行う。
- 11・16～18 土坑セクション写真、全体写真をとる。
- 11・19～21 遺構実測を完了し、作業を終了する。

### 3. 層序

遺跡の現状は杉林であり、過去に植林等が行われたため、木の根による擾乱が多い。したがって土層も擾乱により分断されている部分が多い。基本土層は以下のとおりである。

I層…表土（草根腐植土層）層であるが、比較的多く遺物の散布が見られる。

II層…茶褐色土層、しまりはあるが粘性なく、バサバサしている。遺物はこのII層に多い。

III層…暗褐色土層、やや黒みがかっている。しまりはあるが粘性はない。色の濃淡は場所によって異なる。やはり包含層であるが、遺物量は下部ほど少なくなる。

IV層…黄褐色土層、地山ローム質層である。

以上の層のうち、遺物は第II～III層に認められ、特にII層に多いという結果が得られたが、第I層においてもかなり見られたことから、遺物自体が、擾乱により浮いた可能性も強く、本来の包含層は第III層にあったものと考えられる。

### 4. 遺構

当遺跡で確認された遺構はすべて土坑で、計25基確認された。そのうち時期の判明しているのは、SK13のみである。他の土坑については、出土遺物は少なく、時期判定の材料となるものがないため、その構築年代は不明である。

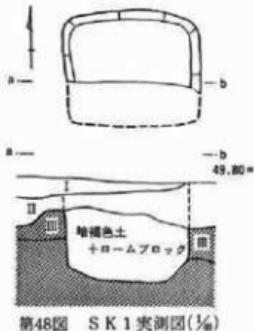
#### SK1 (第48図・図版20)

G・H12区に位置する。東西96cm、南北推定80cmを測る隅丸方形の土坑である。深さは、断面の観察では60cmを測る。覆土は、暗褐色土にローム粒子が混入したもので、しまりはないが、掘り方もしっかりしている。

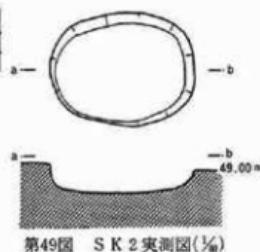
土師器の細片が1点出土している

#### SK2 (第49図・図版20)

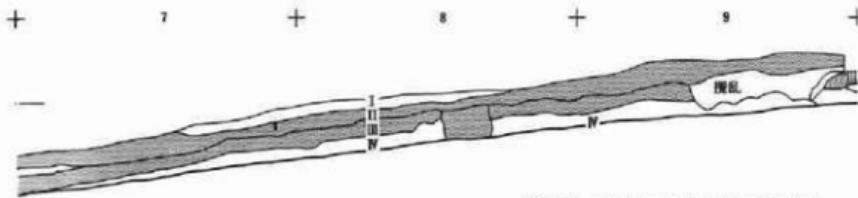
H13区に位置する、整った橢円形を呈し、長軸を東西方向にとる。長径102cm、短径80cm、深度15cmを測る。底面は緩く弓を描く。遺物の出土はない。覆土はローム質土粒子を含む暗褐色土一層である。



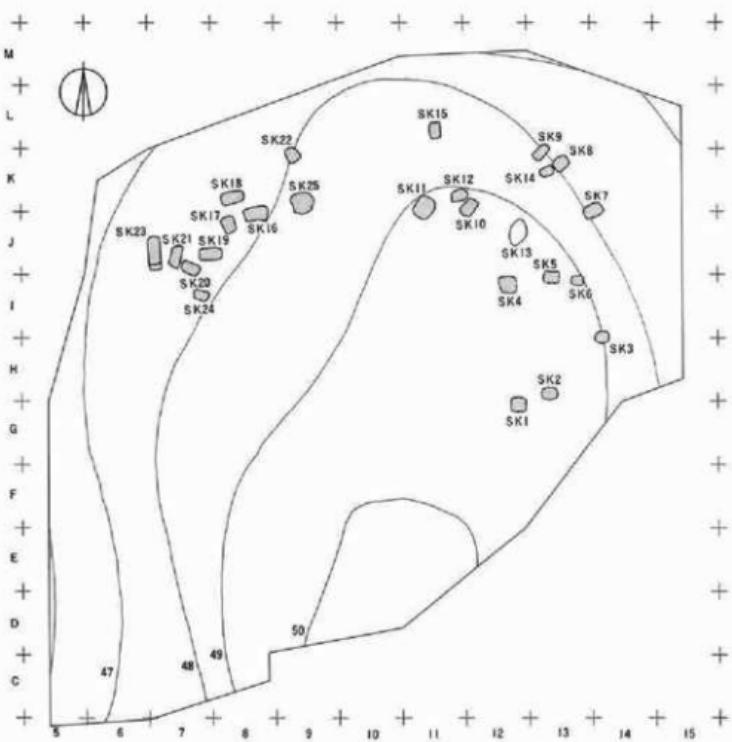
第48図 SK1 実測図(1/50)



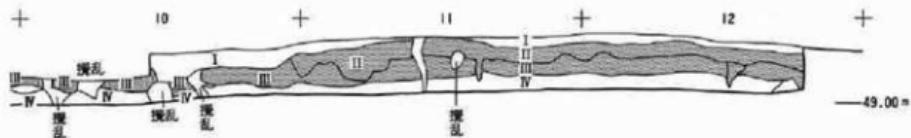
第49図 SK2 実測図(1/50)

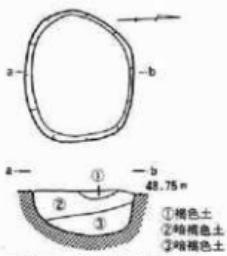


第50図 Eライン北壁土層断面図(1/50)



第51図 遺構配置図 (1/350)





第52図 SK 3 実測図(%)

**SK 3 (第52図・図版20)**

H14区・I14区境界に位置する。やや歪んだ梢円形を呈し、長軸を東西方向にとる。長径92cm、短径76cmを測る。北壁はほぼ垂直に他は大きく弧を描いて立ち上る。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土でしまりに欠ける。遺物の出土はない。

**SK 4 (第53図・図版21)**

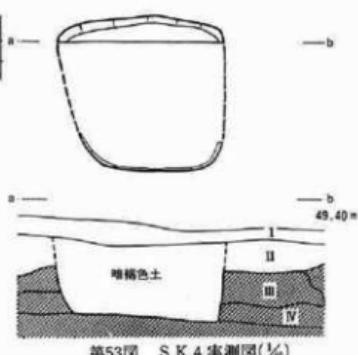
I12区に位置する。東西120cm、南北108cmを測る。やや不整方形の土坑である。深さは断面の観察から50cmを測る。壁は両端共に、ほぼ垂直に立ち上り、底面は水平に近い。土坑掘込みは、II層からであり、縄文時代の包含層を切っていることがわかる。覆土は暗褐色土に近いがしまりなく、バサバサしている。出土遺物はない。

**SK 5 (第54図・図版21)**

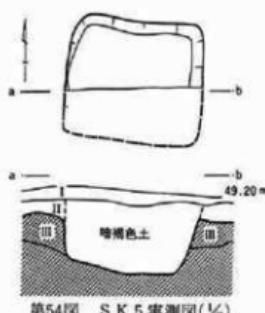
I・J13区に位置する。すぐ東隣にはSK 6がある。東西1m、南北推定90cmを測る不整方形である。II層を切って土坑は掘られており、深さは48cmを測る。壁は、西側ではほぼ垂直に立ち上るが、東側は約60°で立上る。覆土はII層に近いがやや黒味がある。しかし、しまりはない。出土遺物なし。

**SK 6 (第55図・図版21)**

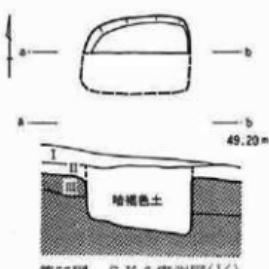
I13区に位置する。長軸を東西方向にとると思われる。東西76cm、南北推定56cmを測る。壁は、ほぼ垂直に立ち上る。底面は水平でなく、東側にかたむいている。II層を切って掘られており、深さは46cmを測る。覆土は、SK 5と全く同じである。出土遺物なし。



第53図 SK 4 実測図(%)



第54図 SK 5 実測図(%)



第55図 SK 6 実測図(%)

### S K 7 (第56図・図版21)

J・K13・14区に位置する。長径120cm、短径84cmの隅丸方形の土坑である。掘方断面はU字形を呈する。覆土は①～③層まで、いずれも暗褐色土であり、しまりはあまりない。②層には、白色の粘土細粒子を霜ぶり状に含む。出土遺物はない。

### S K 8 (第57図・図版22)

K13区に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸は地山面の傾斜とはほぼ直交する。長径104cm、短径84cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上る。覆土はしまりに欠け、上下二層に分れる。底面には木根の痕跡がみられる。

### S K 9 (第58図・図版23)

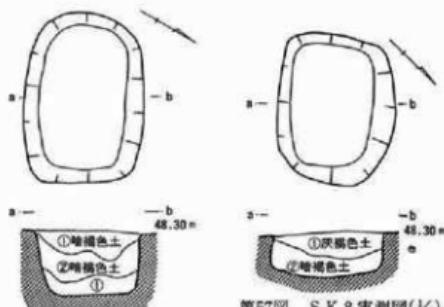
K13区・L13区の境界に位置する。隅丸長方形を呈し、北東端部は攪乱されている。長軸はS K 8とはほぼ平行する。長径116cm、短径60cmを測る。南西の端部が最も深く25cmを測る。底面はほぼ水平に整えられ、一部に木根の痕跡がある。壁はほぼ垂直に立ち上り、覆土は暗褐色土層一層である。

### S K 10 (第59図・図版22)

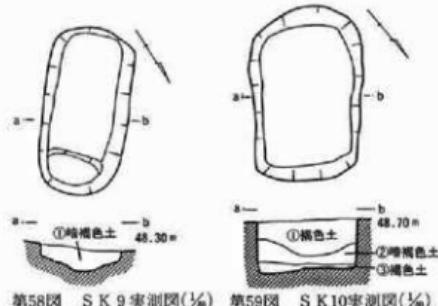
K12区南西隅に位置する。底面は水平に、壁面は垂直に堀り込み、断面形は長方形を呈する。長径124cm、短径76cmを測る。底面はローム質土ブロックを貼り床状に敷ききめている。石錐1点(第89図62)・剝片が1点出土している。

### S K 11 (第60図・図版23)

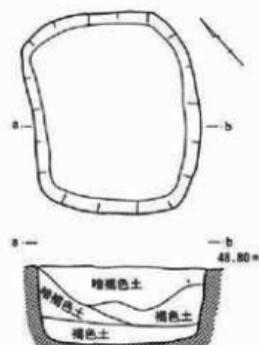
K11区・K12区の境界に位置する。やや歪んだ隅丸方形を呈する。長径144cm、短径115cmを測り、他の土坑と比較して長軸の比が小さい。底面は約15cmの厚みを持ってローム質土ブロックがほぼ水平に埋められている。上層においてもローム質土が多量に混入している。二次加工を有する剝片(第91図82)が出土している。



第56図 S K 7 実測図(%)



第57図 S K 8 実測図(%) 第58図 S K 9 実測図(%) 第59図 S K 10 実測図(%)



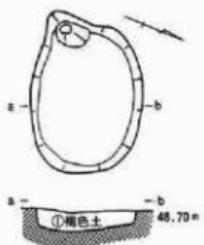
第58図 S K 9 実測図(%) 第59図 S K 10 実測図(%)



第59図 S K 10 実測図(%)



第60図 S K 11 実測図(%)



第61図 S K12実測図(1/2)

**S K12 (第61図・図版23)**

S K10の北東側に隣接する。

梢円形を呈し、南西隅に木根

の痕跡がみられる。長径116cm、

短径80cmを測る。S K10に比

して掘り込みは15cmと浅い。覆土はローム質土粒子

を多く含み、しまりに欠ける。

**S K13 (第62図・図版23)**

J 12区に位置する集石土坑である。土坑は長径160

cm、短径108cm、深さ80cmを測る。西側、南側壁には

テラス状の緩斜面を有する。土坑内は91個の円錐・

亜円錐が底面から積重し、上面中央には、最大の大

形扁平錐が臺状に置かれている。覆土の上層からは

約40片の土器片が検出されており（第63図）、本跡の

年代はこれによって縄文時代早期末葉～前期前葉に

比定される。覆土はしまりのよい暗褐色土であり、焼土、炭化粒が多く混入している。これらの礫は、すべて2次焼成を受けており、縄文

時代早期末から前期にかけてよく見られる。集石炉に近いものと思われる。

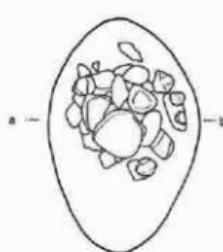
**S K14 (第64図・図版24)**

K13区に位置する。近接して、S K8・S K9がある。長軸の長さ

90cm、幅60cmを測る。長方形に近い土坑である。掘方断面はU字状を

呈する。覆土は、暗褐色土でしまり、粘性ともない。深さは30cmであ

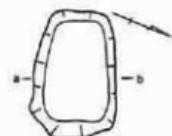
る。出土遺物なし。



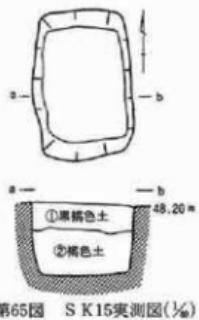
第62図 S K13実測図(1/2)



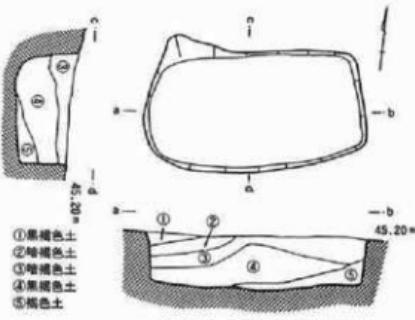
第63図 S K13出土土器拓影図(1/2.5)



第64図  
S K14実測図(1/2)



第65図 S K15実測図(%)



第66図 S K16実測図(%)

#### S K15 (第65図・図版24)

L11区に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸を南北方向にとる。長径108cm、短径70cmを測る。断面彫形は整った長方形を示し、底面は水平に整えられる。覆土はしまりに欠け、下層はローム質土ブロックの混入が著しい。出土遺物はない。

#### S K16 (第66図・図版25)

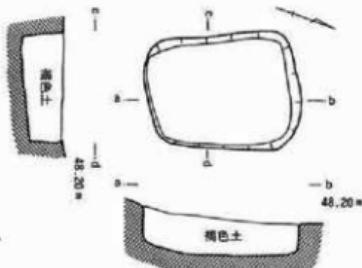
J 8区・K 8区の境界に位置する。隅丸長方形を呈し、長径148cm、短径88cmを測る。覆土はしまりにかけ五層に細分できる。遺物の出土はない。

#### S K17 (第67図・図版24)

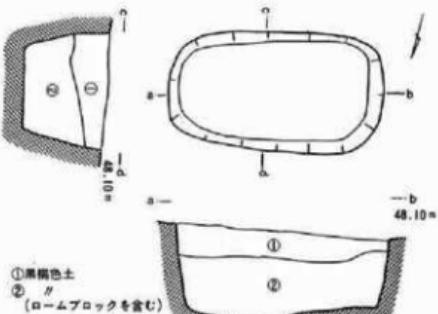
J 8区に位置する。隅丸長方形を呈する。長径106cm、短径80cmを測る。周囲の壁ははば垂直に立ち上る。覆土はしまりに欠けるローム質である。遺物の出土はない。

#### S K18 (第68図・図版26)

K 8区に位置する。隅丸長方形を呈し、長軸方向はS K16と平行している。長径140cm、短径84cmを測る。断面U字状を呈し、底面は平らである。覆土はしまりがなく、下層にはローム質土ブロックを多量に混入している。剥片が1点出土している。



第67図 S K17実測図(%)



第68図 S K18実測図(%)

S K19 (第69図・図版27)

J 7区・J 8区の境界に位置する。隅九長方形を呈し、長軸方向を東西にとる。長径144cm、短径80cmを測る。覆土は二層に分れ、上層には多量の炭化物を含み、下層はローム質からなる。二次加工を有する剝片が1点出土している。

S K20 (第70図・図版28)

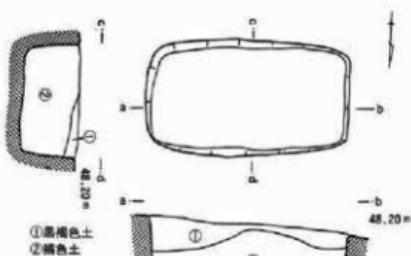
J 7区南東隅に位置する。長径118cm、短径78cmを測る。覆土は三層にわかれ、上層の二層には炭化粒が多く含み、下層はローム質土からなる。遺物の出土はない。

S K21 (第71図・図版29)

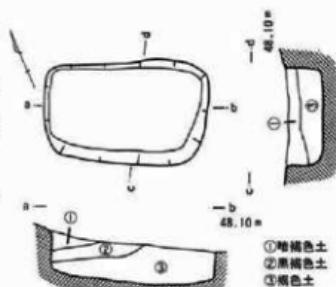
J 7区に位置する。隅九長方形を呈し、長径118cm、短径66cmを測る。南壁中位には幅10cmの平坦面を有する。覆土は他の土坑と逆転し、下層が暗褐色土、上層がローム質土となる。縄文時代の局部磨製石斧（第85図19）が出土しているが、本跡とは時期を異にする。

S K22 (第72図・図版30)

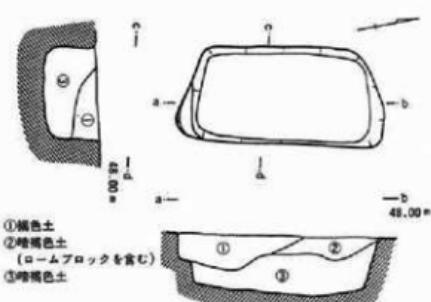
K 9区に位置する。不整椭円形を呈し、長径100cm、短径80cmを測る。底面をU字形に掘り込み、他の土坑とは異なる。覆土は腐植を多く含む暗褐色土一層である。



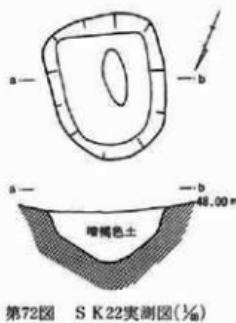
第69図 S K19実測図(1/6)



第70図 S K20実測図(1/6)



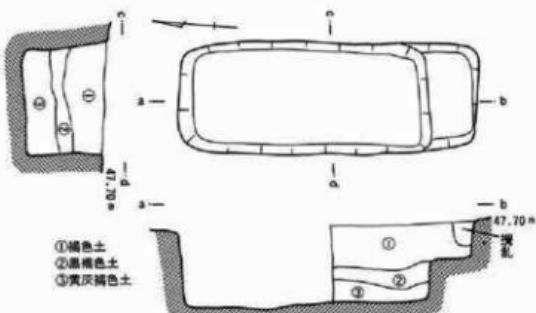
第71図 S K21実測図(1/6)



第72図 S K22実測図(1/6)

**S K23 (第73図・図版30)**

J 7 区に位置する。ほぼ南北方向を向く。長さ 210cm、幅 80cm を測る方形の土坑で、これら土坑群の中では最大である。掘り方断面は、きれいな U 字形を示す。深さは 60cm で、南側には一段深いテラスを有する。覆土は第



第73図 S K23実測図(1/4)

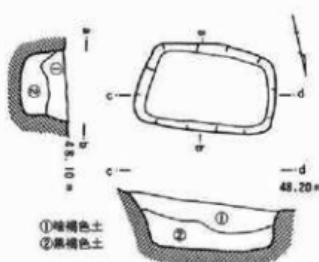
- ①層が褐色土で、しまり、粘性なく、粒子があらい。
  - ②層は、黒褐色であるが、やはり、しまり、粘性ともない。
  - ③層は、黄灰褐色土で、しまりはあまりないが粘性はある。
- この③層は、地山土の二次堆積土で、ブロック状の大粒子が目立つ。覆土の堆積状況から、この土坑を掘り上げた土により再び、人為的に埋め戻されていることがわかる。

**S K24 (第74図・図版31)**

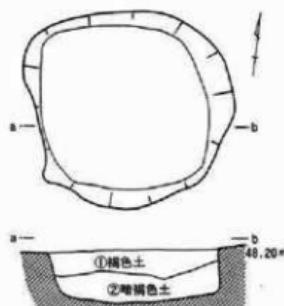
I 7 区に位置する。隅丸長方形を呈し、長径 100cm、短径 62cm を測る。掘り方断面は、西側がほぼ直立に立ち上るのに対して、東側はゆるやかである。また底面はほぼ水平である。覆土はしまりがなく二層に分れ、下層にはローム質土ブロックを多く含む。遺物の出土はない。

**S K25 (第75図・図版32)**

K 9 区に位置する。付近は浅く擾乱されており、本跡も北辺と南辺が擾乱を受けている。隅丸方形を呈するのは本跡のみである。縦・横 140cm、深さ 38cm を測る。覆土はしまりがなく、下層にはローム質土粒子を多く混入している。遺物の出土はない。



第74図 S K24実測図(1/4)

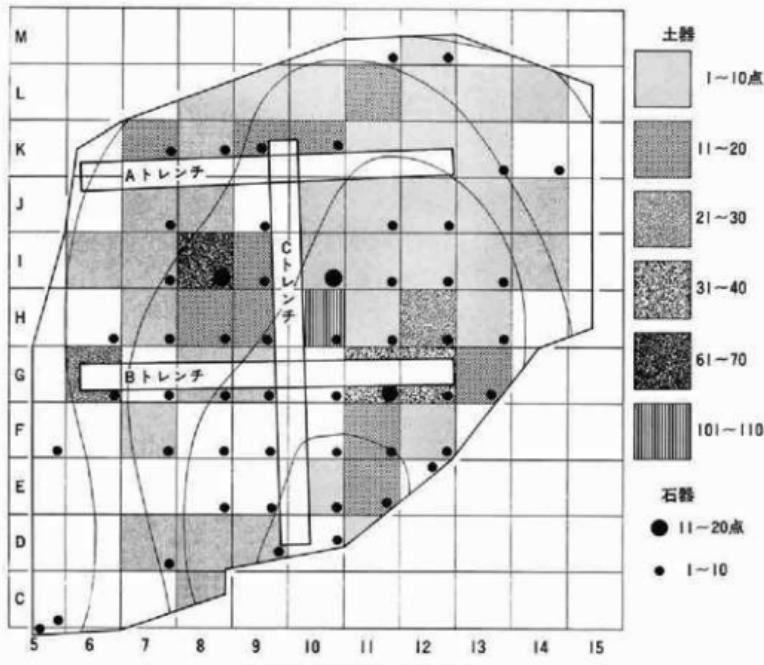


第75図 S K25実測図(1/4)

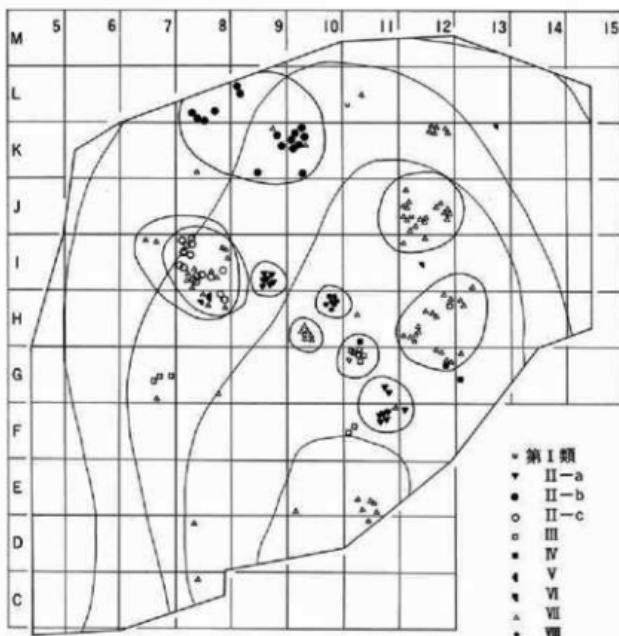
## 5. 遺物

本遺跡において出土した遺物は総数約1,000点を数える。第76図は確認調査時に出土したものとI層内で出土したものとを除いた768点の平面分布を図示したものである。遺物は調査区域のほぼ中央で比較的まとまって出土しており、この区域は台地最高部よりやや北側の緩斜面にあたる。この他は遺物の出土は散漫である。E・F・8・9区においては土器の出土が全くない。台地の西方・北方は傾斜が急であり、北方では沢を利用した溜め池が造成されているほどであるが崖縁付近にまで遺物が出土する。これら遺物の殆んどは繩文時代早期～前期のものであるが、古代・中世の土器が若干混在している。G 6区では土師器腹、H 10区では須恵器蓋・須恵器杯が出土している。土師器は少數みられるが、いずれも細片である。層位的にはI層～III層に遺物を包含しており、IV層にいたっては無遺物となる。I層・II層からの出土が多く、III層では漸次減少する。III層には古代・中世の遺物は出土しない。

繩文土器の類別分布（第77図）では、類ごとに明確なまとまりが認められる。しかしながら層位的な上下関係は分布が稀薄なために明確な把握を得られなかった。



第76図 出土遺物平面分布図



第77図 繩文土器類別平面分布図

### a. 土器

出土した土器は、縄文早期から前期にかかるもの及び、奈良、平安時代に属するものである。遺構に伴って出土したものはSK13出土のもののみであり、他はすべて包含層である。したがって土器はここで一括する。

#### 縄文土器（第78図～第83図・図版33～図版40）

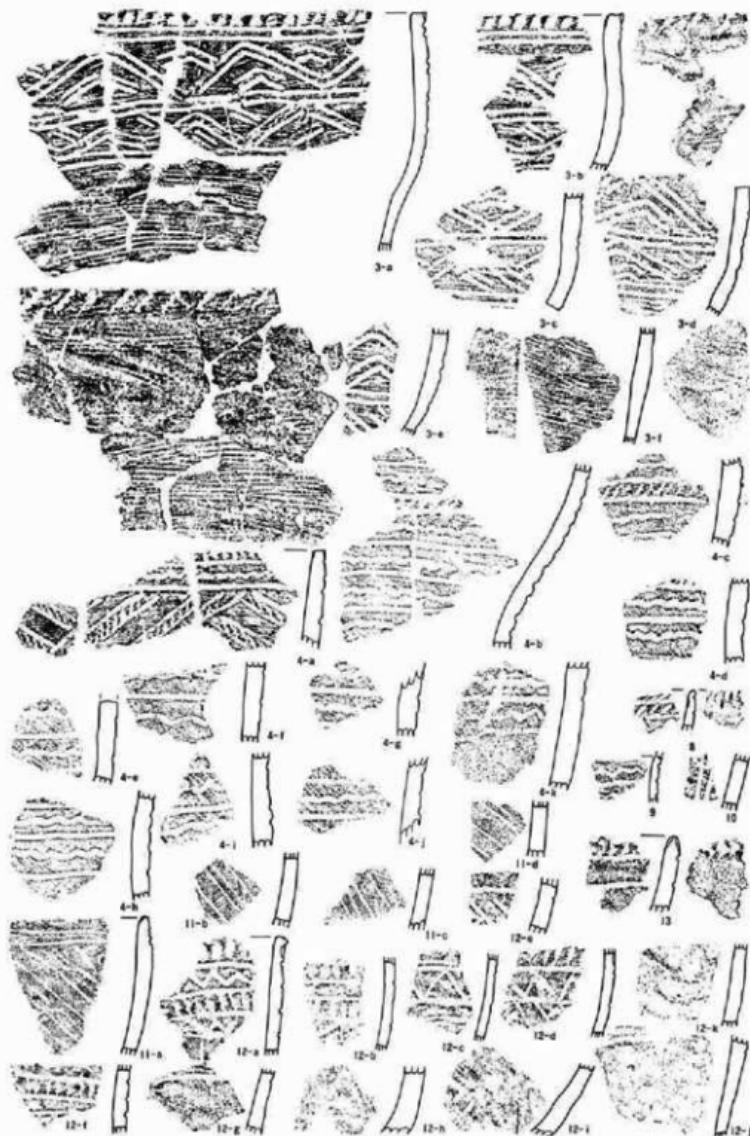
##### 第I類（1.2）

押型文土器である。1は茶褐色を呈し、焼成良好、胎土内にパミス状の粒子を含む。文様は横円文と山形文との組合せである。2も、茶褐色を呈するが、やや薄手である。文様は斜格子目である。

##### 第II類-a（3.4）

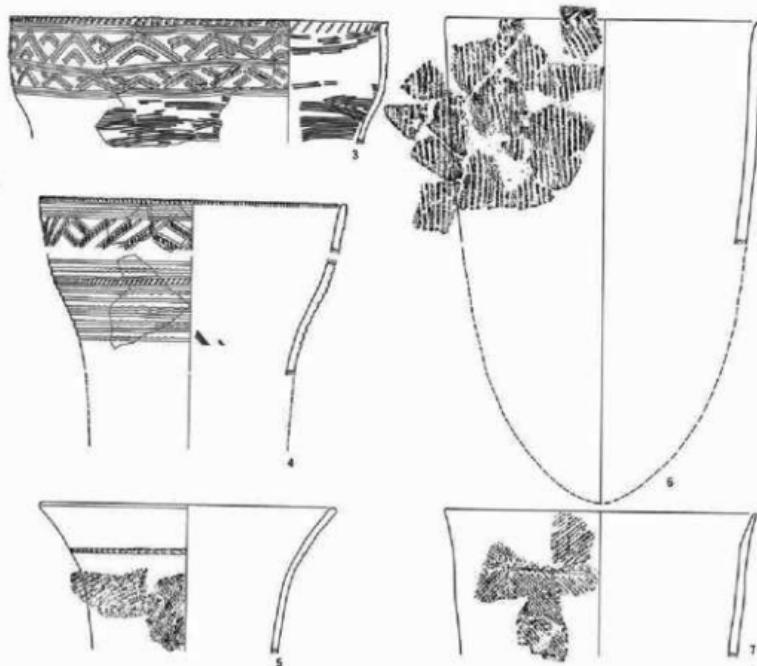
貝殻条痕文系の土器で沈線文を主体とするもので、胎土内に植物繊維をほとんど含んでいない。



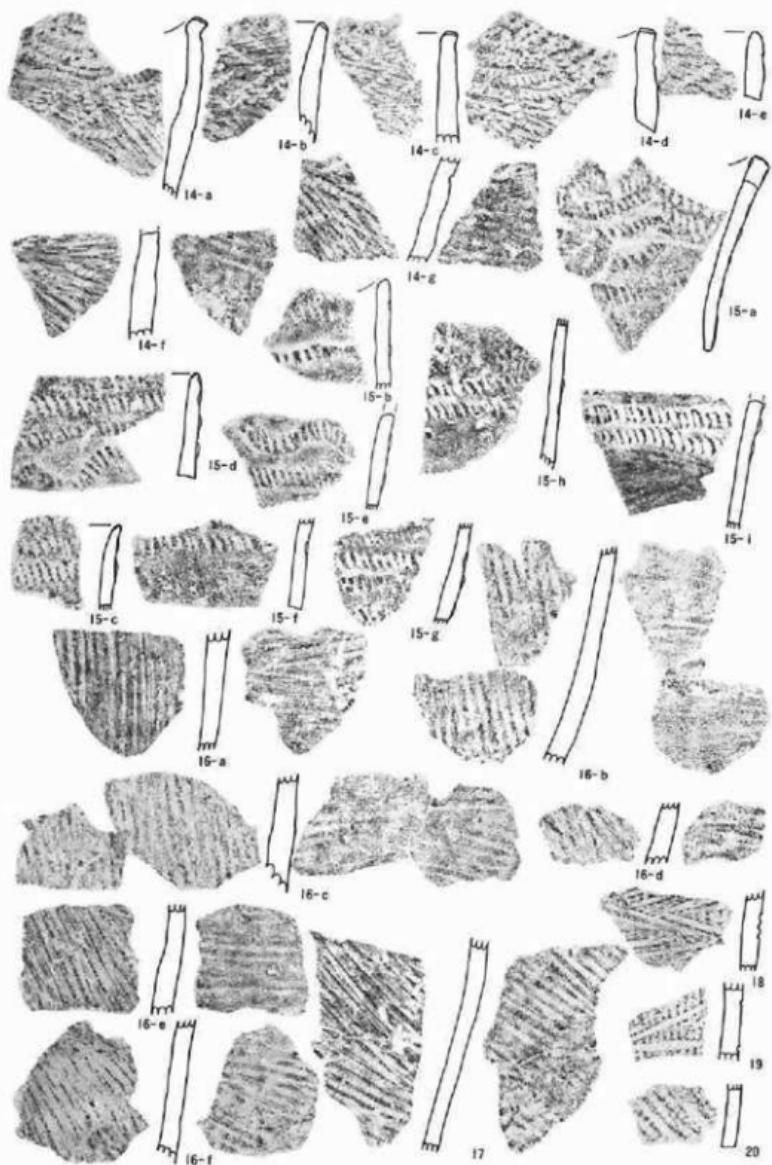


第79図 土器(1) (1/2-5)

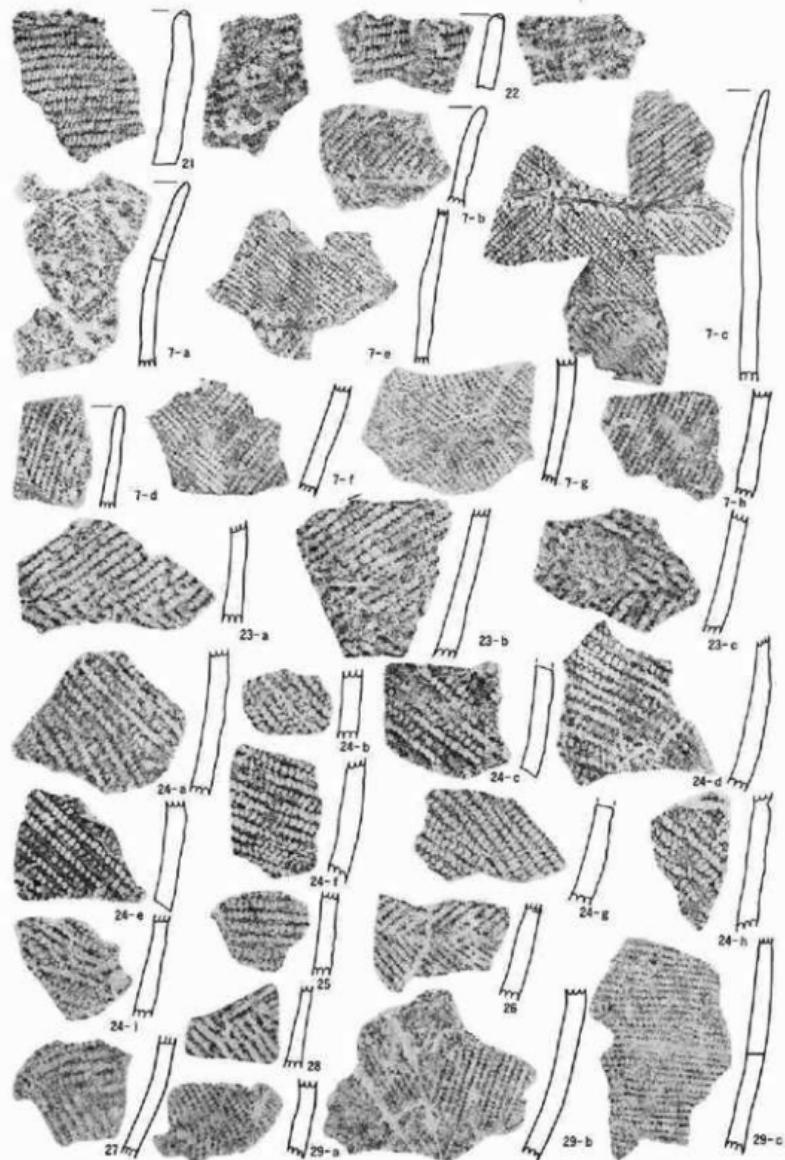
3は、推定口径33.5cmを測る深鉢の口縁部破片である。茶褐色を呈し、焼成は良好である。胴部上半は、ややふくらみをもち、底面は尖底又は丸底になると想われる。外面は貝殻条痕により整形の後、文様を描いている。口縁部は水平で角ばかり、端部にはヘラ状工具により、斜めにキザミが付される。その下に二本一組の棒状工具により、平行沈線を三段引き、その間を同一工具による連続山形文が充填され、各々山形の隙間に山形文が付される。また部分的に貝殻腹縁文が見られる。内面も貝殻条痕文で、上端には貝殻腹縁文がある。内外面共に炭化物の付着が見られる。4も3とはほぼ同様の器形で、口縁部がやや開きぎみに立ち上る。推定口径27.2cmを測る。茶褐色を呈し、焼成良好。胎土内に白色の小砂利が目立つ。4-aはその口縁部破片である。口縁端部は断面平坦で、内外面共に貝殻腹縁文が一周する。外面浅い条痕整形の後、浅い沈線による直線文、波状文が一周し、その下に二本一単位の沈線が山形に配される。また、その沈線内には、貝殻腹縁文が充填される。内面には、横方向のナデが加えられ、端部には、やはり貝殻腹縁文が配される。それ以下には4-bのような文様が続くものと考えられる。浅



第80図 土器(2)(3)



第81図 土器(3) (1/2.5)



第82図 土器(4) (1/2.5)

い沈線による直線文が繰返される。またそれ以下は、4-hのように無文となる。内面は、貝殻条痕による調整である。内外面共に炭化物の付着が見られる。

#### 第II類-b (14.16.17)

貝殻条痕文系の土器で、aに比べて厚手で植物纖維を多く含むものである。14は、波状口縁となる深鉢である。茶褐色を呈し、胎土内に纖維を含む。外面条痕文整形の後、貝殻腹縁を刺し、少し引き上げる手法により、横八の字状に施文している。内面は一部に条痕が見られ、また口唇部も貝殻腹縁文である。16、17は内外面共に貝殻条痕文が付される。いずれも炭化物の付着が目立つ。

#### 第II類-c (6)

bと同様であるが内面に条痕は見られないものである。6は、推定口径31cmを測る深鉢である。ほぼ直線的な器形となる。赤褐色を呈し、焼成良好、器厚約1cmを測る。胎土内に植物纖維を含む。外面は縦方向に貝殻条痕文が走り、内面はなでられているが、あれている。口縁端部には、八字状のキザミが見られる。

#### 第III類(8~12)

沈線文と貝殻腹縁文とを併用する土器である。8は非常に薄手の口縁部破片である。茶褐色を呈し、焼成良好。口縁部にそって浅い平行沈線がまわり、その間にヘラ状工具による刺突が充填される。内面にも同様にヘラ状工具による刺突がめぐる。9も同じ系統である。やはり薄手で、細い平行沈線と山形文が見られる。10はやや厚手である。縦方向に棒状工具による沈線が走る。11は茶褐色を呈し、焼成良好。浅い沈線と、貝殻腹縁文を交互に施文している。また口唇部にも貝殻腹縁文が見られる。12-aは茶褐色を呈する口縁部破片で、横の沈線を数条めぐらせ、その間をそれぞれ上からヘラ状工具による刺突、沈線による山形文、貝殻腹縁文、山形文としている。12-b~fも同様の文様が見られる。12-g~jは、その下半部と考えられ無文で底部は尖底か丸底になると思われる。

#### 第IV類(15)

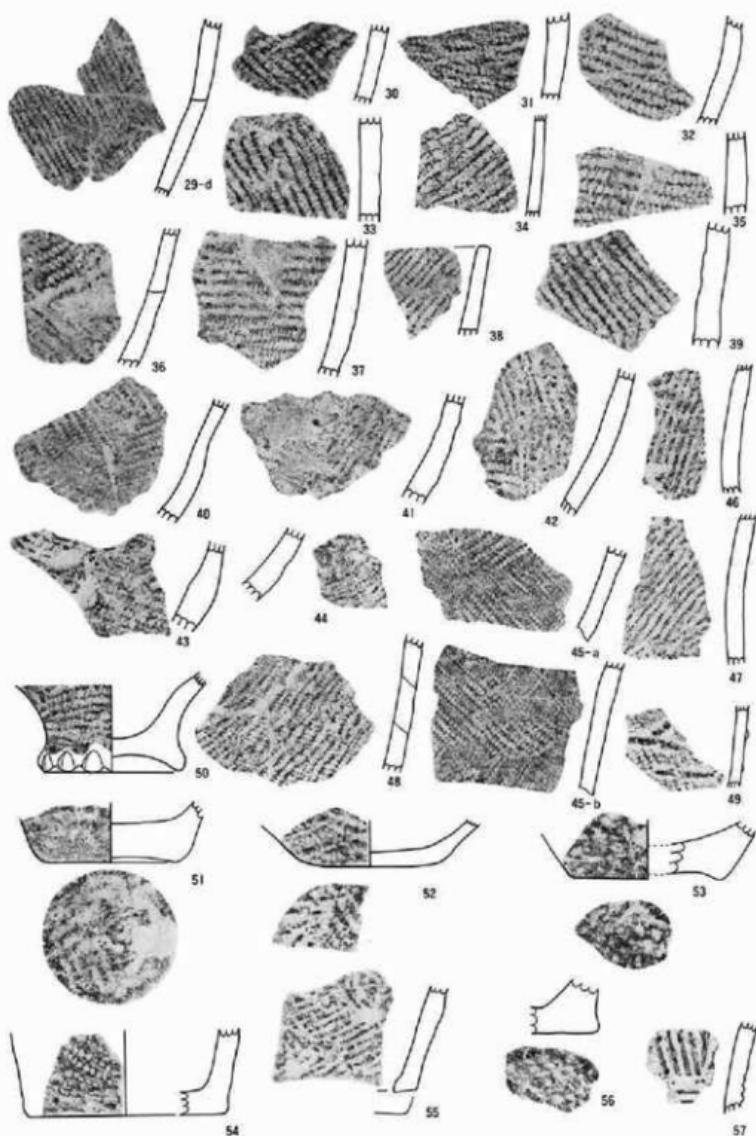
いわゆる東海系の土器である。15は波状口縁となる深鉢である。明茶褐色を呈し、焼成良好文様として連続の爪形文を施文しているが、隆帯をはり付けた上から施文するのと、ただ爪形文を施文するのとが併用されている。口唇部内面にも同様の爪形文がある。下半は無文帶になると考えられる。二次焼成を受けている。

#### 第V類(21.22)

いわゆる表裏繩文である。21・22は同一個体と考えられ、茶褐色を呈し、焼成良好、やや厚手である。口唇部は小波状を呈する。外面の繩文は多条のL Rが施文される。内面は判断がつかない。

#### 第VI類(18~20)

繩文+沈線文の土器である。18は繩文地上に矢羽根状の沈線が施文される。19・20も同様に



第83図 土器(5) (1/2.5)

沈線が見られる。SK13出土の土器は明茶褐色を呈し、焼成良好、胎土内に纖維を多く含む。直線的に開く深鉢である。土器全面に多条のRL繩文を施文の後、口唇部にやや幅広の棒状工具で縦の断面皿状の浅い沈線を施文し、以下は横方向に不規則に沈線が加えられる。

#### 第VII類-a (7.23~44, 46, 47)

繩文のみのものを一括する。羽状になるものと斜繩文のものの二種類がある。いずれも胎土内に纖維の混入を認める。7は口縁のやや外反する深鉢。茶褐色を呈し、焼成良好、胎土内に小白色粒子が目立つ。外面は、繩文LRとRLを用いて羽状繩文による菱形文様を作っているが各々の原体回転の隣接部は、原体を強く押すことにより、粘土を隆起させて、格子様の文様区画にしている。外面にススの付着が著しい。23は暗褐色を呈し、焼成良好、LRとRLの羽状繩文、外面に炭化物付着。24は茶褐色を呈し、焼成良好、内面に炭化物の付着がある。外面RLの斜繩文。25は、暗褐色で焼成良好、纖維の混入が著しい。外面RLの斜繩文。26はやはり纖維の混入が目立つ。外面RLとLRの羽状繩文。27は内面炭化物の付着が著しい。外面羽状繩文。28も羽状繩文である。29は底部近くの破片である。LRとRLの二本の原体を用いている。やはり纖維の混入が著しい。7と同一個体の可能性が強い。30は羽状繩文。31・32は斜繩文。33は多条のLR斜繩文。34は多条のRL。35はRLの斜繩文である。36も羽状繩文である。37は21と同一個体の可能性が高い。38は口縁部破片。口縁部は断面角ばる。外面LR。口唇部にも繩文が施文されている。39は茶褐色を呈し、やや厚手の土器であり、炭化物の付着が著しい。多条のLRである。40~44は底部近くの破片で、丸底になると想われる。46・47は同一個体の可能性がある。外面Lの斜繩文。

#### 第VII類-b (50~56)

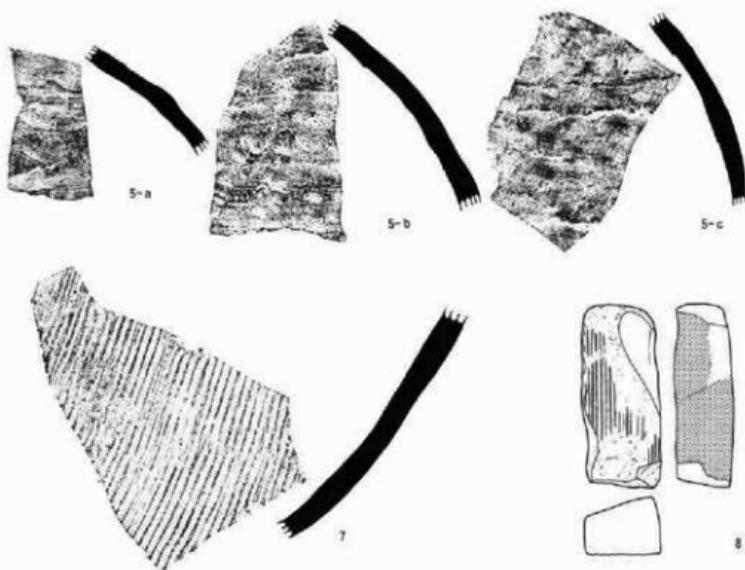
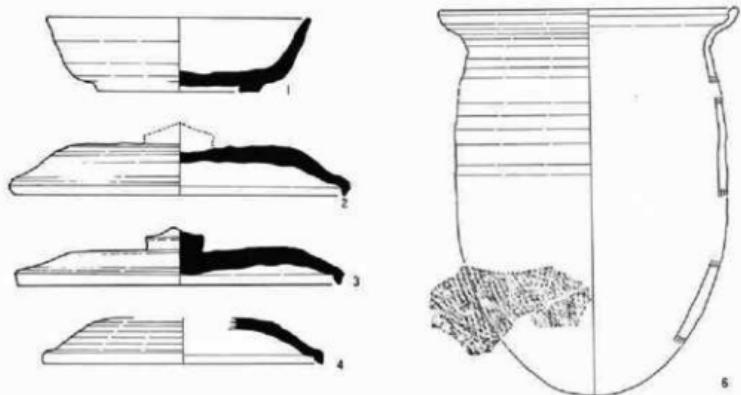
底部の破片である。50は上げ底の底部破片である。八の字状に開き、端部に押圧による連続圧痕が見られる。全面にLRの斜繩文が施文される。51は纖維の混入が著しい。やや上げ底風である。底部にも繩文が付される。52は底部薄手で、胴部と同じである。底部、胴部共にRLの繩文である。53は上げ底風の底部である。厚くしっかり作られている。やはり繩文が付される。54・55は繩文RLである。56は底部がやや張り出し、底部網代である。

#### 第VIII類 (5)

爪形文を用いるものである。1個体のみである。5は口縁部の大きく外反する深鉢で、推定口径26.5cmを測る。茶褐色を呈し、焼成良好。口縁部上半は無文帶で以下、繩文LRを施文の後、上半部に連続の爪形文を一周させている。外面に炭化物の付着が見られる。

#### その他の土器 (45, 48, 49, 57)

上記いずれにも属さないものである。45は胎土内に纖維の混入がなく、焼成良好である。LRとRLの羽状繩文である。48も纖維を含んでおらず、焼成良好である。外面RLの斜繩文。49は薄手の土器。茶褐色を呈し、焼成良好。胎土も緻密である。RLを施文の後、粘土帯を貼付け、側縁に細い刺突が連続する。57は繩文中期の土器で、半截竹管文である。



第84図 土器、砥石(6)(1/2.5、6のみ1/6)

### 須恵器・土師器・他（第84図・図版40・41）

1は、口径12cm、高さ3.4cmを測る杯である。内外面共にヨコナデ。高台は低く、やや内側を向きつぶれた感じを受ける。底部ヘラ切り。内面にはナデが加えられる。2は蓋である。口径15.5cm、現高2.4cmを測る。口縁端部断面三角形で直立する。天井部ヘラケズリ、以下ヨコナデである。内面は、ヨコナデの後、中央部ナデが加えられる。3の蓋は、口径14.7cm、高さ2.6cmを測る。外側に自然釉がみられる。口縁端部やや丸味をもつ。胎土はあまり良くななく、胎土内に白色の長石粒を多量に含む。天井部ヘラケズリ、以下ロクロナデである。内面もロクロナデであるが、中央にナデが加えられる。4は推定口径12.7cm、約5%を欠損する。やや深みのある蓋である。口縁端部垂直に立つ。5は壺肩部の破片で、外面全体に自然釉がかかる。内面茶褐色を呈し、輪積み痕を残す。6は土師器長胴甕である。推定口径20.5cm、高さ26.0cmくらいになるとされる。黄褐色を呈し、焼成良好、口縁端部は厚肥し丸味をもつ。胴部にややふくらみを持つが最大径は口縁部にある。下半外面は格子目の叩き目、内面はなめらかである。7は珠洲焼甕の胴部下半の破片である。青灰色、焼成良好、外面平行叩き目、内面にはナデが加えられる。8は砥石である。下部を欠損する。長さ8cm、幅約3cm、厚さ約2.5cmを測る四角柱である。片面のみ磨痕が認められるが、磨面は平らでなく、波をえがいている。欠損部を除く他の面には、金属性工具で削ったような条線状の痕が残る。凝灰岩と思われる。

以上のうち、1～3の杯・蓋は、器形や整形技法(内面にナデが加えられる)等に奈良時代前半の特徴をうかがうことができ、今池遺跡(坂井 1984)における第Ⅰ又はⅡ期に相当するものと考えられる。すぐ下の岩野下遺跡に同時期の遺構もあり、それらに関連する遺物と思われる。長胴甕は、口縁部が受け口状になる等、新しい傾向が見られ、ほぼ平安時代の所産と考えられる。

このように単発的に遺物が出土していることは、集落跡以外の別目的で、このせまい台地が一時的にせよ使用されていたことを示すものである。

### b. 石器（第85図～第92図・図版42～図版48）

本遺跡において出土した石器類は総数440点を数えており、これら石器類は併せて出土した土器から縄文時代早期中葉から、中期前葉の時期に比定される。このうち主体を占めるのは土器と同様に早期末葉から前期前葉にかかるものであろう。層位的にはⅠ層～Ⅲ層まで散漫に出土しており、Ⅳ層では漸次減少の傾向が窺える。Ⅳ層に至っては全く出土がない。平面的には調査区のほぼ中央、台地中央部のやや北側に集中する分布を示す。これは土器の平面分布と重なるところである。傾斜度の強い西側では殆ど石器の出土は見られない。440点の内容は石器（未整品と考えられるものを含む）95点、剝片279点、自然礫60点、剝離痕を有する礫等9点である。

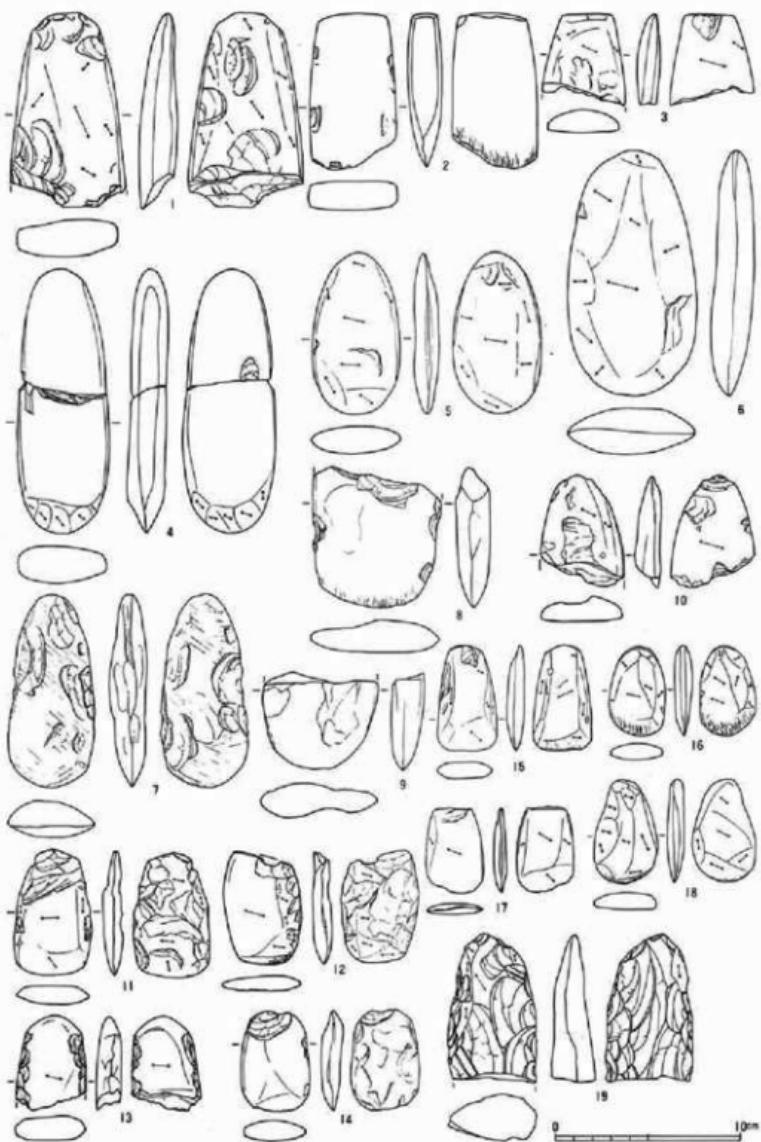
#### 磨製石斧（1～28）

未整品と考えられるものを含めて28点の出土がある。磨製石斧は3点を除き表裏に剥離痕をとどめており、製作過程上、調整剝離の後に研磨が施されることを示している。これらの大多

数は剥離底を完全に除去せずに使用されたと思われ、刀部が明瞭に研ぎだされていないものと素材の調整過程にあるものを末整品として区別した。剥離底を残さない3点（4・16・18）は礫素材を直接研磨した可能性が大きい。片刃の形状を呈するものが多いが、これらは礫から剝片を得た時点において素材が湾曲しているという理由によるものであろう。1～3は定角形を呈するものである。2は刀部が偏刃をとるが、これが使用によって生じたものか偏刃として製作されたものか、判断し難い。使用擦痕は長軸に平行して観察される。1・3に比べて極めて整った定角形を示す。3はカマボコ状の横断面形を示す。刀部も片刃となろう。4は分厚く、刃面が明瞭に研ぎ出され、刃部角度も著しく大きい。礫素材を直接研磨したものと思われる。5・6は平面橢円形、断面凸レンズ状を呈する。基部・刃部とも丸く整えるところが特徴的である。6は側面・基部の面取りが明瞭ではない。9も5・6と同様な形状をとるであろう。7は基部が細く乳棒状の平面形をとる。11～14は本遺跡においては中形の部類に入るものである。礫面を基部に残す13を除いては、剝片を素材とし、片刃をとる。殊に裏面は剥離底を大きく残し、平面的に研磨される。15～18は小形の磨製石斧である。16・18は目的とする形状の礫を選択し、礫素材をそのまま研磨していると思われる。15・16・18は使用によると見られる擦痕が観察され、これは研磨痕とは明瞭に異なる。また17には刃こぼれが生じており、これも使用によると見られる。19は局部磨製石斧である。研磨の進んでいない未製品とも考えられるが、脇部に全く研磨が及んでおらず、脇部を意識した局部磨製石斧と理解される。20～28は磨製石斧未製品である。研磨の過程にあるものの刃部を研ぎ出していないもの（20～22）、素材の整形過程にあるもの（23～28）に二分される。27・28は打製石斧と考えられないこともないが、石材は流紋岩・蛇紋岩を用いていること、後述の打製石斧とは製作技術が全く異なることから否定される。28はおそらく礫素材の厚みが減少していないために研磨されなかったのであろう。21は刃部を研ぎださずに製作を止めている。25は厚みの大きい右側面に集中して剥離が見られるが厚みは減少していない。なお25と同様に剥離底を有する蛇紋岩の礫が7点出土しているが、剥離が礫の一部にしか加えられていないので、これらは磨製石斧として数えていない。26・27は裏面を完全に剥落させてはいるものの背面はなお礫面を広く残している。

#### 打製石斧（29～37）

9点の出土があり、平面形態はそれぞれ異なる。29は側面形が強く湾曲する素材を用いており、基部が著しく厚い。側縁は刃部に向けて強く外反し、潰し様の加工が時に著しい。30は主要剥離面に打瘤が厚く残る。横長剝片を素材とするものには同様の事が観察される。33は30と近似した平面形態を呈する。32は脇部・刃部に簡素な調整を加えて打製石斧としている。分厚い素材の形状は殆んど変えられていない。34は礫を素材とするもので、他とは製作技術的に異なる。両側縁には潰し様の調整がみられる。35は側縁が直線的であり、刃部に向けて緩く開く。



第85図 石器実測図(1)

調整は側縁にのみ施され、刃部・基部には手を加えていない。36も素材は横長剣片であるが、裏面の調整剝離が中央にまで及んでおり、調整が簡素な本遺跡の打製石斧にあってやや異質である。37は夥しく厚い素材が用いられている。刃部から打撃を加えて得た縦長剣片を素材としており、主要剝離面は、礫の節理に重複し、直線的な面を示す。刃部は主要剝離面側のみから作出され、角度が大きい。また背面は長軸方向にカーブがなく、原石のかなり大きなものであったことが推量される。

#### 磨石類（38～52）

礫の側面に磨耗した面を有するものを一括した。15点の出土があり、本遺跡では磨製石斧についてで多数を占める。形態により三分した。

#### A類（38～48）

いわゆる特殊磨石と称されるものであり、横断面三角形の礫の側面に磨耗した機能面を有する。これらの磨石については、機能面の長軸と直交する方向に運動が繰返されると推測されている（小林 1966）、本遺跡の磨石に明瞭な擦痕は看取されず、運動方向は限定し得ない。また磨耗面は研磨というほど滑らかではなく、叩きつぶしと磨りの運動が併せて行われるのである。いずれも礫の棱部に機能面をとり、僅かな凸面状を呈する。48のみが2つの機能面を有する。横断面台形を示す47のみが砂岩であり、他は安山岩を用いる。

#### B類（49～51）

長楕円形の礫を用いるものである。50は機能面の下端に敲打痕、上端に調査時のキズをとどめる。51は側面に小剝離が連続的に見られるが、磨耗に先だって施されており、これは機能面の作出を目的としたものと思われる。また背面には横長不定形の凹みを有する。

#### C類（52）

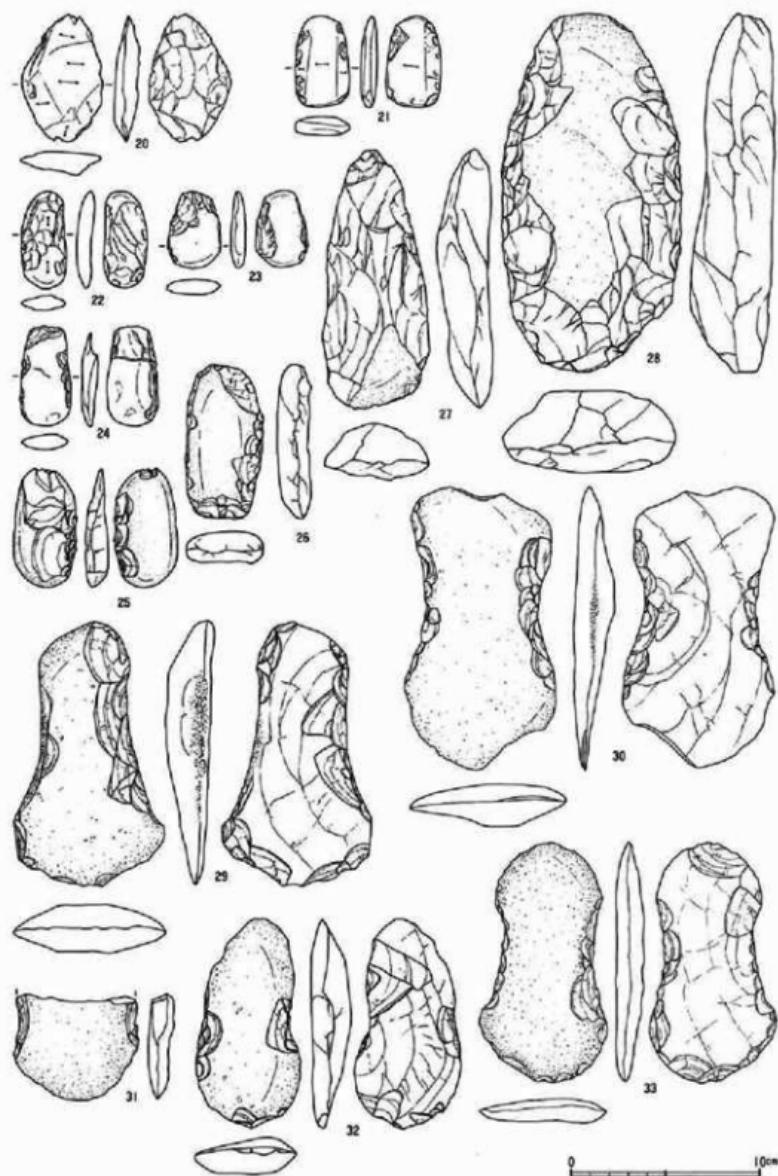
扁平楕円礫を用いており、側面の磨耗面は短い。同様の磨耗面は68の石皿にも見られる。

#### 石錐（53～63）

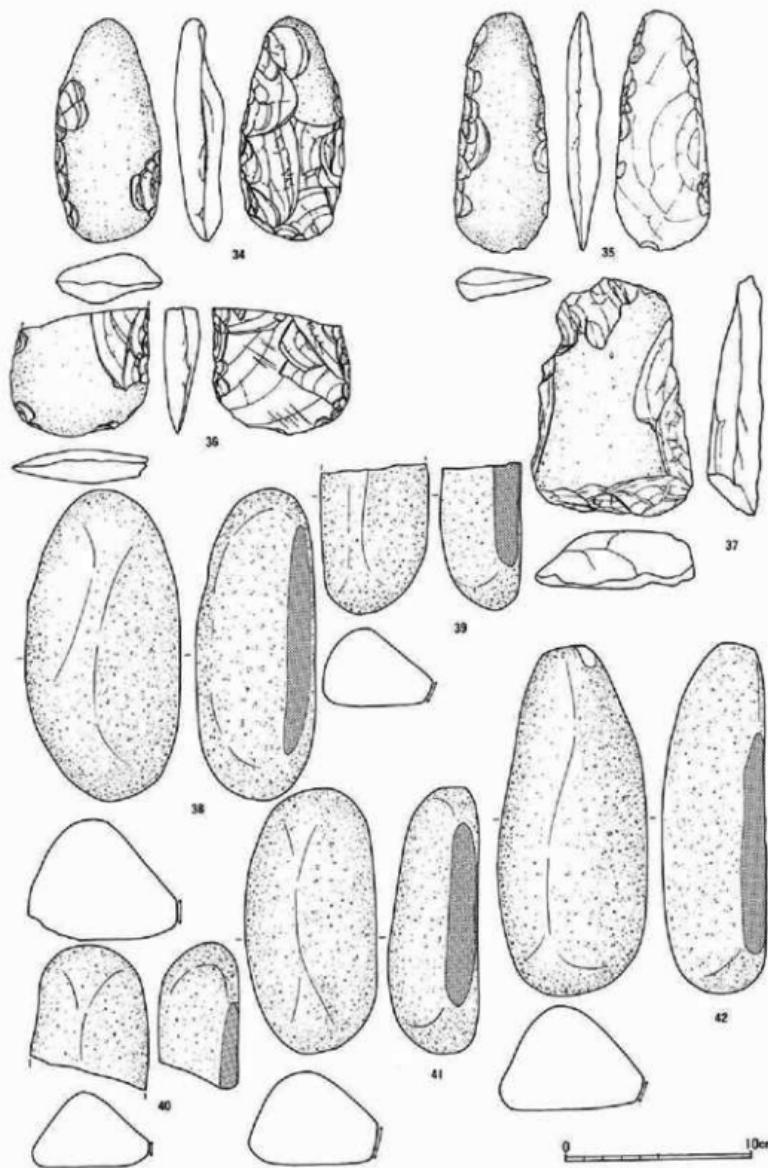
扁平楕円礫の両端を打ち欠く礫石錐16点、溝を環状に巡らす球状のもの1点が出土している。礫石錐は大小二形に分れ、その区別は明瞭である。63の溝は裁切りによって切りだされ幅約5mmを測る。器面は敲打によって整形されている。西類城郡青海町大角地遺跡第7号住居跡（安藤 1979）に類例があり、古墳時代前期の所産と報告されている。また弥生時代の石錐に形態の類似するものがある（紅村 1966）。しかし同住居跡には礫石錐が多量に出土していること、また岩野E遺跡には弥生時代・古墳時代の土器が全く出土していないことを考えあわせ、縄文時代早期・前期の遺物とみなしておく。

#### 凹石（64・65）

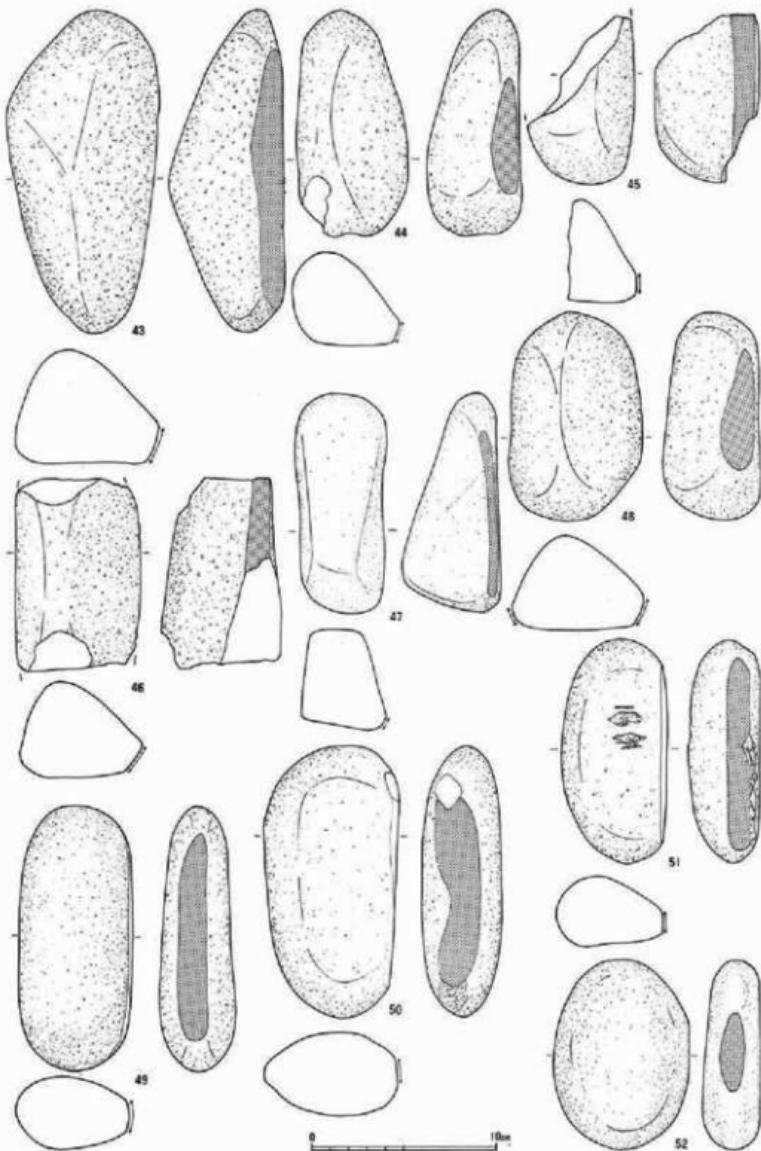
2点が出土している。64は風化が進んでいるが、両面に円形の浅い凹みが看取される。65は敲打痕に似た痕跡が両面と側面の一部にみられる。礫の風化によって礫殻が剥落したものとも思われる。



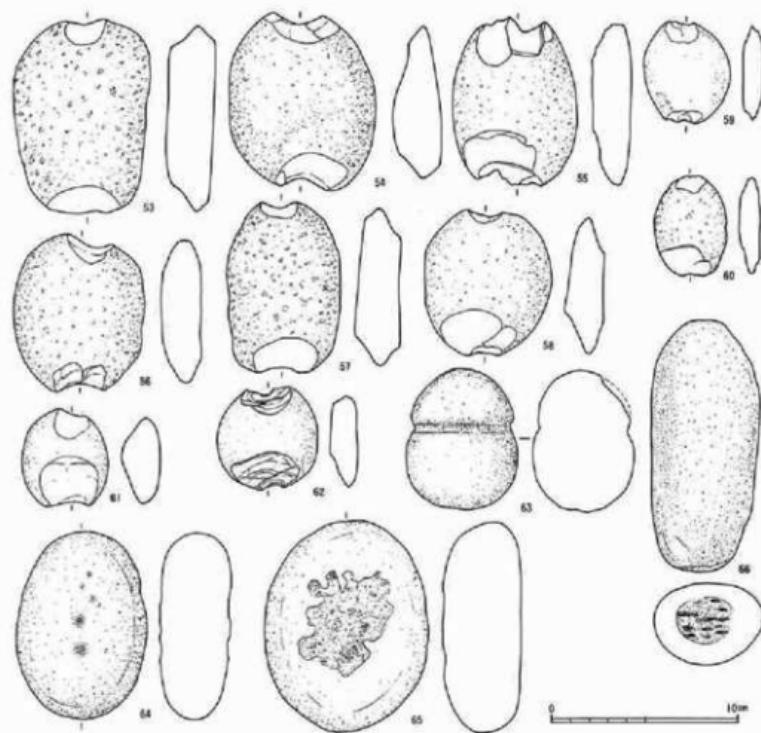
第86図 石器実測図（2）



第87图 石器实测图 (3)



第88図 石器実測図(4)



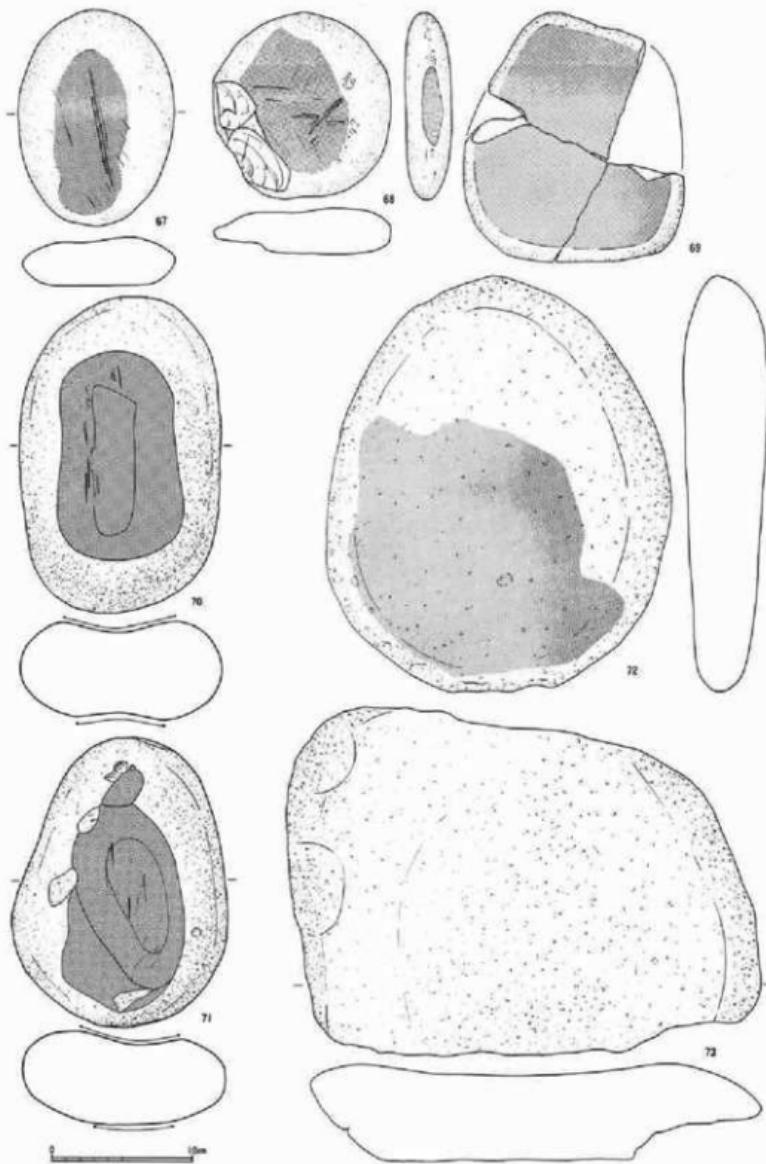
第89図 石器実測図（5）

#### 敲打石（66）

1点が出土している。乳棒状礫の端部を敲打するものである。筋状にみられる痕跡は砂岩の薬理である。

#### 砸石・石皿（67~74）

7点が出土している。67・68は溝痕・線状痕が観察されるものである。中央部はレンズ状に凹み、滑らかに磨られている。69・72は盤状の礫を利用しておらず、69は両面が平滑に磨られている。72も両面が磨られるが裏面は背面ほど滑らかではなく、面積も狭い。裏面の磨耗は背面を使用した時のずれによって生じたものであろうか。69の欠損部は調査区内では出土していない。70は両面に凹み面を有し、共に線状痕が凹み面の長軸に平行して観察される。裏面の凹みは背面に比して浅く面積が小さい。71は背面にのみ凹み面を有する。裏面もよく磨耗しているが、これは72と同様の要因が考えられる。また長軸上の両端が磨耗しており、それぞれ幅1cm、長さ2cm、幅1cm、長さ4cmを計る。73は磨耗面を全く持たない盤状の石皿である。周囲は打削と敲打によって整形される。中央部はゆるやかに凹み、ざらつきが著しい。台石と呼称されよう



第90図 石器実測図 (6)

か。74は軟質の砂岩を打削して用いたもので、背面・右側面がよく磨かれている。裏面は凹凸があり面が荒れているが凸部はよく磨耗している。

#### 块状耳飾 (75・76)

2点の出土がある。75は擦りによる擦痕と絞を明瞭に残している。端部は磨かれているが平坦に整えられていない。上端は折損している。色調は緑色半透明を呈する。76は穿孔する以前の未製品と思われる擦痕がかなり荒い。

#### 石匙 (77)

1点の出土がある。ネガティブな背面と主要剥離面の打瘤が相接って、つまみ部が作り出されている。また打瘤の厚みをそのままつまみ部に利用している。つまみ部を除く周縁に調整が施されており、主要剥離面には使用によって生じたと思われる線状の擦痕が観察される。

#### 二次加工を有する剥片 (78~87)

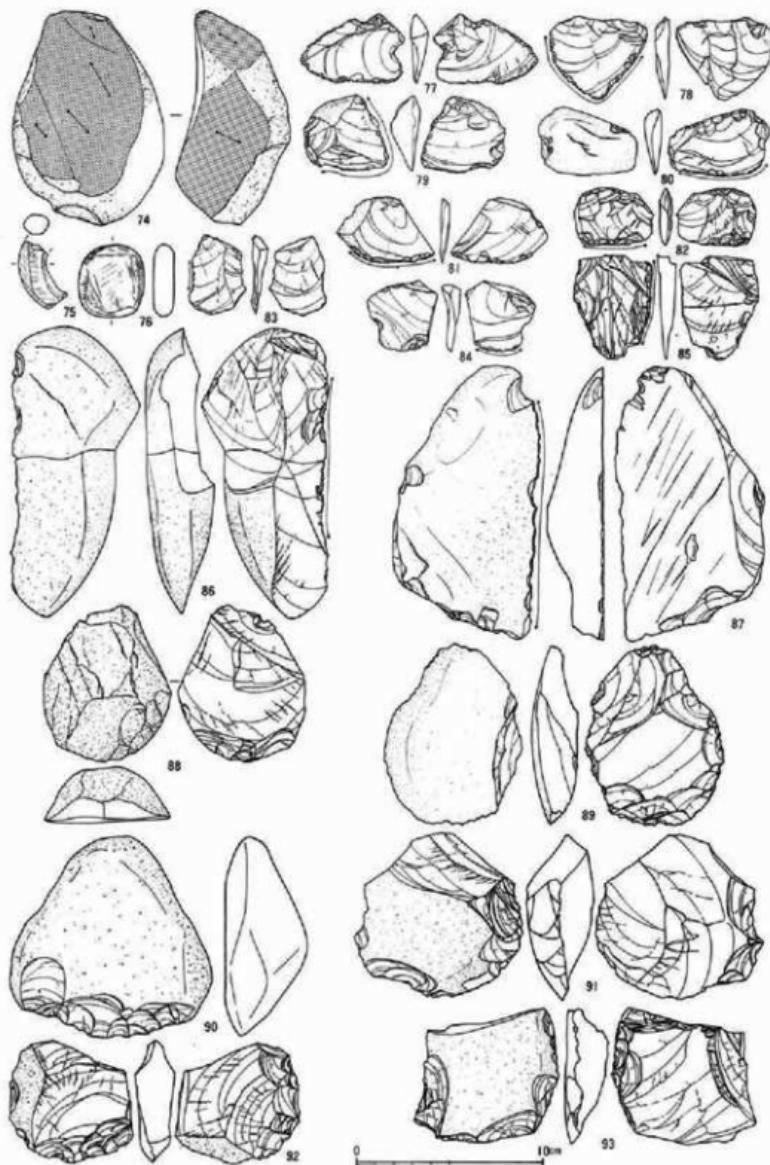
大小あわせて10点の出土がある。いずれも刃こぼれ状の調整が縁辺に見られるものである。これが意図的な調整によるものか、使用によって生じたものか判断し難く、ここでは二次加工を有する剥片として大きくとらえておく。二側縁を調整しているものと一侧縁に限られるものの二者があり、形状はそれぞれ異なる。86・87は鋭角な縁辺に刃こぼれ状の調整がみられる。87は主要剥離面が縦の節理面となっている。

#### 穂器・両面石器 (88~95)

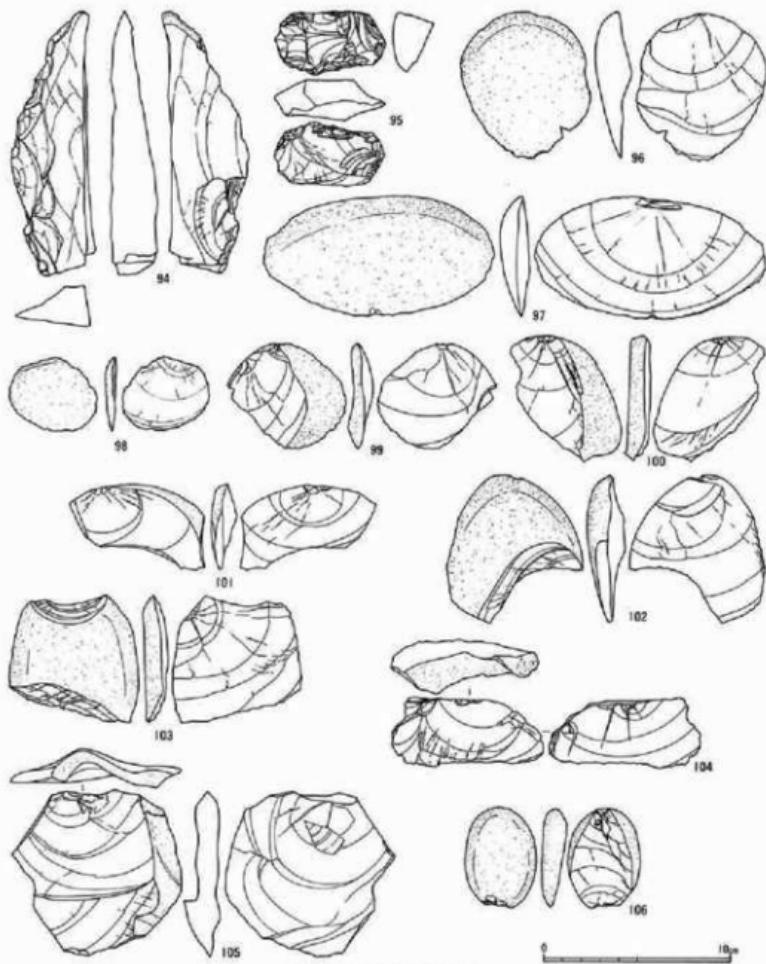
穂器・削器等の機能を有する不定形の石器を一括して扱う。8点を数える。90はつぶれた三角錐状の穂を用い、平坦面側に調整を施して刃部とする。他は穂面をそのまま残している。88・89は背面が穂面でざんぐりとしているものである。88は下縁に簡素な調整剝離を施しており、これが刃部となろう。89は下縁に階段状剝離が重複して施される。92は穂面を残す二縁辺に集中して階段状剝離が施され、二縁辺が交叉する部位では交互剝離となる。93は右縁辺に交互剝離が施される。94はナイフ様の尖った形状を呈し、裏面頂部に僅かな穂面を残す。右側面は節理面で折損している。95はピエス・エスキューであろうか。背面中央には両極打法による剝離面があり、これは両端部の調整より前に施されている。下縁両面にみられる小剝離は両極剝離に伴って生じたものではなく意図的に施されたものであろう。

#### 剥片類 (96~105)

総数279点を数え、石器類の63%を占める。なかでも円穂の外縁面に打面の調整を行わずに打撃を加えて得られた剥片 (96~98) が特徴的にみられる。これは中原遺跡において貝殻状剥片と称したものと同一であり、170点を数える。これら剥片の長幅関係を第93図に示した。説明は中原遺跡と重複するので、ここでは省略する。99~101は背面の一部と打面に穂面を残す剥片である。いずれも打点を若干移動して打撃が加えられる。101は打面を除く三縁辺が折り取られている。99・100は穂面を持った鋭い縁辺の作出を目的に得られたものであろうか。102・103は打点を大きく変えて剥片が得られている。104は翼状剥片様の剥片である。打面を調整せず穂面と



第91圖 石器実測図(7)

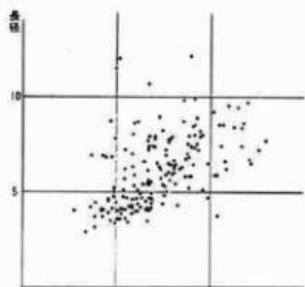


第92図 石器実測図（8）

し、背面側の打点と近接した位置に主要剥離面の打点が設けられている。前述の剥片と異なり、原石は不定形の礫である。105も同様な技術によって得られた剥片である。106は小円礫に両極から打撃を加えたものである。礫素材のビエス・エスキーユであろうか。

### 自然礫・その他 (図版47)

礫にはいわゆる川原石・段丘礫層中の風化した礫の二者があり、前者が49点、後者13点の出土がある。川原石には拳大程の砂岩・安山岩等の礫と扁平長辺円の蛇紋岩礫・流紋岩礫があり、後者は磨製石斧の素材と考えられよう。他に径2cmのチャート礫、径3cmの玉鶴の出土がある。なお黒耀石の出土は皆無である。



第93図 剥片法量分布図 (折損しているものも長径・軸径をそのまま示した)

石器一覧表

番号	石 質	重量(g)	出土区(遺構)	番号	石 質	重量(g)	出土区(遺構)
1	流 紋 岩	184	D-E-9-10	42	安 山 岩	1,190	L-M-11-12
2	"	128	J11	43	"	1,030	F11
3	"	43	H10	44	"	480	J-K-7-8
4	硬質砂岩	220	G6-H7	45	"	220	D9
5	蛇 紋 岩	84	I8	46	"	610	I8
6	"	310	J8	47	砂 岩	405	G8
7	"	136	L11	48	安 山 岩	610	J-K-7-8
8	流 紋 岩	147	H10	49	角閃石安山岩	550	D9
9	"	68	H9	50	砂 岩	625	H-I-9-10
10	"	47	H9	51	"	340	H-I-9-10
11	"	41	Bトレンチ	52	"	345	G11
12	"	35	I10	53	安 山 岩	350	Cトレンチ
13	"	37	L M-11-12	54	砂 岩	275	J7
14	蛇 紋 岩	32	F11	55	砂 岩	177	J11
15	流 紋 岩	21	Cトレンチ	56	安 山 岩	193	H11
16	"	22	K9	57	"	185	J-K-9-10
17	"	16	I12	58	"	149	J11
18	蛇 紋 岩	24	H14	59	砂 岩	39	H10
19	砂 岩	97	S K-21	60	安 山 岩	31	G11
20	蛇 紋 岩	43	B-C-5-6	61	砂 岩	56	G10
21	"	22	I10	62	"	55	S K10
22	"	16	I10	63	"	290	D10
23	流 紋 岩	13	L12	64	安 山 岩	340	J8
24	"	17	I10	65	砂 岩	650	I9
25	"	42	I10	66	"	450	H-I-10-11
26	蛇 紋 岩	26	K9	67	"	810	H11
27	"	280	F12	68	"	770	J9
28	"	1,140	Bトレンチ	69	安 山 岩	1,930	G11
29	石英粗面岩	260	I12	70	砂 岩	3,420	K9
30	砂 岩	225	J11	71	"	2,480	G9
31	"	57	H-I-9-10	72	安 山 岩	5,200	F11
32	石英粗面岩	128	J11	73	"	7,400	G9
33	安 山 岩	142	Bトレンチ	74	砂 岩	520	J-K-11-12
34	砂 岩	200	K9	75	砂 岩	10	B5
35	安 山 岩	122	F10	76	滑 石	28	L11
36	硬質砂岩	107	H12	77	硅質頁岩	14	K9
37	砂 岩	360	H9	78	凝灰岩質頁岩	15	I8
38	安 山 岩	1,190	J8	79	砂 岩	22	L8
39	"	300	H-I-9-10	80	チャート	20	I7
40	"	240	H-I-9-10	81	凝灰岩質頁岩	18	S K19
41	角閃石安山岩	655	I8	82	石英粗面岩	10	S K11

図番号	石質	重量(g)	出土区(遺構)	図番号	石質	重量(g)	出土区(遺構)
83	チャート	8	I 10	96	砂岩	74	Aトレンチ
84	凝灰岩質頁岩	10	H・I-9・10	97	石英粗面岩	118	F 5
85	培岩質安山岩	22	H 9	98	砂岩	9	G 13
86	硬質砂岩	330	F・G-10・11	99	"	32	D・E-9・10
87	"	350	F・G-7・8	100	"	40	J 13
88	"	199	H 8	101	硬質砂岩	32	I 11
89	"	188	C 5	102	"	79	D 7
90	安山岩	530	K 7	103	砂岩	75	F 13
91	硬質砂岩	250	B・C-5・6	104	凝灰岩質頁岩	40	I 11
92	"	92	E 10	105	硬質砂岩	144	J・K-7・8
93	"	130	Cトレンチ	106	砂岩	32	G 11
94	砂質	133	F・G-7・8				
95	硬質砂岩	40	I 7				

## 6.まとめ

### a. 遺構について

岩野E遺跡で検出された遺構については、SK13が縄文時代早期末～前期前半の所謂集石土坑であったわけであるが、他の土坑の性格について考えてみたい。まず時期的な問題であるが出土遺物は全くなく、明確な時期を把握することはできないが、縄文時代の遺物包含層を切っており、少くとも縄文時代中期以降のものであることは間違いない。次に丘陵における位置であるが、丘陵中心部ではなく、周辺の縁辺部に存在していることが特徴と言える。

形態的には、尾根中央部から東側では隅丸方形に近いものが多く、あまり細長いものはない。逆に西側では隅丸長方形のものが多い。次にその軸方向であるが、丘陵地形に対して、その法則性を見い出すことはできず、個々がばらばらであると言えるが、切り合っているものがないことから考えると、これらの遺構全体がほぼ同時期(註)の所産であった可能性が高い。次に土坑内覆土についてである。全体的に言えることは、覆土はやわらかく、しまりのないものであることである。したがって掘り方も明確で、一見して新しい遺構という印象を受ける。覆土は、ローム質粒子又はブロックを含んでいる土がほとんどの土坑で認められる。その入り方は、サンドイッチ状にはさまるもの(SK7・SK11)、下部に来るもの(SK18・SK19)、サンドイッチ状にはさむもの(SK16・SK23)等まちまちである。これらローム質粒子やブロックは当遺跡における所謂地山土である。したがってこの覆土は各々の土坑の掘られた土であり、言い換えれば、埋め戻されたものと言うことができる。SK11のような埋まり具合は、両側から埋め戻された状況を示すものであろう。このように一担掘った土を埋め戻していることから考えて、可能性のあるものとして墳墓がある。しかし全く出土遺物がなく、土葬であったとしても木棺等の痕跡を断面観察において確認することはできない。

したがってここでは、可能性の問題に止めざるを得ないが、すぐ眼下の岩野下遺跡が奈良、平安時代の、また岩野A遺跡が平安時代の遺跡であることから、これらの遺跡に関連する墳墓であると考えられないわけではない。いずれにせよ、古代・中世の墳墓のあまり明確でない県内において、今後類例の増加を待って再検討する必要があろう。

註・同時期に構築されたということではなく、存続的に各々が機能していたことを示す。

## b. 石器について

岩野E遺跡では440点にのぼる石器類が出土し、これらはほぼ縄文時代早期・前期に比定されるものであり、特に剝片の多量の出土が注目される。円礫の外殻面に一度の打撃を加えて得られた貝殻状の剝片が170点出土しており、石器類の中で大きな比率を占めている。これに類する剝片は「打製石斧素材剝片」(広瀬ほか 1982)あるいは「石斧の一部や加工痕のある剝片などが、この種の剝片から作られている」(鈴木 1980)などと説明され、こうした剝片の獲得を「扁平円礫打削法」と称して技術的にとらえる方向も示されている(武藤 1978)。本報告では多目的な素材剝片であると前述した。剝片の法量の分布は幅8cm、長さ7cm程度に中心があるものの、かなり小形のものまでを含めており、打製石斧のみを対象とする素材剝片でないことは明らかである。出土した石器類の約40%をも占める剝片がすべて石器製作を目的としているものであるかは明らかではない。しかしながら、これだけの剝片が石器製作を目的として蓄積されたと考えるのは不自然な事と思われる。小形の剝片も多数見られることからすれば、むしろある種の石器として、そのまま鋭利な縁刃を使用した可能性が高いと考えている。貝殻状の剝片は、それ自体が石器として機能する事と打製石斧などの素材剝片であるという二面性を有するものと推察される。これらすべてを積極的に石器としてとらえた場合、石器全体の中で占める割合が殊に大きくなり、岩野E遺跡には貝殻状剝片の石器を主とした生産のあり方が想定されなければならないであろう。貝殻状の剝片は中原遺跡においても162点の出土があり、岩野E遺跡との強い関連性がうかがわれる。扁平な円礫から剝片を得る場合、貝殻状となって生ずるのは自然の事であるが、注目されるのは遺跡で多量に保有あるいは使用しているという行為である。簡易に得られる剝片であるがために多量に獲得されたものであろうか。縁刃の微視的観察、出土状況等の分析から、貝殻状剝片の性格を明らかにしたいと考えるものである。

磨製石斧は未製品も含めて28点の出土があり、これらから製作工程をおおよそかがい知ることができる。素材は完成品よりも一回り大きな扁平円礫あるいは剝片を用いる。ほとんどのものは素材とする礫の周囲に調整剝離を施し、おおまかに形状を整えたのち研磨され、よく整った礫は直接に研磨される。岩野E遺跡においては未製品が多く見られるものの磨製石斧に用いられる流紋岩、蛇紋岩等の剝片・碎片は全く出土しておらず、調整剝離の工程は素材を得る場(原石を採取できる付近の海岸・河川)で行われているものと思われる。調整剝離の工程における折損品がないのもこのためであろう。遺跡に持ちこまれる剝離痕を有する礫・扁平な円礫は概ね目的とする磨製石斧の形状に近いものであり、このようなものが遺跡において研磨されたと想定される。調整剝離は素材の厚みを減じ、側面・基部等を作出し、研磨にかかる労力の軽減を目的に行われる。流紋岩などは整った薄い剝片を生じにくい岩石の性質があり、よほど精緻な調整剝離と研磨が施されない限り、剝離痕は除去できないものである。しかし岩野E遺跡の磨製石斧が剝離痕を残したまま使用されたことは刃部に使用痕が観察されることから明らかである。縄文時代中期以降の磨製石斧は剝離痕を止めて器面の一部に限られるのが通

有であり、時には剥離痕を磨り消したために器面が凹むものも見られる。

中形・小形の磨製石斧には片刃に近い縦断面形をとるもののが見られ、大形のものが悉く両刃を呈することと対象的である。これらは礫面を残した剥片を素材として必然的に湾曲し、片刃に近い刃形をとるものと考えられる。ただ湾曲した剥片がしいて用いられる事は大形の磨製石斧と機能的な差異を想定させる。これらはむしろ湾曲を利用して横斧（佐原 1977）として使用されたものと考えられる。換言すれば剥片を素材とすることは片刃の磨製石斧を作成する技術としてとらえられよう。糸魚川・西頭城産と見られる石材を利用した石器が遠隔地の遺跡で出土する例があり、これらが原石あるいは製品として糸魚川・西頭城地方から供給されたことは一般的な認識となっている。姫川以西は古世代・中世代の変成岩などが分布する地域であり、石材・石器の供給の問題については広範囲にわたる詳細な石質の産地同定が進められることを期待したい。

岩野E遺跡では早期中葉から中期前葉にかけての縄文土器が出土しており、石器群を一括して石器の組成として理解することはできないが、器種それぞれの数量比から遺跡の特質をいくつか見いだすことができる。石鏃の出土がないこと、小形の剥片石器は1点の石匙と二次加工を有する剥片がみられるだけである。磨製石斧の占める比率が高く、それに比べて打製石斧が少ないと。磨石類・礫石鏃が卓越しており、磨石類はいわゆる特殊磨石が多いこと。特殊磨石は押型文土器に伴う特徴的な石器であるが、北陸地方では少なくとも前期前葉にまで存在すると考えられる。ちなみに隣接する岩野A遺跡の昭和56年の調査では石鏃が石器類の中でもっとも多く出土している。（土田 1986）こうした石器の組成は「北陸西部の前期前葉の遺跡に一般的なものである」という指摘があり（前山 1984）、また一方で石鏃出現率の差異を内陸部と海岸部との生産対象の違いとしてとらえる見解がある。（安藤ほか 1979）いずれにせよ、本遺跡も該期における海岸部の遺跡の一般的な傾向に沿うものと理解される。ただ、前述した貝殻状剥片の多量な出土が特質として認識されるものである。

岩野E遺跡の縄文時代の遺構は集石土坑が1基検出されたのみであるが、それに比して石器類の豊富さが注目される。このことは遺跡が発掘区域の小台地に範囲を限定される小規模なものではなく、巨視的にはやや広い段丘面に位置する岩野A遺跡の周縁として考えられることを示していると思われる。

#### C. 土器について

出土した土器については、第V章-5で第VII類まで分類し説明を加えたが、これらの土器についてその系統編年について考えてみたい。

第I類の押型文土器は2点のみで時期的なことを言うことはできない。

第III類は、直線的な沈線により文様を構成しているもので、沈線間に貝殻腹縁文を併用している。これらの特徴は田戸上層式に共通点を見い出すことができるが、田戸上層式に見られる曲線的な文様は見られない。また東北地方で常世式と言われ、田戸上層式直後に編年されてい

る一群ともかなり違ひがみられ、常世式の特徴と言われている刺突文、平行沈線文は全く見られない。12番の土器については、類例が佐渡の岩屋山洞窟(小林ほか 1986)に見られ、報告では常世式に類するものとして紹介されている。このような文様構成をとるものは、他にあまり類例がなく、当該期における地域差として把握するのが現在のところ一番妥当と考えられ、今後の類例の増加を待ちたい。

第II類-aとしたものも共通的な文様構成をとっている。大きな違いは地文に条痕文を使用していることにある。土器がやや厚手であり、沈線も第III類に比べると太い。地文に条痕文の使用が始まっていることから考えると第III類より後出的な土器かも知れない。大きくみると、この第II類-aと第III類は、ほぼ同時期の所産と考えられ、第I類の押型文もこれに伴うものと考えられる。第II類-bは、同じく地文に条痕文を使用しているが、沈線文は全く使用されておらず、胎土内に植物纖維が目立つ。所謂条痕系の土器である。類例は、富山県極楽寺遺跡(小島 1970)第10類にある。当類はこの14番の1個体のみで、波状口縁となるものである。極楽寺遺跡や吉田野寺遺跡(四柳 1983)に見られるような貝殻腹縁が弧をなすものは出土していない。第IV類は、所謂東海地方の入海式と呼ばれているものである。器形は、波状文となるもので、東海地方での類例は少ないものと思われるが、石川県の柴山洞底遺跡(小村 1973)では波状のものがあり共通性が見られる。文様では、隆帯上に刻みを付しており、入海II式と呼ばれているものであるが、次の石山式の特徴とされ、隆帯を付けずに爪形に近い刻みを施す手法を併用しているものもあり、過渡的なものと言うことができる。この東海系の土器は、県内では初例であり、北陸地方では、柴山洞底遺跡の他、極楽寺遺跡においても、その出土が知られている。また、甲・小寺遺跡(四柳 1972)においても類似のものが出土しているが、地文に羽状繩文が施されていることから、四柳氏は、極楽寺式土器に併行するものであるとし、柴山洞底遺跡出土のものも同時期とした。当遺跡とは、その在り方が多少異っており、特に甲・小寺遺跡で出土している一点は、纖維を含んでおり、纖維を含まない当遺跡とは明らかな違いがある。第II類-cは、第II類-bの条痕とはかなり異り、整然とした条線をなしている。このような条痕は所謂早期末に見られるものとは異質で、おそらく時期的に降りるものではないかと考えられる。やはり類例はあまりないが、口唇部の八の字状の刻みを付すことや器形は、石川県の吉田野寺遺跡の第II類に類似のものが見られる。第V類は、所謂表裏繩文の土器で、北陸地方を中心にかなり広く分布が見られる。東北地方一帯から日本海側は近畿地方に致るまでその分布は広く、前期初頭に位置付けられるものである。極楽寺遺跡では、表裏繩文、表繩文、裏条痕、内外面条痕と3通りの組合せが見られ、同時期の所産と考えられている。これら前期初頭にみられる表裏繩文は、早期末の表裏条痕の影響で発生したものと思われ、第II類-cの条痕と伴うと考えられる。また、第VI類の八の字状沈線をもつものは、最近東北地方で注目されはじめており、花積下層式の直前に位置付けられているが、県内ではあまり出土は知られていない。しかしそよそ、前期初頭と考えてよいであろう。第VII類は、時期決定するには資料が断片的で細分は不可能であるが、およそ前期

前半に位置するものである。上げ底風の底部は、柴山洞底遺跡でも見られ、また県内においても布目遺跡等で共通するものがある。第Ⅷは、すでに胎土内に植物纖維の混入はなく、色調、胎土からすると、およそ諸磯a式期に併行するものと考えられる。

以上第I～Ⅶ類までの編年の位置付けを行ったが、これをまとめると大きく5段階に分類することができる。第I段階は、沈線文・貝殻腹縁文を併用するもので、早期中葉の田戸上層式や常世式に併行する時期で、押型文土器もこれに併うと考えられる。第II段階は、条痕文系土器の第II類-aで、これに東海入海系土器が加わる。第III段階からが前期となる。縄文が多用されるようになる。遺物の出土状況から見ても、これら前期の土器と早期の土器は、明確に分れて(平面分布)出土している。また第II類-aもこの段階と思われる。しかし、東日本で前期のヌルクマールである花積下層式土器や県内の布目遺跡、新谷遺跡(前山 1984)出土土器等に類似するものが全く出土していないため、この第III段階があるいは早期までさかのばる可能性もある。第IV段階は、関東の関山式や黒浜式併行期と考えられる。第V段階は、前述のように諸磯a式期である。このように土器系統から分類していくと5段階という時期区分が可能となるが、石器の在り方から考えると、実体的には、5段階までは分れないのかもしれない。

#### d. 結語

岩野E遺跡は、県内で資料の非常に少なかった縄文時代早期～前期の貴重な資料を提供してくれたと言える。遺構としては、集石土坑一基のみで他は確認されていないが、立地的にみてそれほど集落を営むような広さではなく定住的な場所ではない。県内において当該期の遺構の確認されている遺跡は、長岡市七軒町遺跡(駒形ほか 1978)、新発田市小戸A遺跡(田中 1983)くらいで、他ではあまり明確なものはない。まだ調査例が少ないためと思われ、今後増加するものと予想される。丘陵全体を調査したわけではないが、土器を各々分類した5段階に分けると、各期の土器量は非常に少なく、数個体にすぎない。それに比べると石器は比較的豊富であると言え、特に磨製石斧と貝殻状剝片は特徴的であると言える。また、遺構も土坑一基のみであることから考えると一般的な居住区域ではなかったと思われる。つまり、石器のまとめでもふれているように、巨視的にみた遺跡(群)の中で、住居を伴った空間とは別の機能をもった所と言うことができるであろう。当該期の集落の調査がほとんどなされていない現状では、多くを語ることはできないが、一つの遺跡の在り方として特徴付けることはできる。今後に残された当該期の問題は多いが、土器については、まだ資料不足で、資料の増加を待って編年及び地域性を解明していくかなくてはならない。特に布目式土器については、問題となってくると考えられる。また編年的には、早期後半～前期前半にかけて、関東編年に合わせた形での細分が可能かどうか問題の残るところであり、多分に停滯的であったような気がするが、今後に委ねたい。

## 引用・参考文献

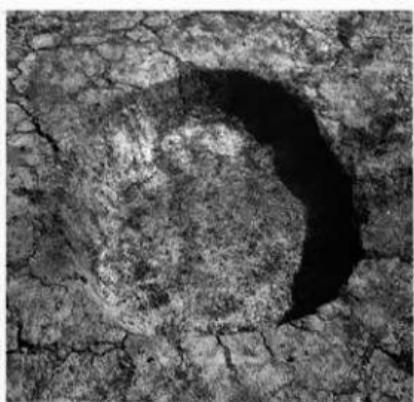
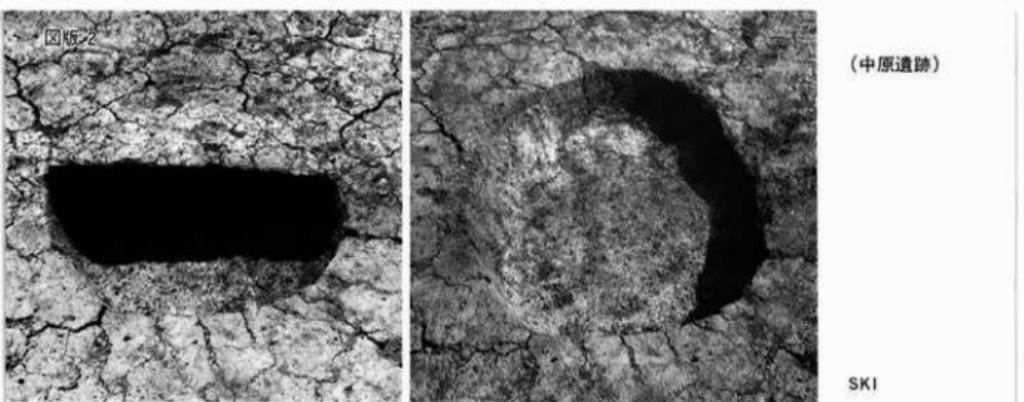
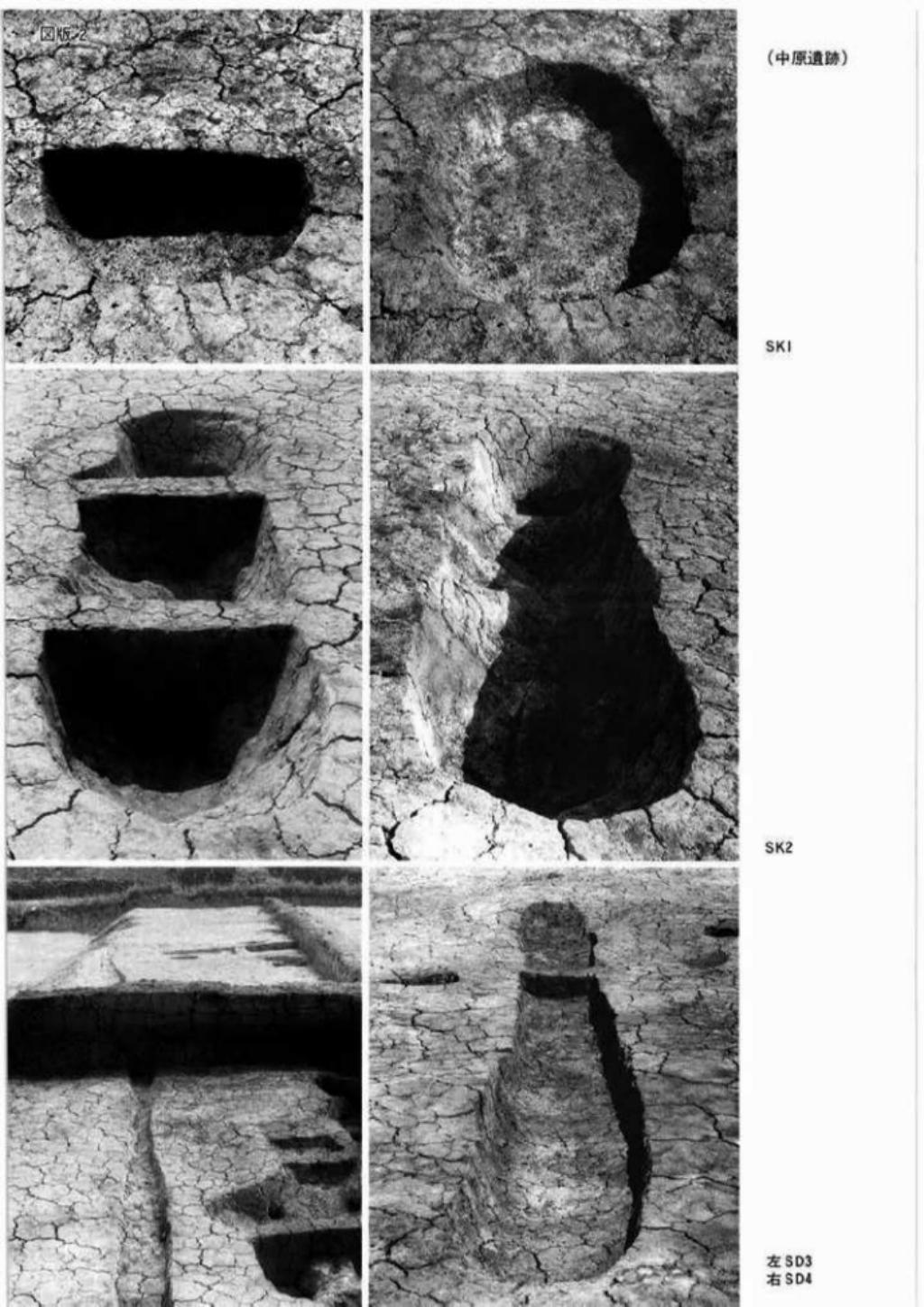
- 赤城源三郎 1984 「私の東洋学—両属の議論は成り立つか」『阿賀路』24集 阿賀路の会  
赤沢計真 1984 「越後の中世板碑」『群馬県史研究』20 群馬県史編さん委員会  
浅香年木 1978 『古代地域史の研究—北陸の古代と中世1—』 法政大学出版局  
浅香年木 1981 『治承寿永の内乱論序説—北陸の古代と中世2—』 法政大学出版局  
綱野善彦 1982 『東と西の語る日本の歴史』 そしんで  
綱野善彦 1984 『東と西』 朝日カルチャーブックス 朝日新聞社  
綱野善彦 1986 『中世再考』 日本エディタースクール出版部  
安藤文一 千家和比古 1979 『大角地遺跡』一鉢玉ヒスイの工房址一 青海町教育委員会  
池辺彌 1975 『和名類聚抄郡里駅名考證』 吉川弘文館  
伊藤喜良 1979 「室町期の国家と東国」『歴史学研究1979年度大会特集号』  
江坂輝弥・石沢寅二 1975 「苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告書」  
—第一地区内(1)— 津南町教育委員会  
神奈川考古同人会 1983 『縄文時代早期末・前期初頭の諸問題発表要旨』  
金子拓男編 1982 『柏崎市史資料集』考古篇2 柏崎市  
樺山浩一編 1984 『対話東北論』 福武書店  
紅村弘 1966 『狩獵具』『日本の考古学III』 河出書房  
小島俊彰 1965 『極楽寺遺跡』 富山県教育委員会  
小林達雄 石沢寅二 1984 「原始・古代・中世編(第一章・第二章)」『津南町史 資料編上巻』  
津南町  
小林達雄 1966 「多摩ニュータウンNo52遺跡の発掘調査」『多摩ニュータウン遺跡調査報告II』  
多摩ニュータウン遺跡調査会  
駒形敏朗・寺崎裕助 1978 「七軒町遺跡」 七軒町遺跡等発掘調査会  
駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1984 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(1)」  
『長岡市立科学博物館研究報告』No.19 長岡市立科学博物館  
駒形敏朗・石原正敏・小熊博史 1985 「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(2)」  
『長岡市立科学博物館研究報告』No.20 長岡市立科学博物館  
小村茂 1973 「柴山陶器縄文貝塚の調査」『小松市立博物館研究紀要』第8集 小松市立博物館  
坂井秀弥 1984 「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I』 新潟県教育委員会  
坂井秀弥 1986 「平安時代中期の土器」『上越市春日・木田地区発掘調査報告書II 一之口遺跡西地区』 新潟県教育委員会  
坂本賞三 1985 『莊園制成立と王朝國家』 塙書房  
笠置浩 1975 「男女倉遺跡C地點」『男女倉』 長野県と田村教育委員会  
佐原真 1977 「石斧論—横斧から縱斧へ—」『考古論集—慶祝松崎寿と先生六十三歳記念論文集』  
三条商業高校社会科クラブ考古班 1980 「五十嵐川流域における先史遺跡」Vol.2 新潟県立三条商業高校  
清水正健編 1933 『莊園志料』 角川書店  
鈴木郁夫 1983 地形分類図「糸魚川」 新潟県  
鈴木保彦 1980 『一色遺跡』 神奈川県教育委員会  
高橋桂 1977 『三枚原遺跡』 木島平村教育委員会  
高橋桂 1979 『牛札村丸山遺跡発掘調査報告書』 牛札村教育委員会

- 高橋雄三 1981 「子母口式土器研究史における問題点」『福島考古』22 福島県考古学会
- 田中耕作 1983 「小戸A遺跡・小戸館跡発掘調査報告書」 新潟市教育委員会
- 土田孝雄 1986 「岩野A遺跡」『糸魚川市史資料集1—考古編』糸魚川市役所
- 中川成夫・芹沢長介他 1958 「妻有地方の考古学的調査」県文化財年報第3「妻有郷」  
新潟県教育委員会
- 中村孝三郎・小片 保 1964 「室谷洞窟」 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小林進雄・金子拓男 1963 「新潟県中魚沼郡中里村泉竜寺遺跡調査報告」  
『上代文化』第33輯 国学院大学考古学会
- 中村孝三郎 1959 「繩文早期下別当遺跡」『N K H』Vol. 2. No. 1 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1963 「卯ノ木押型文遺跡」 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1965 「先史時代と長岡の遺跡」 長岡市立科学博物館
- 中山英司 1955 「入海貝塚」 愛知県知多郡東浦町文化財保存会
- 新潟第四紀研究グループ 1971 「地形分類図よりみた新潟県の地形区」  
—新潟県の第四系、その XIV—『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』第16号
- 芳賀英一 1975 「常世遺跡の早期繩文式土器に就いて」『遮光器』9号 みちのく考古学研究会
- 芳賀英一 1977 「常世遺跡出土の早期繩文土器をめぐる2・3の問題」『福島考古』18  
福島県考古学会
- 芳賀英一 1981 「常世式土器の再検討(1)」『福島考古』22 福島県考古学会
- 橋本澄夫 1965 「石川県能登島町佐波遺跡の研究」『石川考古学研究会誌』第10号 石川考古学  
研究会
- 林 謙作 1965 「繩文化の発展と地域性 東北」『日本の考古学II』 河出書房
- 広瀬昭弘・砂田佳弘他 1982 「恋ヶ窪遺跡調査報告III」国分寺市教育委員会恋ヶ窪遺跡調査会
- 前山精明 1984 「新谷遺跡発掘調査概要報告書」 卷町教育委員会
- 武藤雄六他 1978 「打製石斧の製作技法」『會利第3・4・5次発掘調査報告書』 富士見町教育  
委員会
- 村井章介 1985 「中世日本列島の地域空間と国家」『思想』732号
- 森浩一編 1983 a 「シンボジウム古代日本海文化」 小学館
- 森浩一編 1983 b 「シンボジウム古代の日本海諸地域」 小学館
- 森浩一編 1984 「シンボジウム東アジアと日本海文化」 小学館
- 八幡一郎 1958 「刈羽貝塚」 新潟県教育委員会
- 山本哲也他 1986 「岩屋山洞窟遺跡」 小木町教育委員会
- 四柳嘉章 1972 「甲・小寺遺跡」 穴水町文化財保護専門委員会
- 四柳嘉章他 1983 「吉田野寺遺跡」 七尾鹿島広域圏事務組合  
1983 「新潟県史」資料編1—原始・古代— 新潟県
- 1981 「糸魚川市の文化財(その4)」糸魚川市教育委員会
- 1984 「新潟県糸魚川市遺跡詳細分布調査報告書」 糸魚川市教育委員会
- 1976 「糸魚川市史I」 糸魚川市役所

真空中空撮

北 南 東 西





左 SD3  
右 SD4



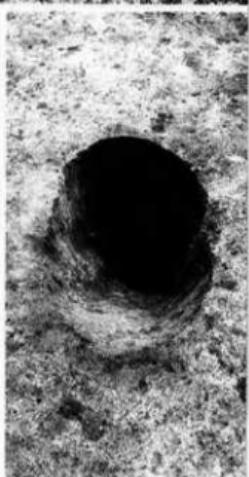
左 SD5  
右 SD6



SK7

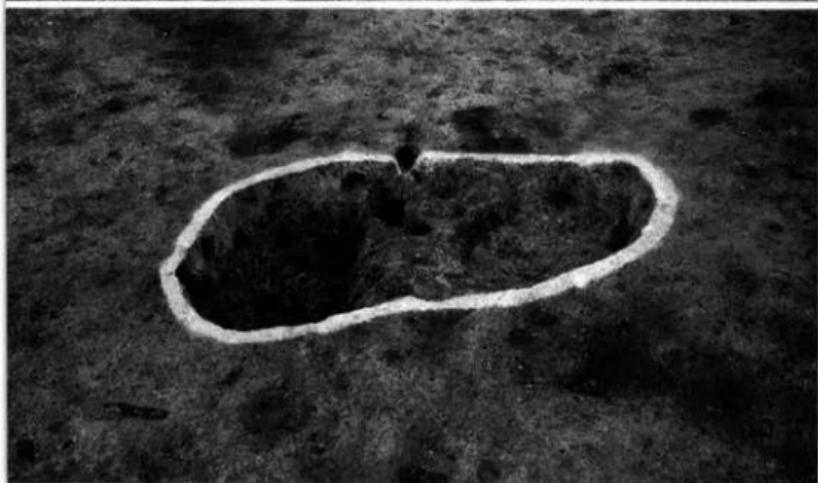


SX9





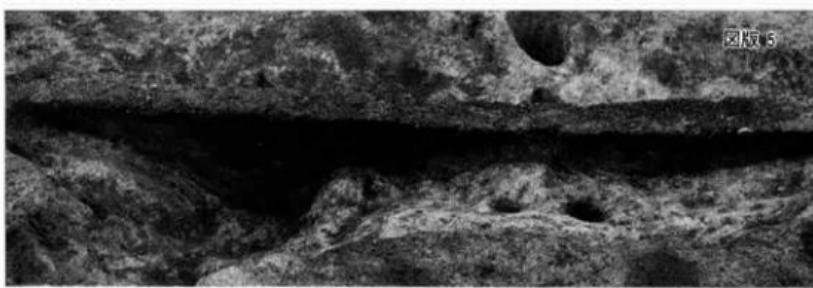
SK12-I3



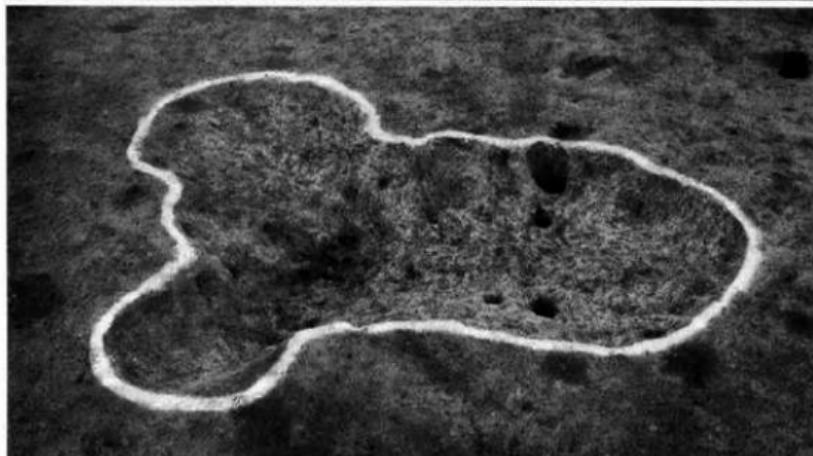
同上



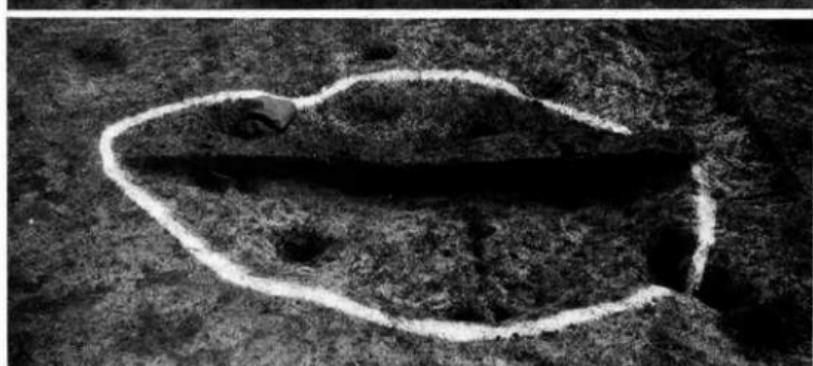
SX14



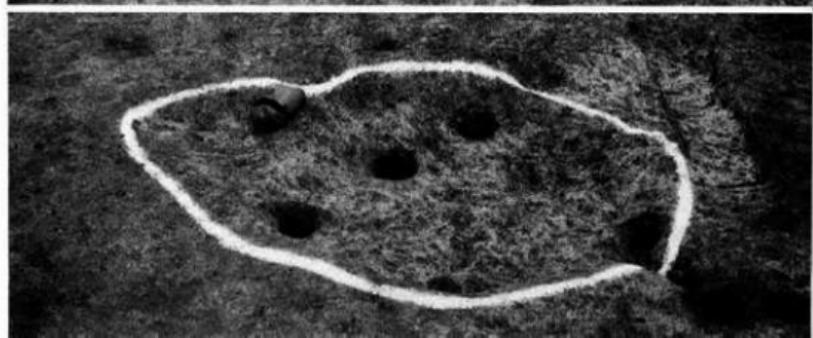
SK15

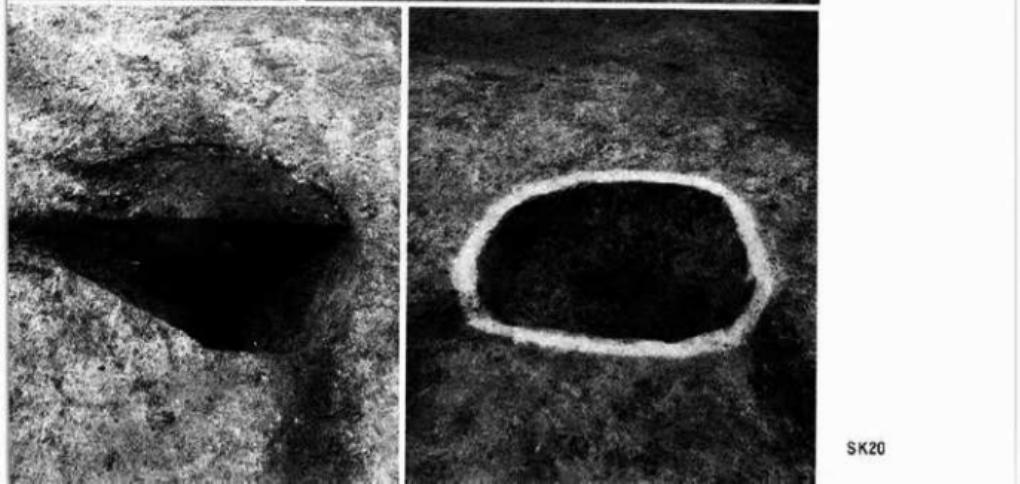
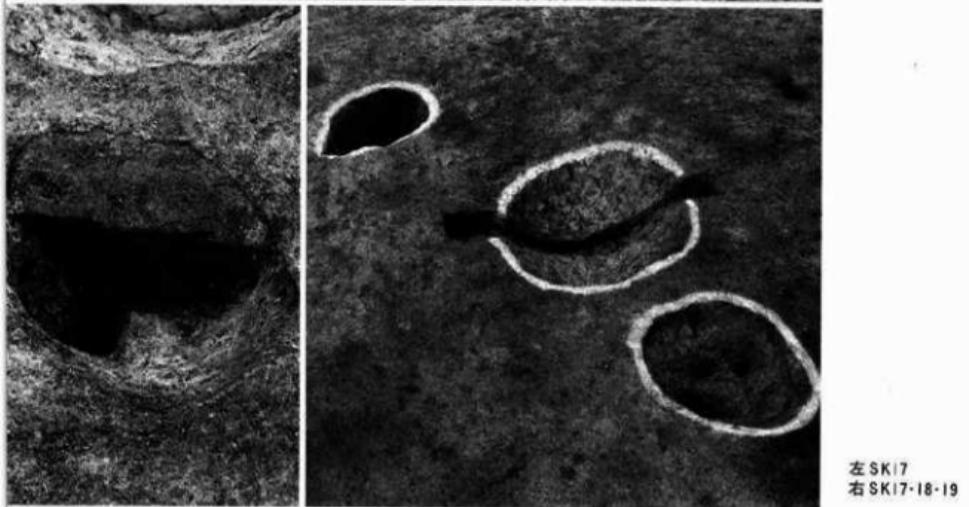
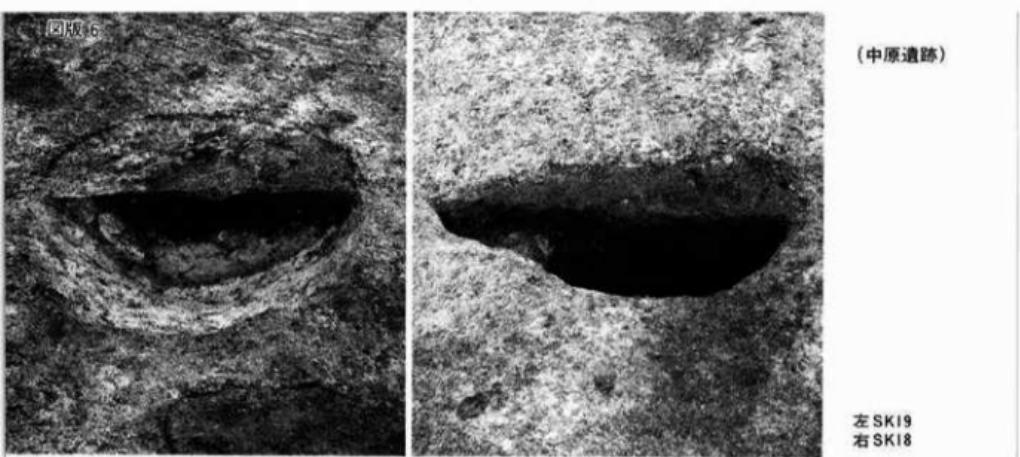


SK16



同上





(中原遺跡)



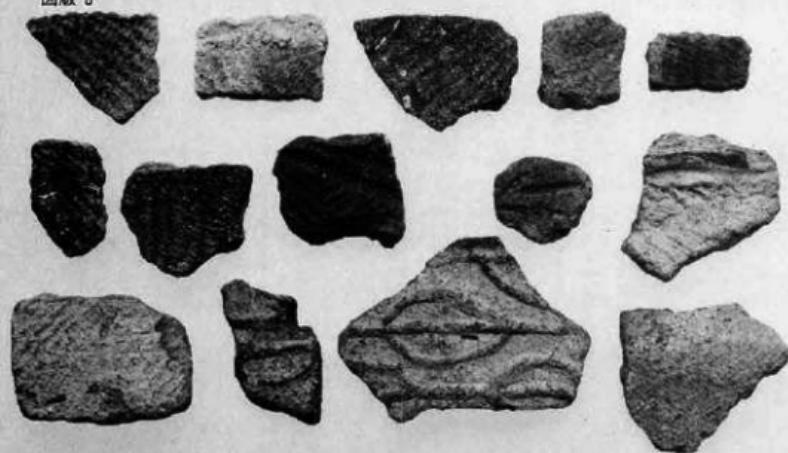
SD10



同上



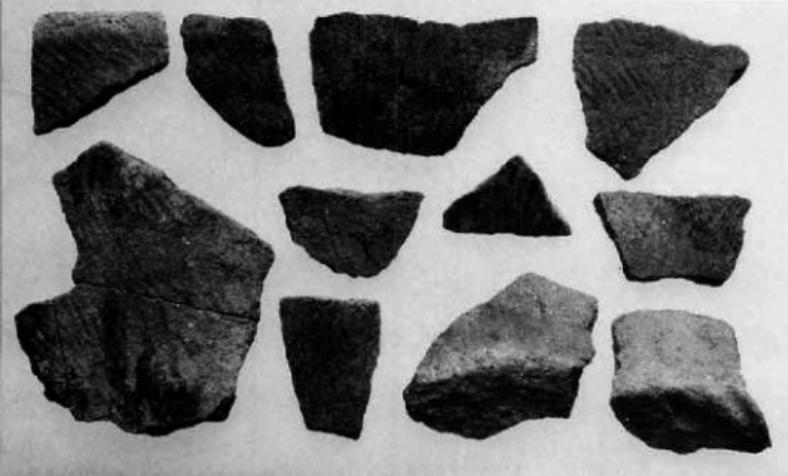
同上



繩文土器

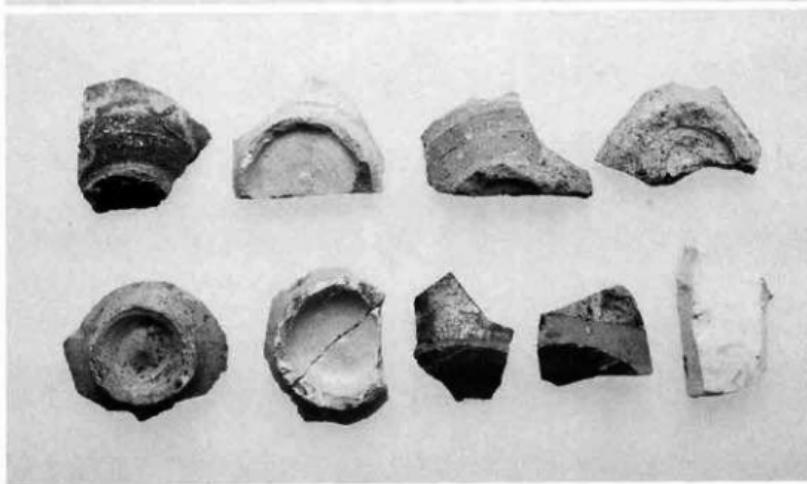


同上裏

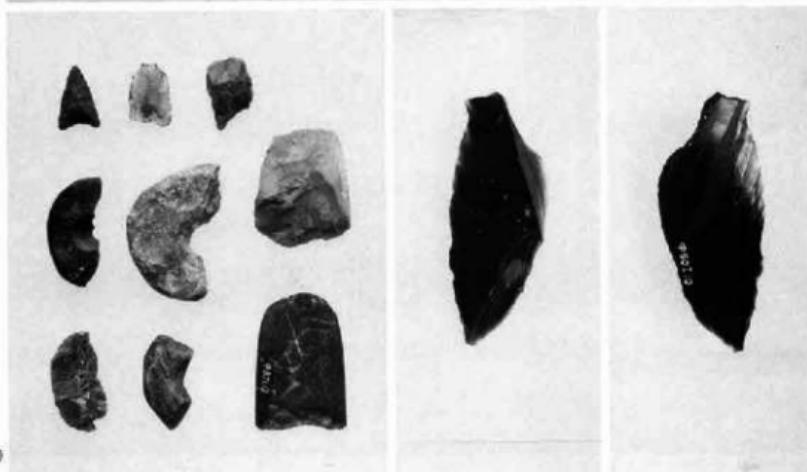


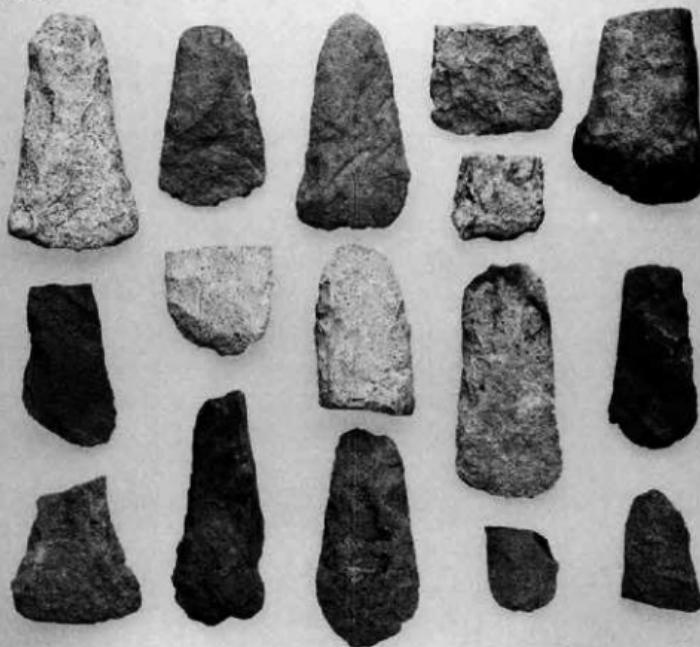
繩文土器

(中原遺跡)

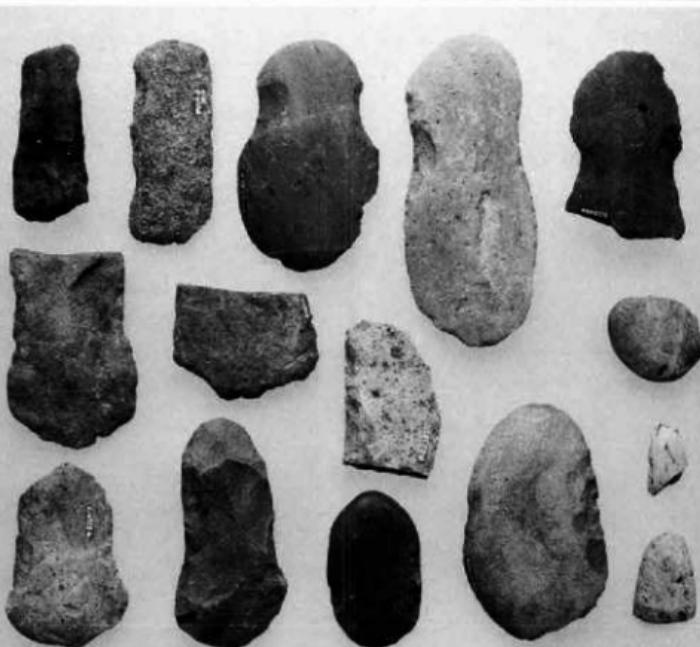
縄文土器  
近世陶器

近世陶磁器

石器  
(刃状・块状耳鉢・ナイフ形)

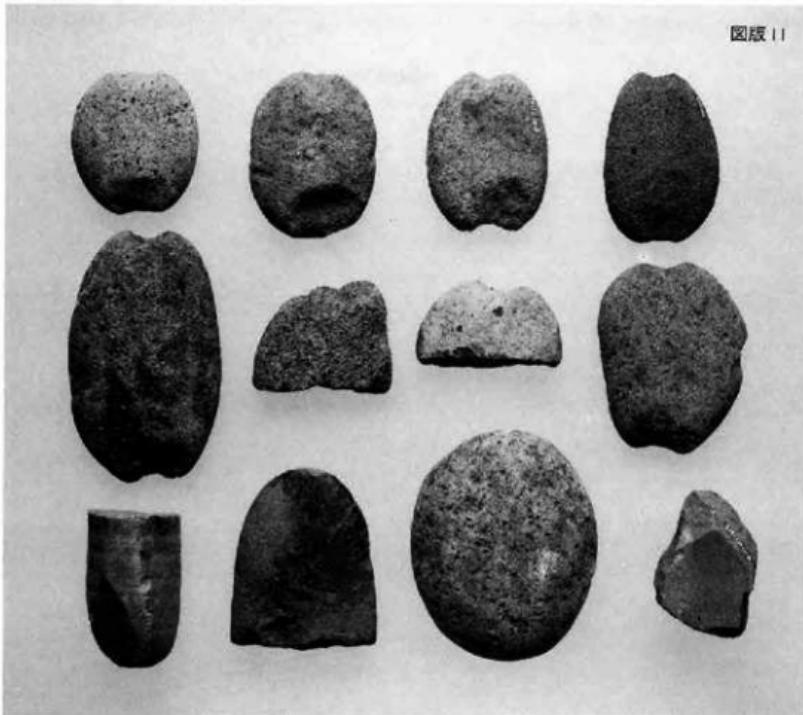


石器  
(打製石斧)

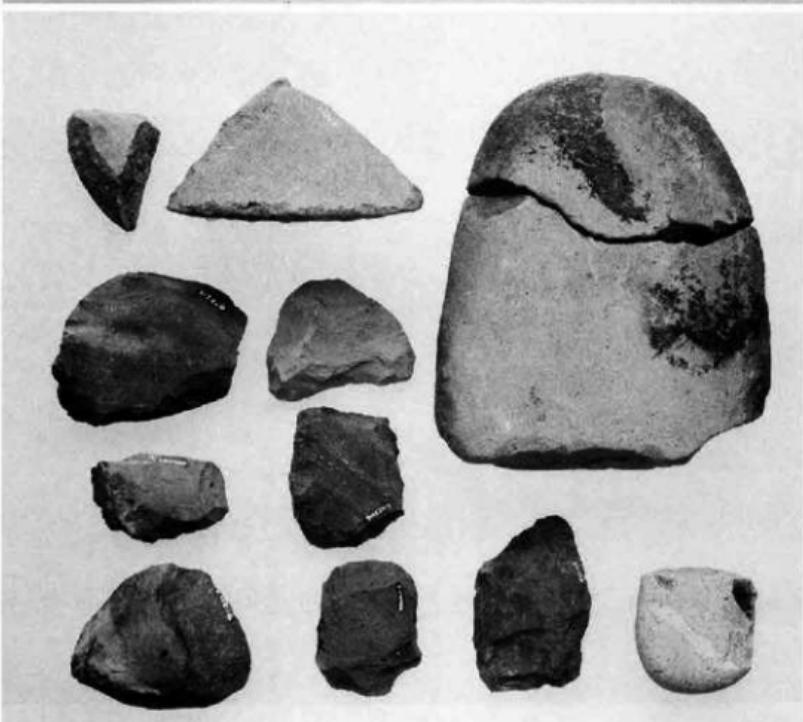


石器  
(打製石斧)  
(磨製石斧)

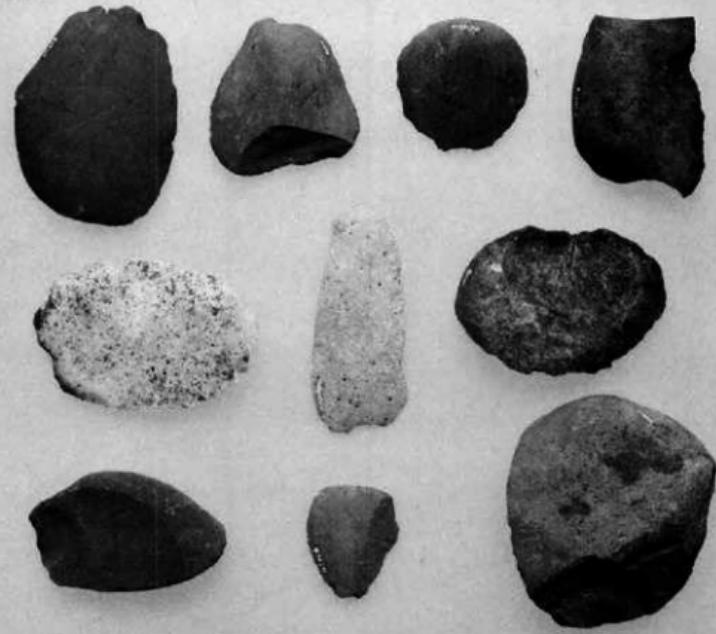
(中原遺跡)



石器  
(石錐・磨石他)



石器  
(石皿・礫器他)



石器  
(中原遺跡)



左 級石  
右 繩文土器

(中原遺跡)



銅片



銅片



銅片



SKI ~ 10・12

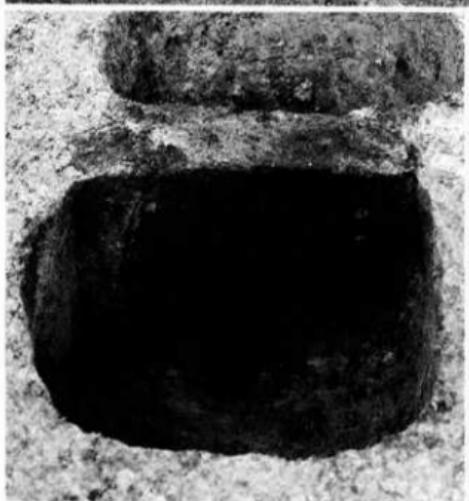
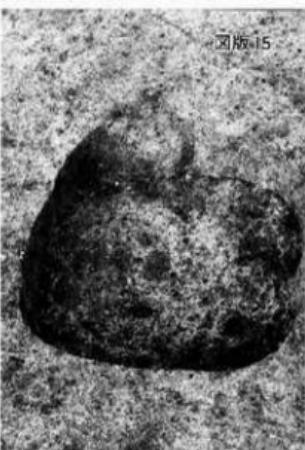


SKI

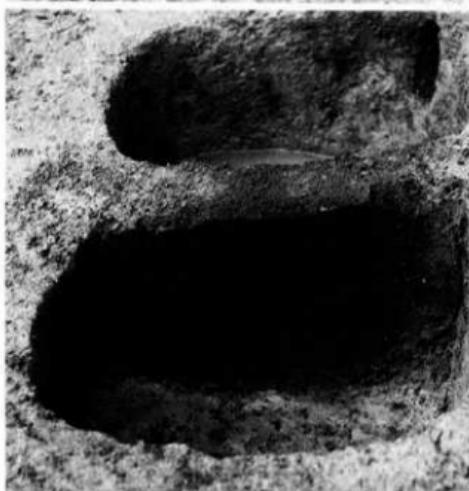
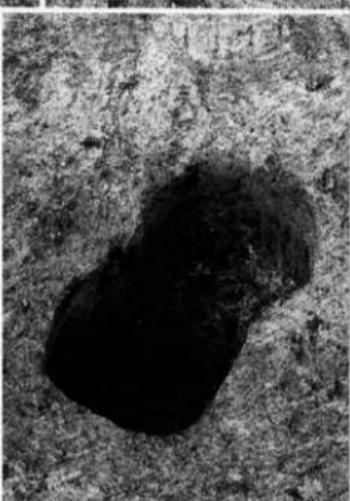
左 SKI3  
右 SX14



左 SK15  
右 SK16



SK17



SK18

(岩野 A 遺跡)



SK19



完掘状況  
(西区)



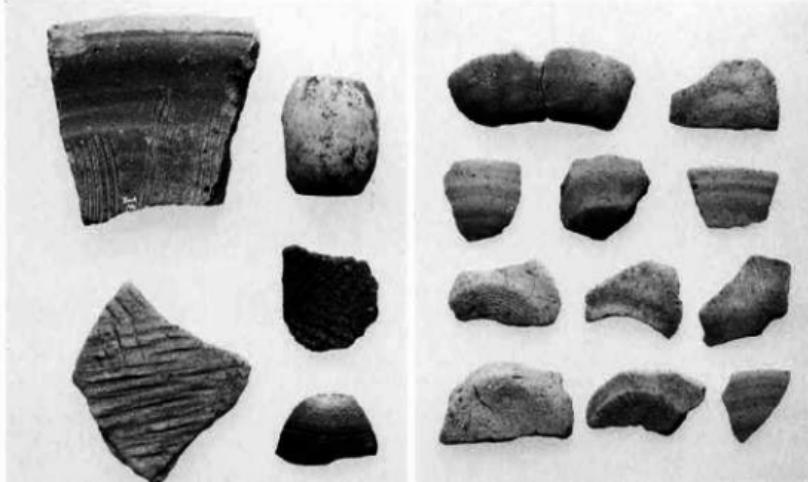
同上  
(東区)



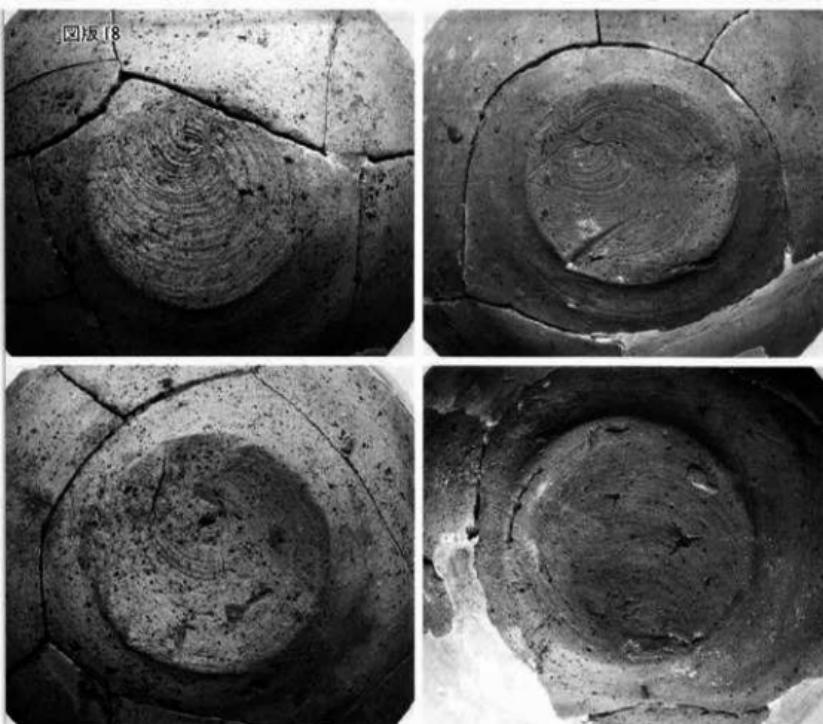
SX14  
出土土器



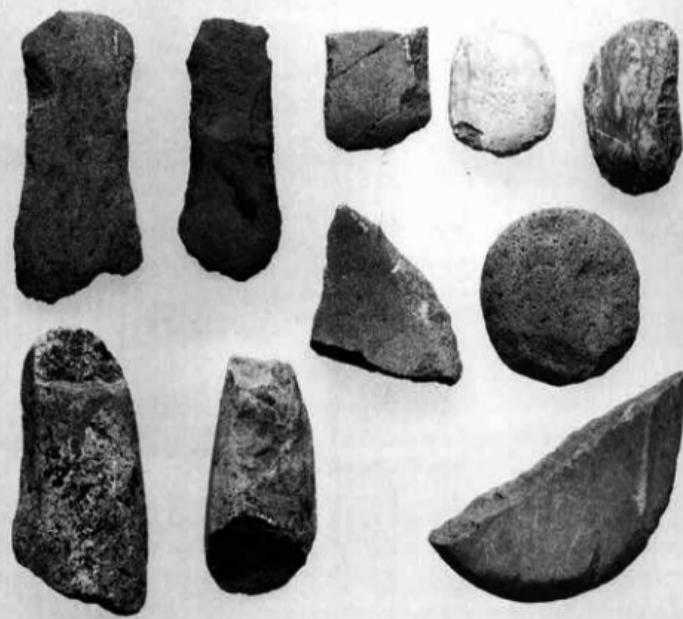
SX14  
出土土器、他



土器



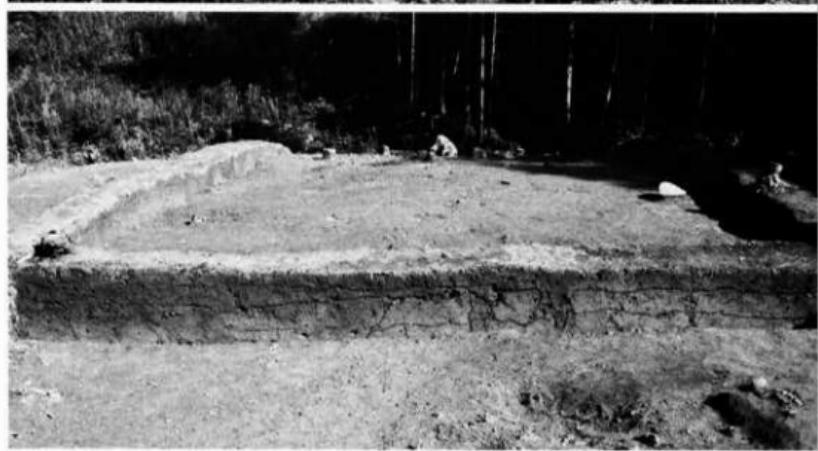
土器底部



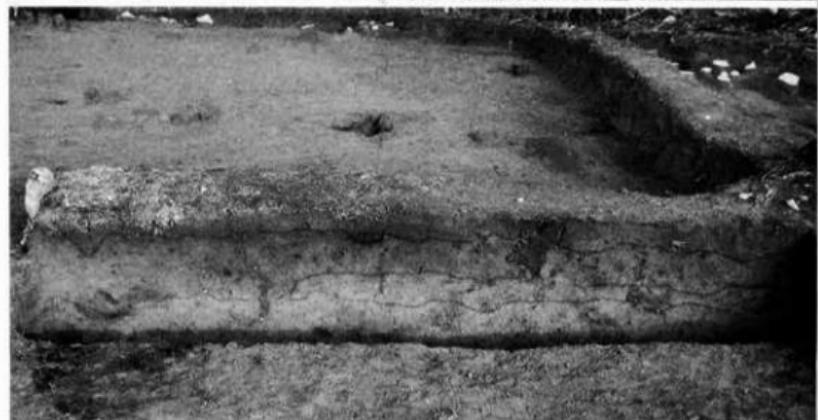
石器



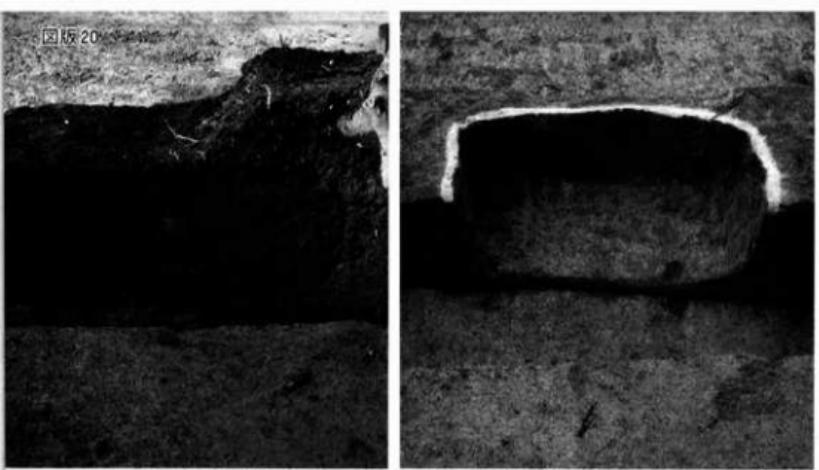
遺跡遠景



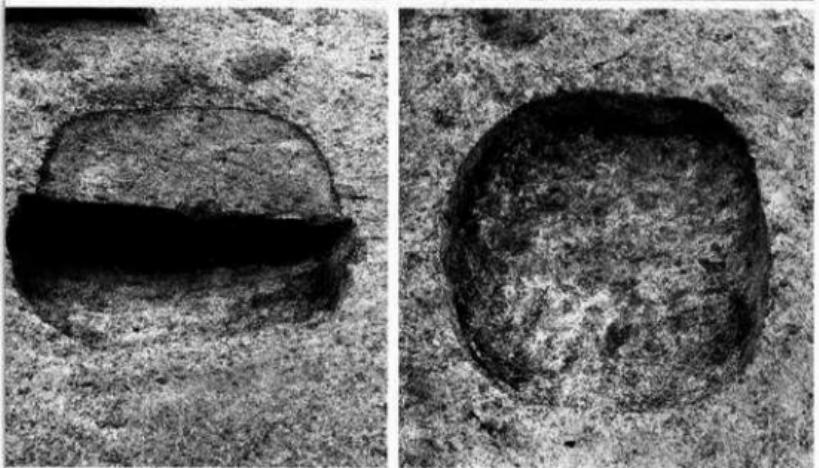
土層断面



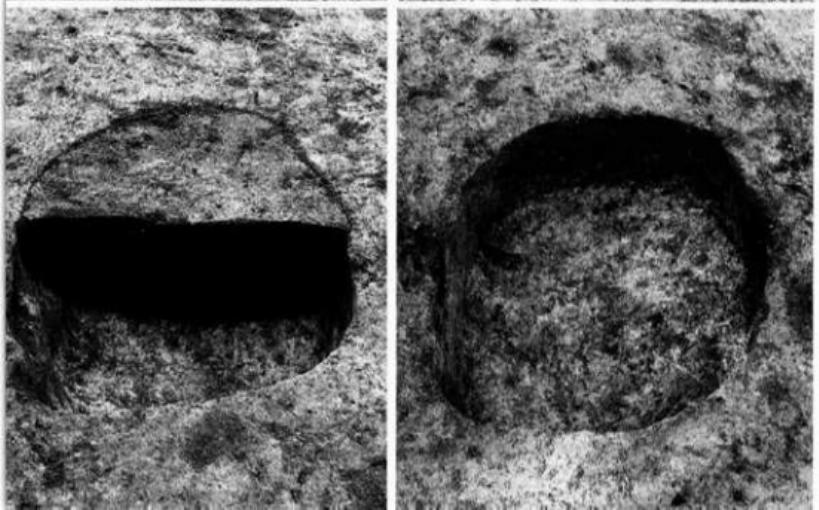
同上



SKI



SK2

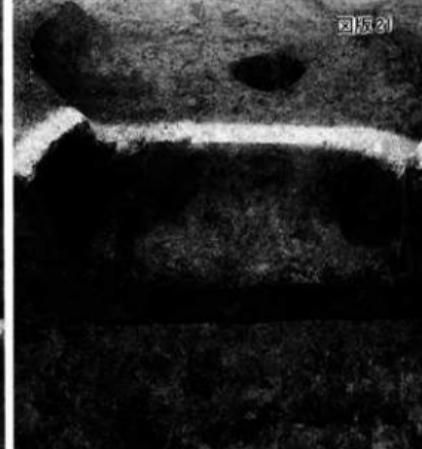


SK3

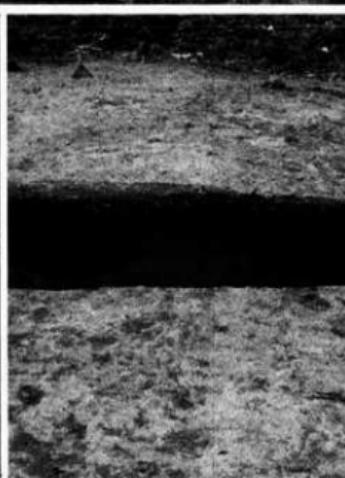
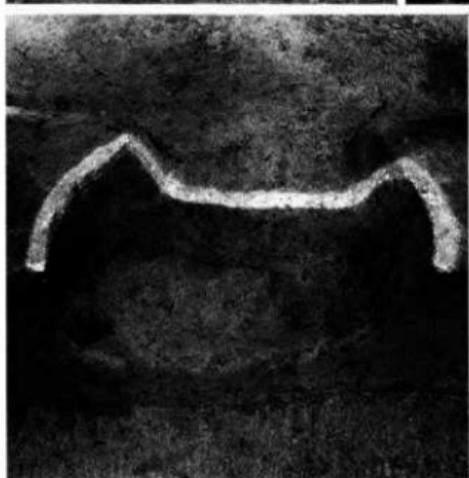
(岩野 E 遺跡)

図版21

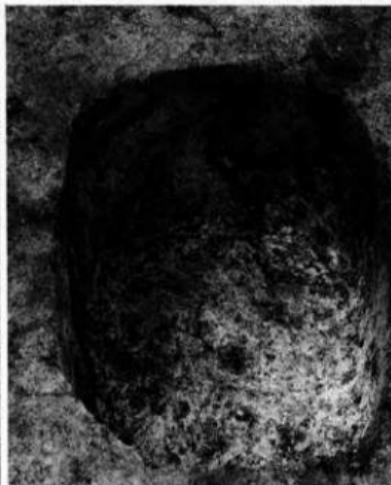
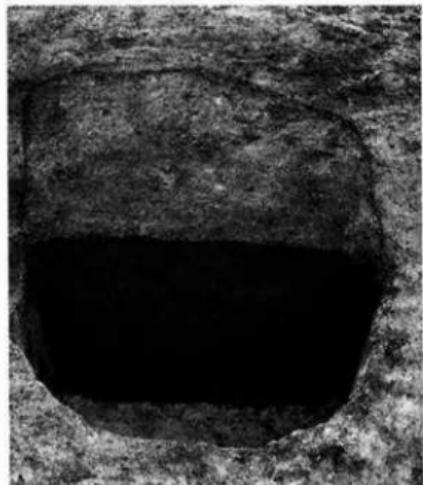
左 SK4  
右 SK5



左 SK6  
右 SK5・SK6



SK7

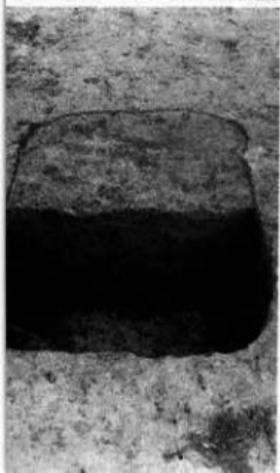




SK8



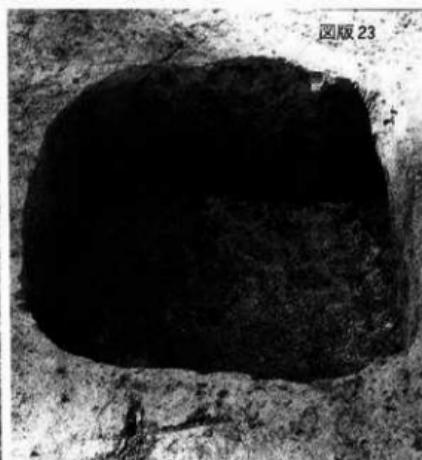
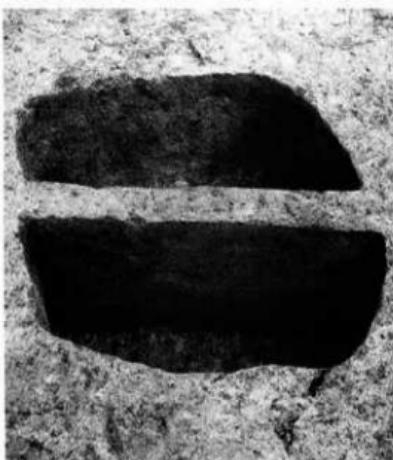
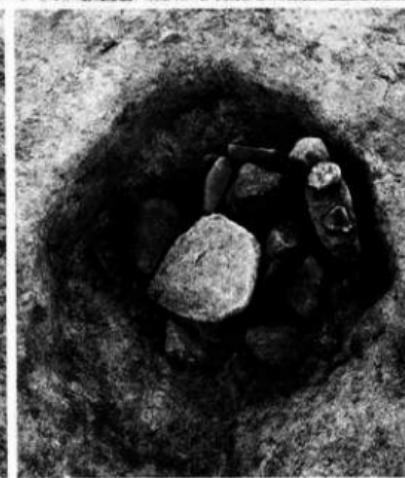
SK9



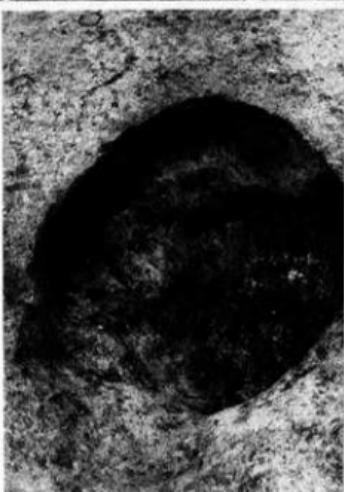
SK10

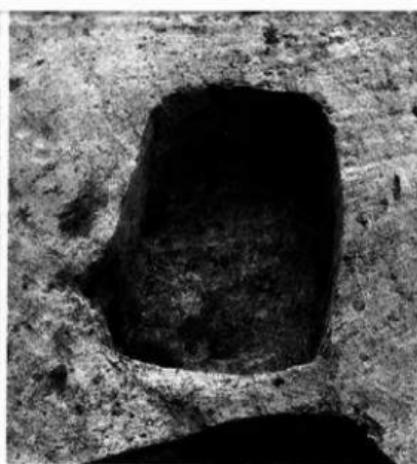
(岩野 E 遺跡)

SKII

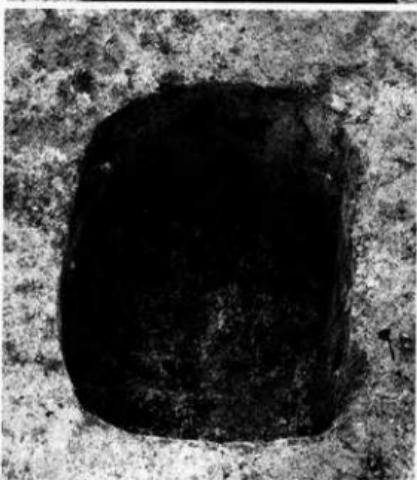
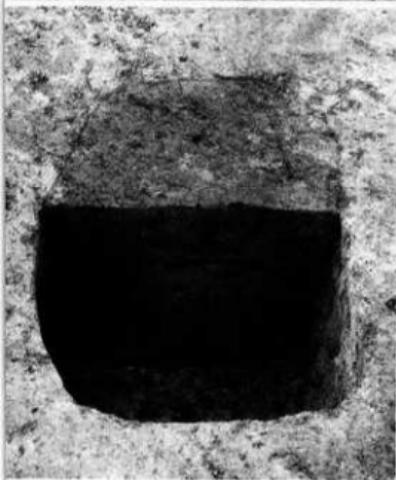
左 SKI2  
右 SKI3

SKI3

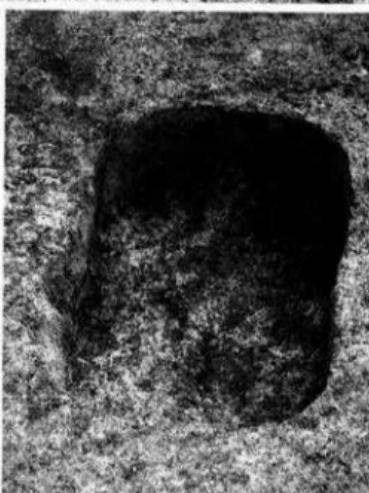




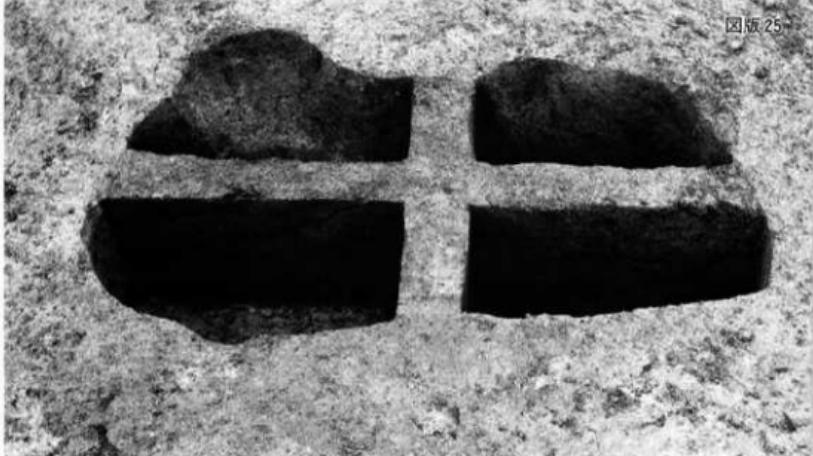
SK14

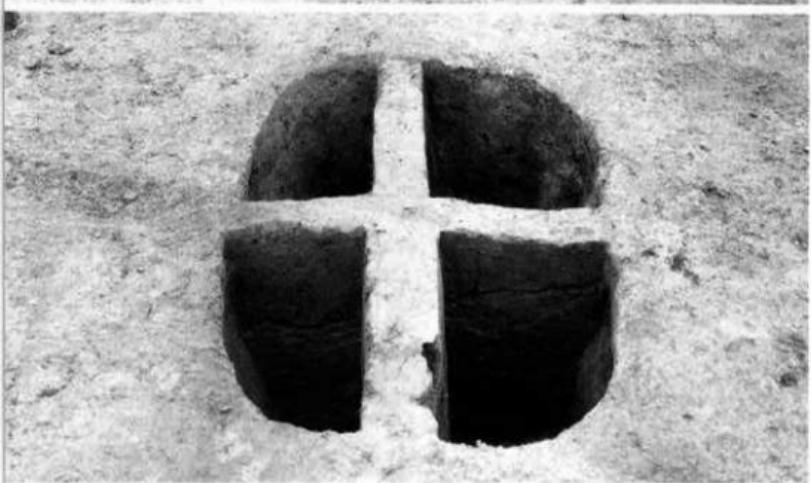
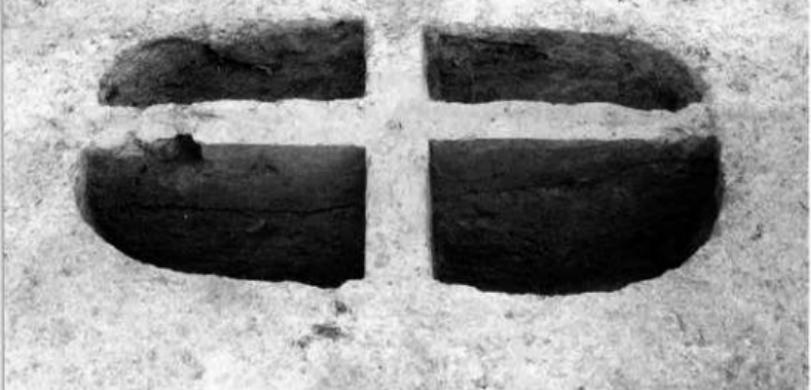


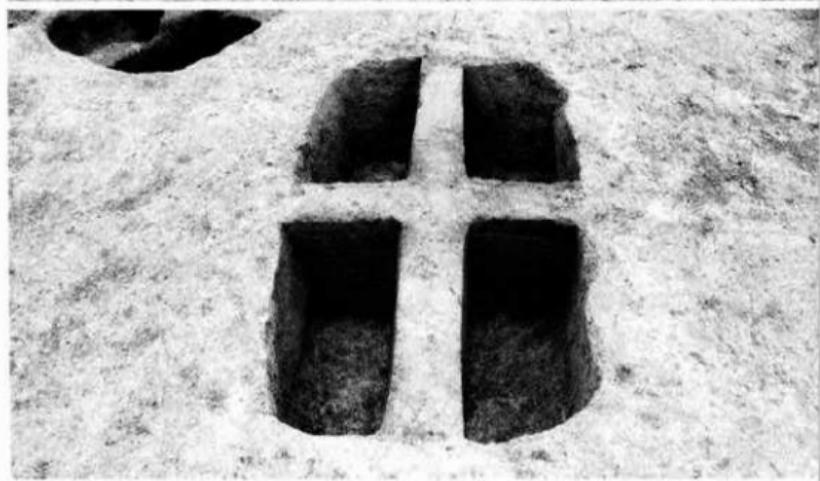
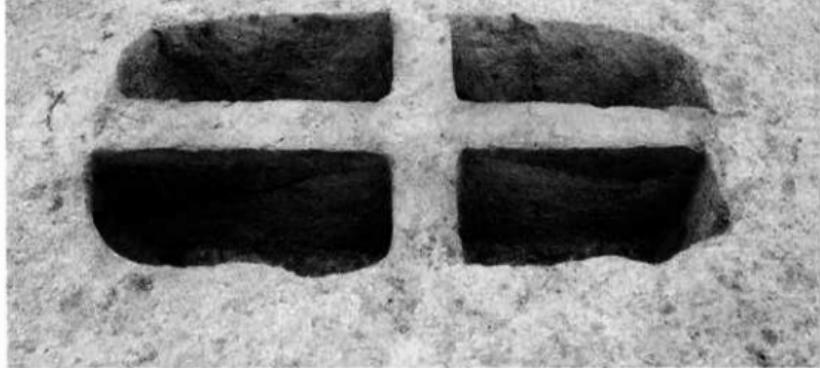
SK15

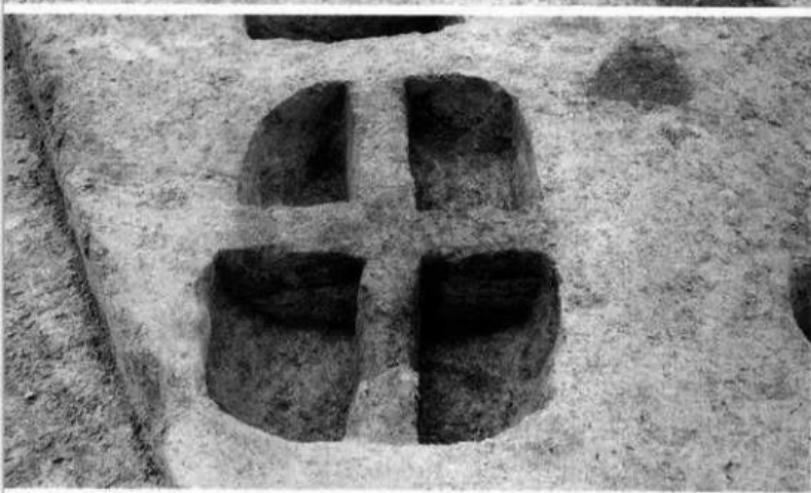
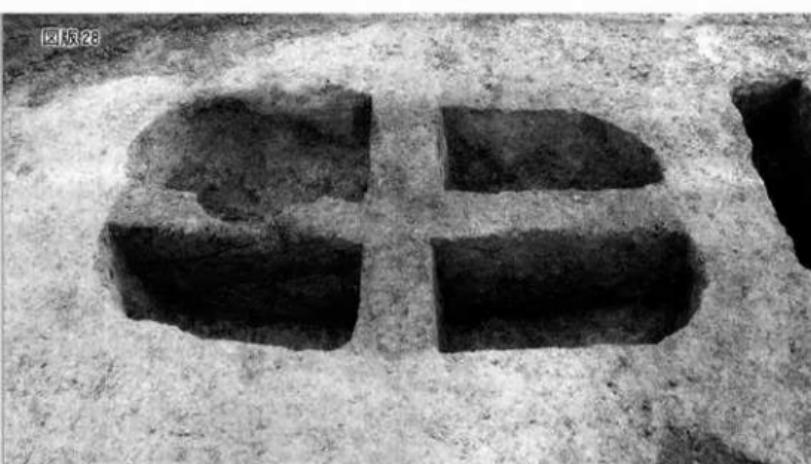


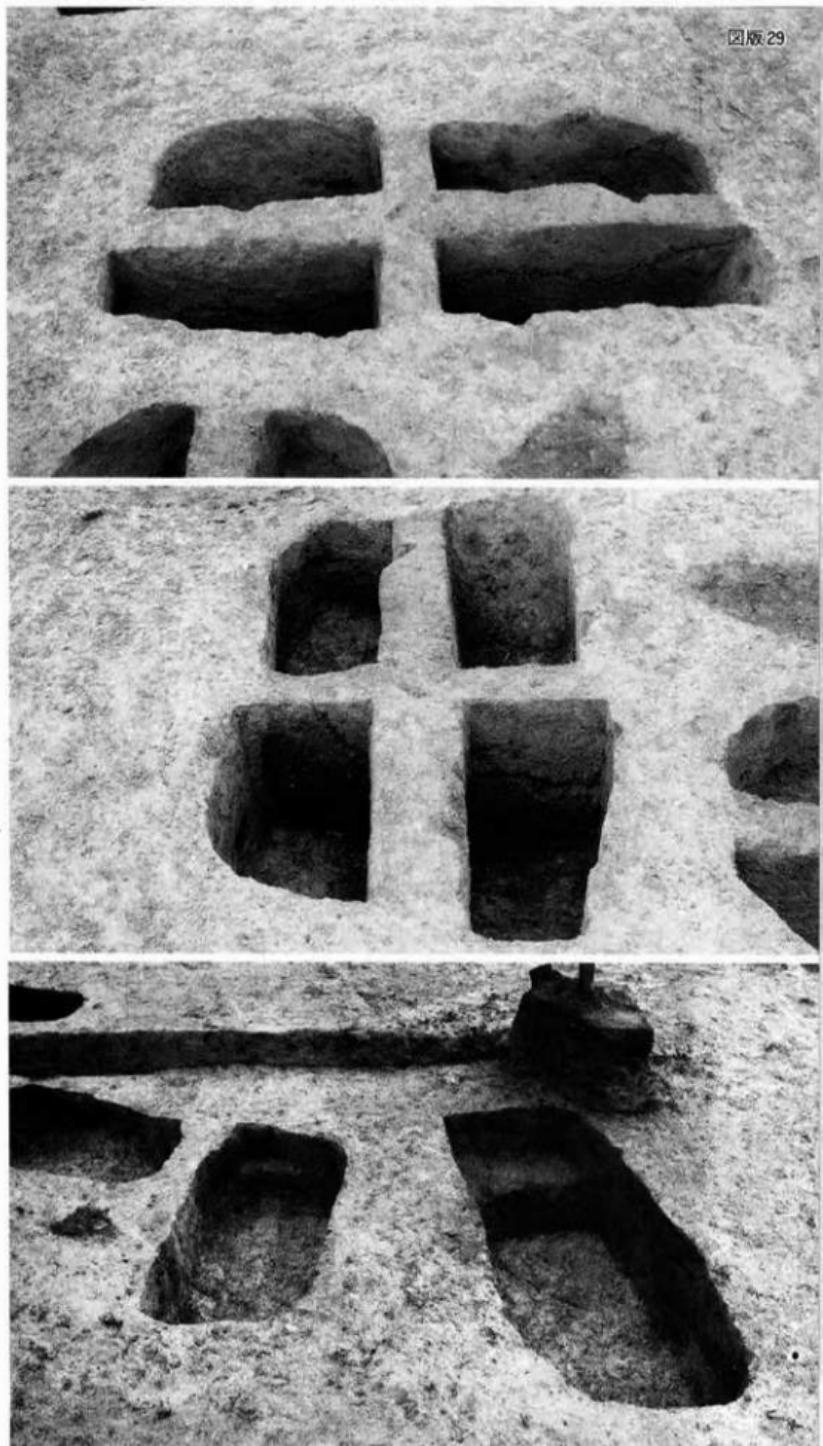
SK17

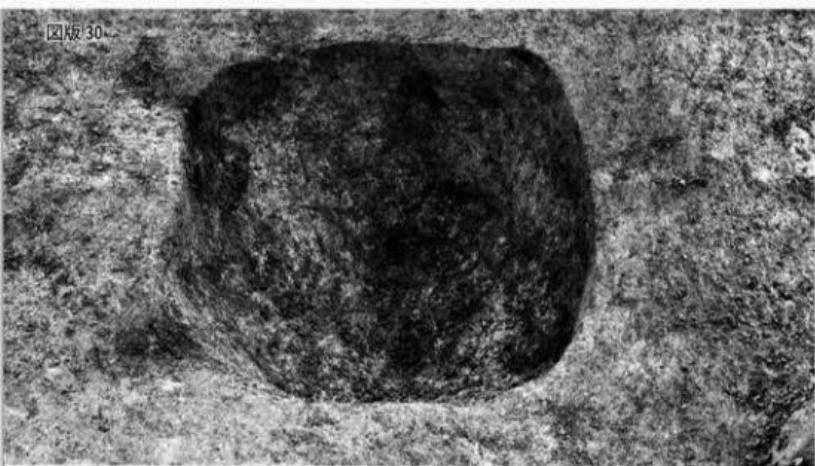












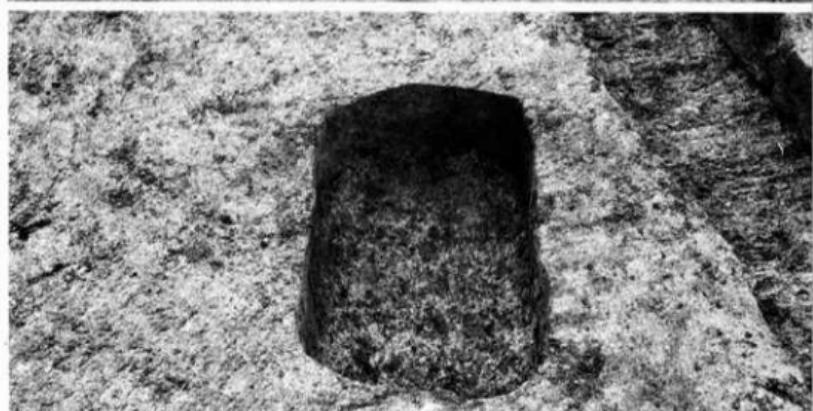
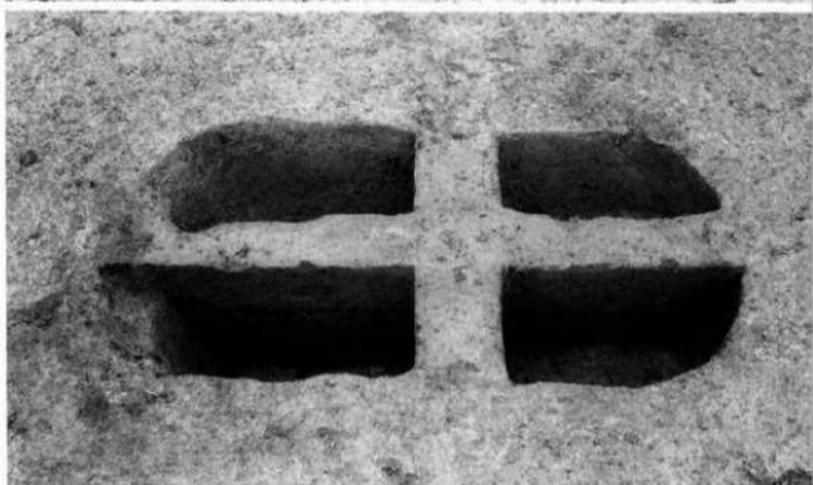
SK22



SK23



同上





SK25

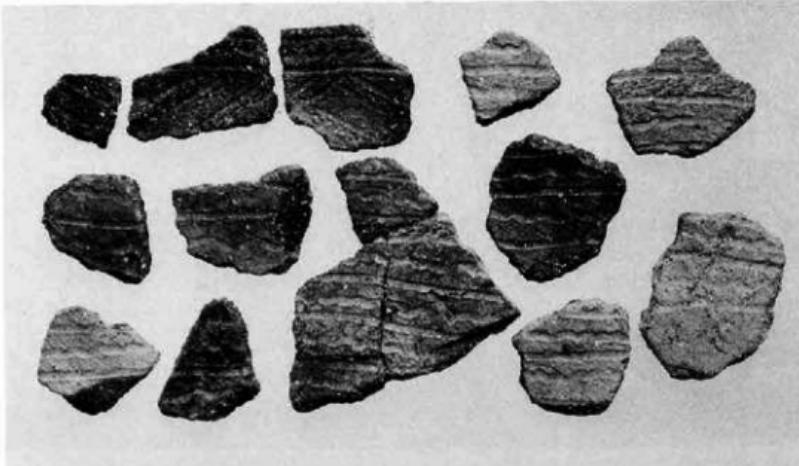


同上



完堀状況

(岩野 E 遗跡)

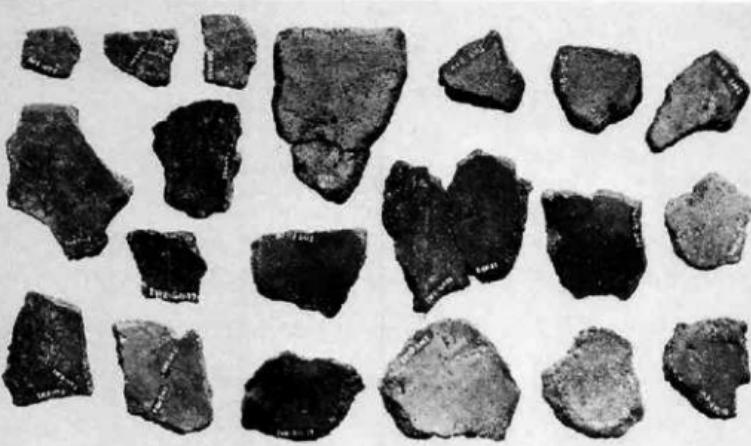
土器  
(第Ⅱ類a)土器  
(同上)土器  
(第Ⅱ類a)



土器  
(第Ⅱ類a)

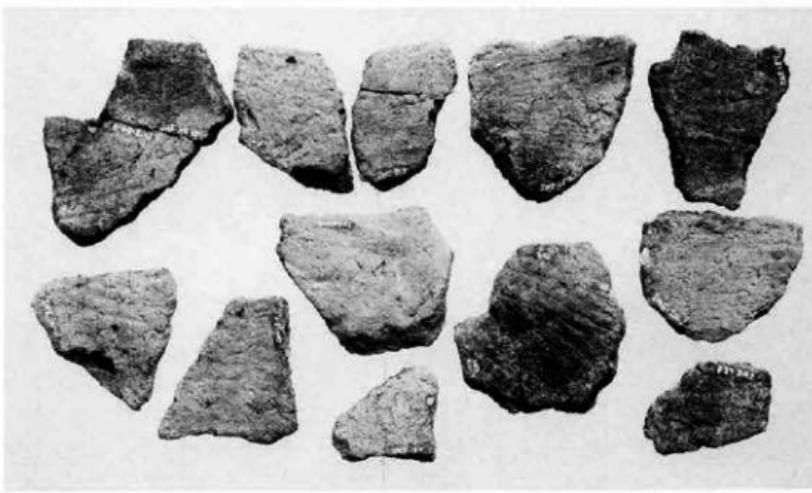


土器  
(第Ⅲ類)



同上(裏)

(岩野E遺跡)

土器  
(第Ⅱ類b)

同上(裏)

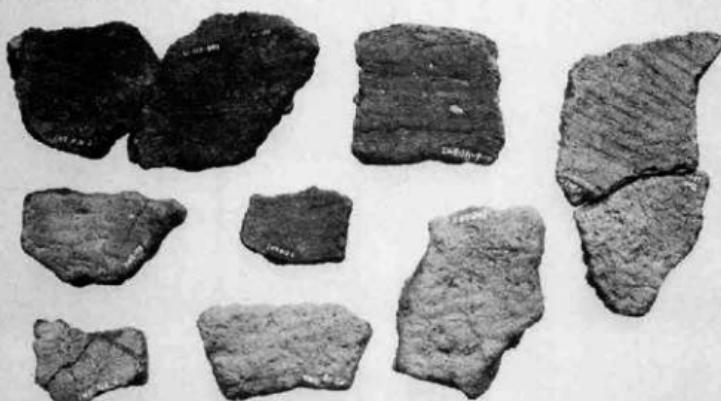
土器  
(第Ⅲ類)



土器  
(第Ⅶ類裏)

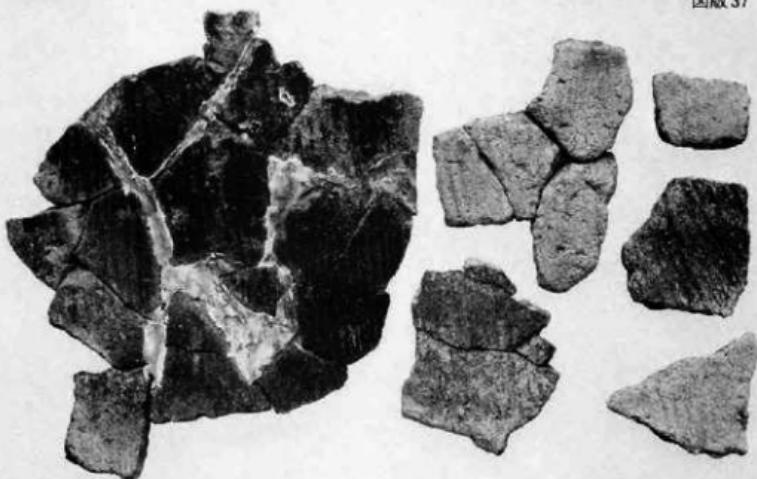
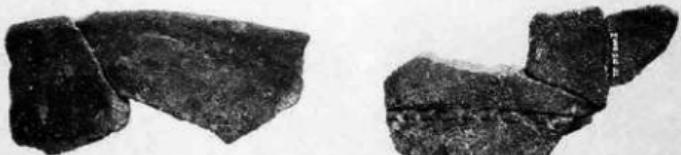
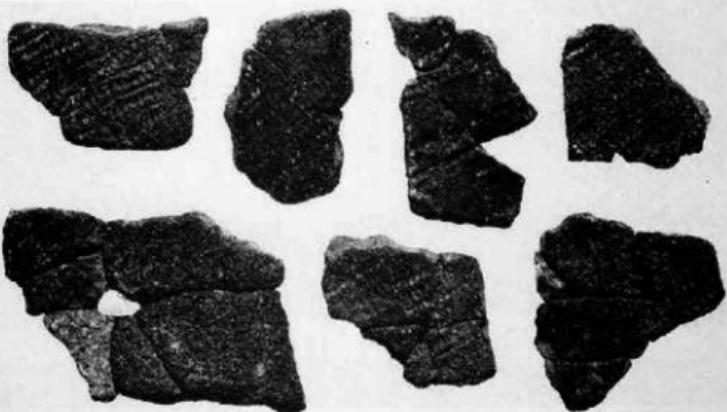


土器  
(第Ⅷ類b)  
(第N - V類)

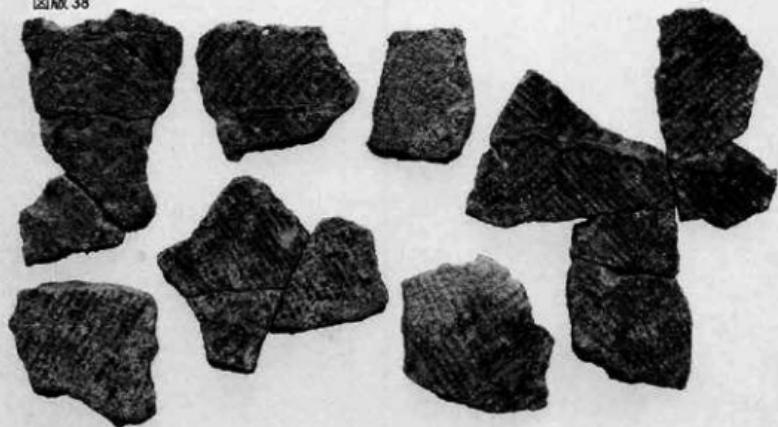


同上(裏)

(岩野 E 遺跡)

土器  
(第Ⅱ類c)土器  
(第Ⅱ類)

同上



土器  
(第10類 a)



同上

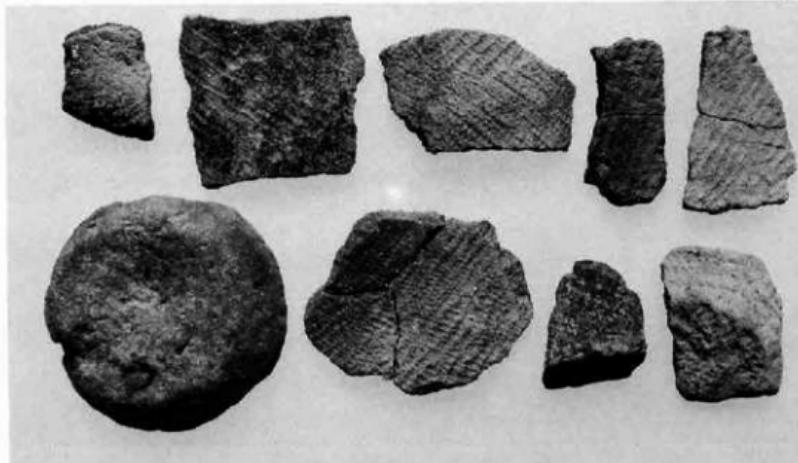


同上

(岩野 E 遺跡)

土器  
(第2類 a)

同上

土器  
(第2類 b)



土器  
(第1類)



土器

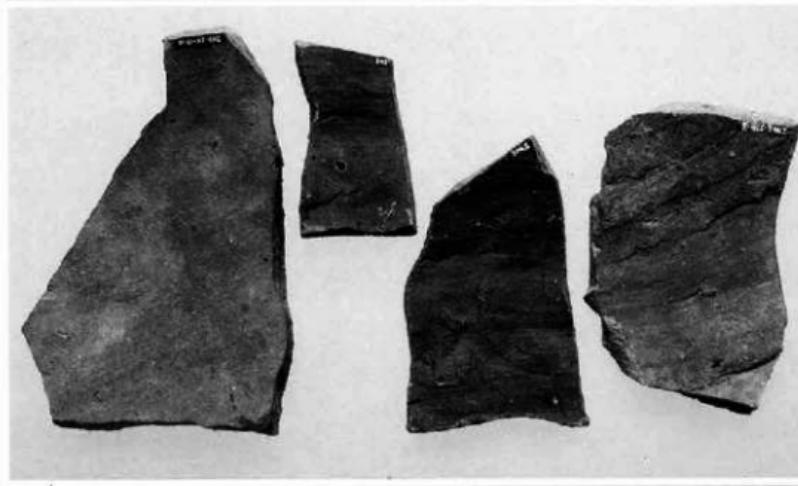


押型文土器  
他

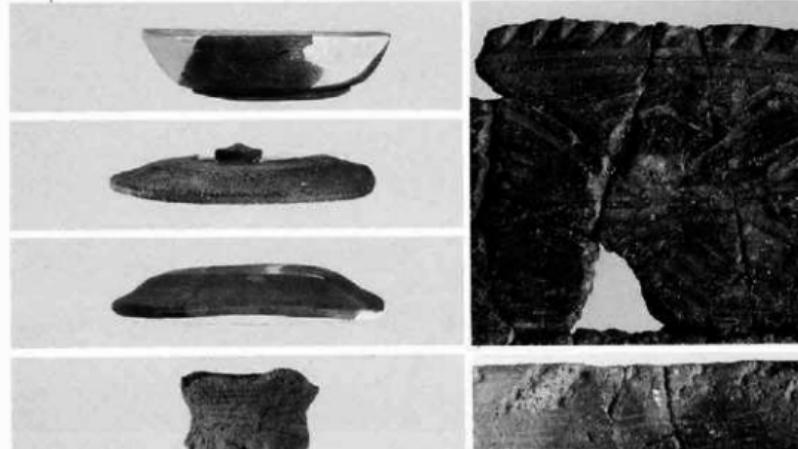
(岩野 E 遺跡)



須恵器・他



同上



須恵器・他

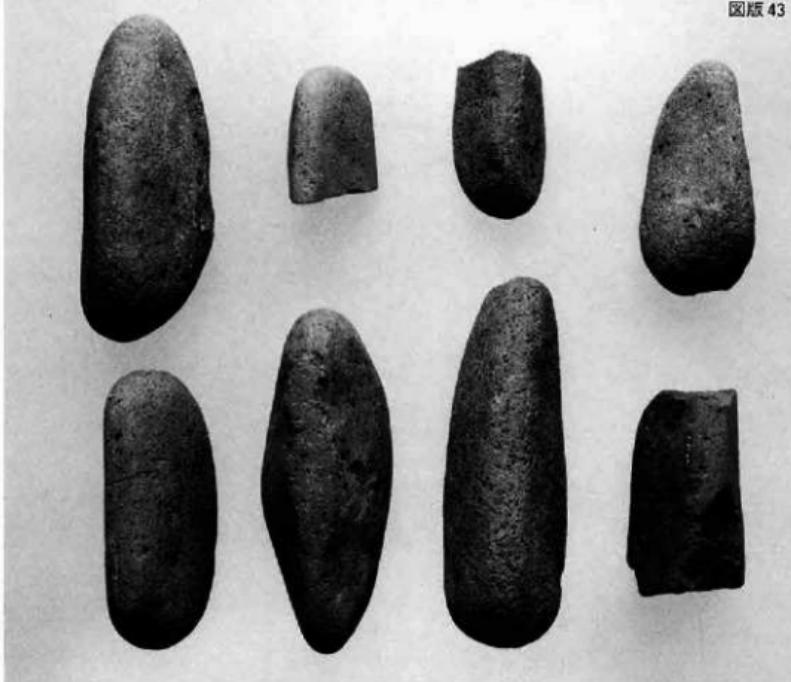


磨製石斧

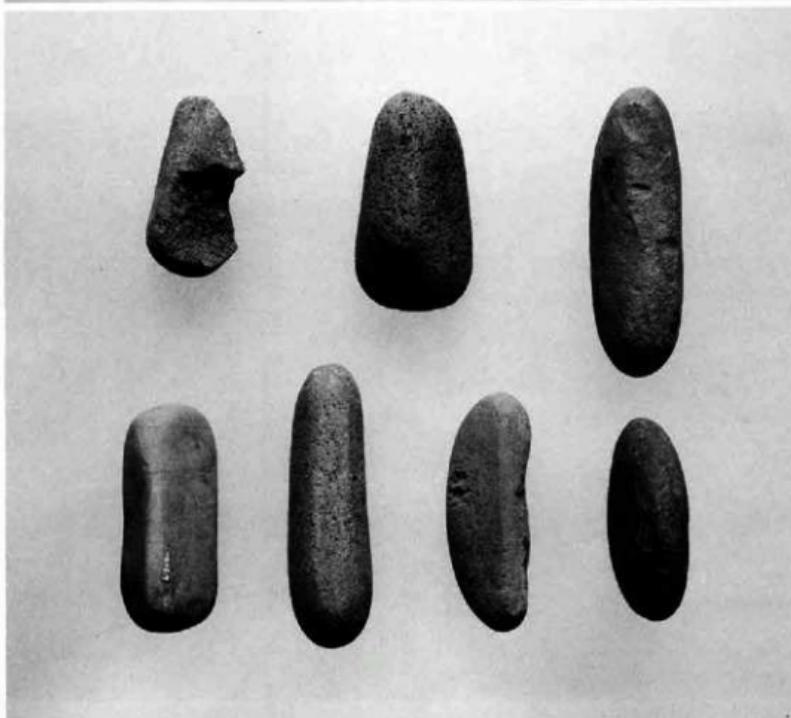


打製石斧

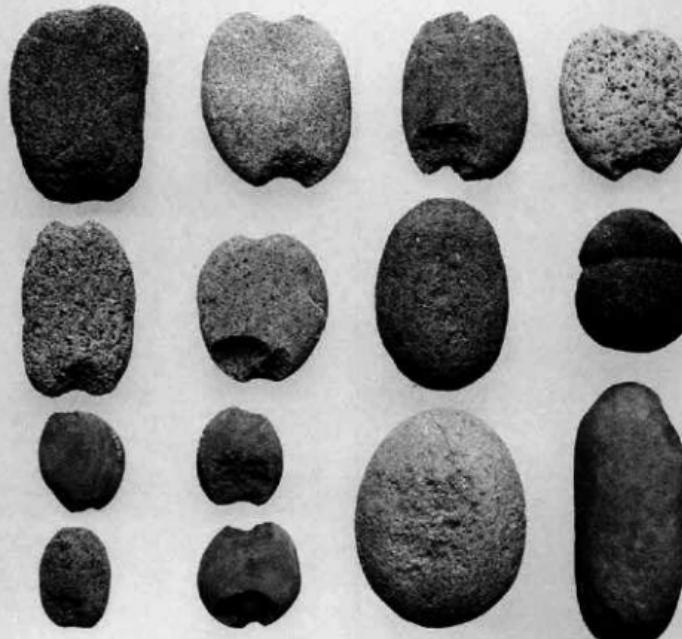
(岩野 E 遺跡)



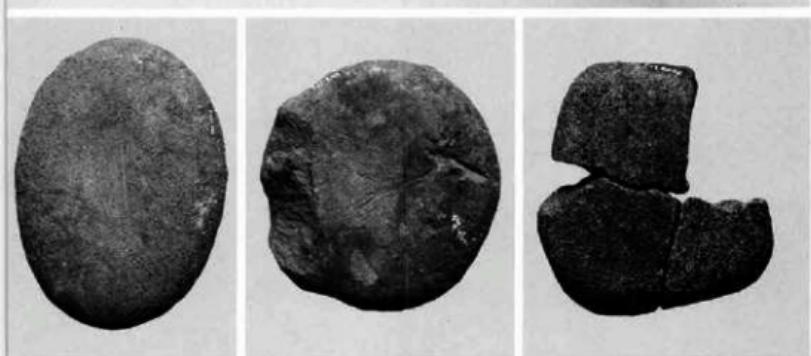
磨石



同上



石錘・凹石

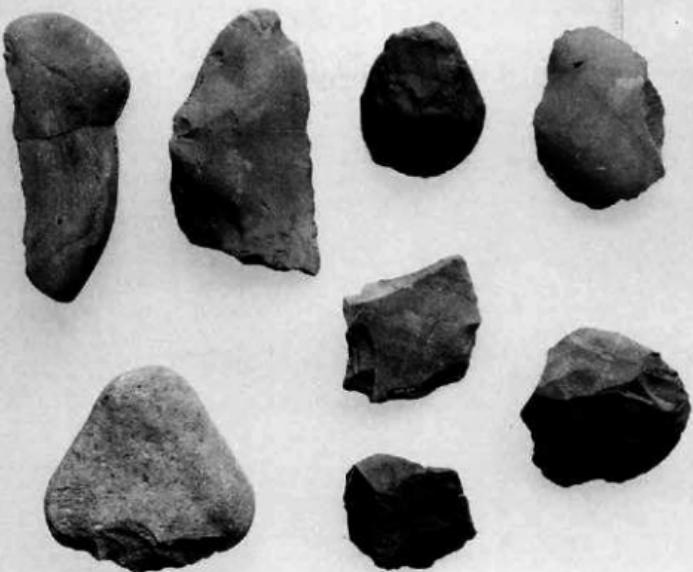


石皿

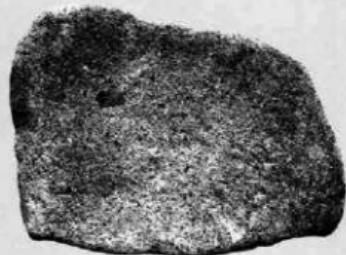


同上

(岩野 E 遺跡)

石器  
(他器他)石器  
(剥片他)

(岩野 E 遺跡)



石器  
(石皿)

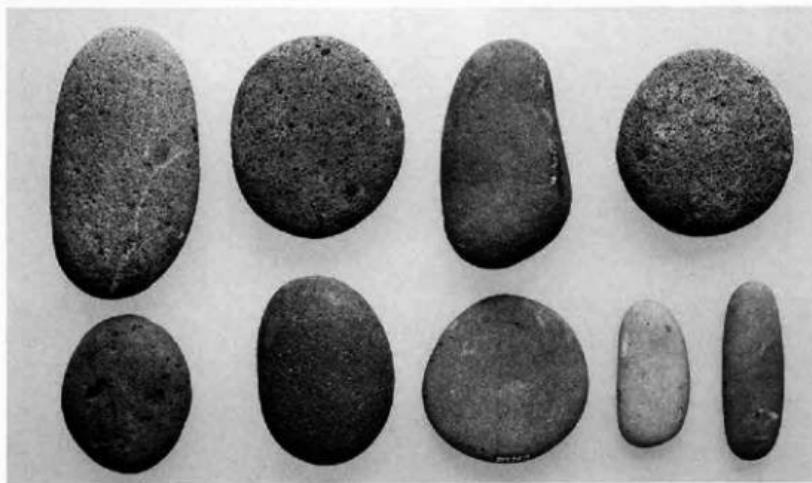


石器  
(二次加工を有する  
刮片・块状耳飾)

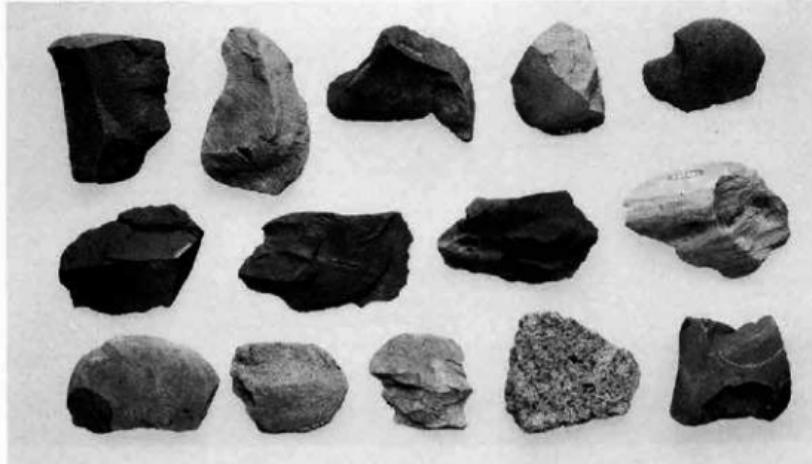


刮片

(岩野 E 遺跡)

磨製石斧  
素材砾他

円砾



剝片



剥片



剥片



剥片

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第45集

北陸自動車道

## 糸魚川地区発掘調査報告書 I

- ・中原遺跡
- ・岩野A遺跡
- ・岩野E遺跡

昭和61年9月25日 印刷 発行 新潟県教育委員会

昭和61年9月30日 発行 印刷 北越印刷株式会社

長岡市福住1丁目6-27

電話 (0258) 33-0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第45集『中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』正誤表

頁	位置	誤	正
図版6	上段	左SK19	左SX18
図版6	上段	右SK18	右SX19
図版21	上段	右SK5	右SK6
図版21	中段	左SK6	左SK5